
転生者の被魔師

不純と神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者の被魔師

【Nコード】

N5922X

【作者名】

不純と神

【あらすじ】

これはよくある転生ものの死にかたで死んで転生した兄妹の物語です。

まったくもつての駄文です、突然やめるかもしれませんが、それでも言い方は読んでくれると嬉しいです。

若干とある魔術の禁書目録とクロスオーバーしていますが、基本的には青エクの原作にそっています。

プロローグ（前書き）

読もうと思ってありがとうございます、不純の道化です。

書きかけの小説をやめたその日に新しい小説を書いた大馬鹿者です。

では本文です。

プロローグ

?? ? ? SIDE

俺はさつき死んだ。

別段珍しい死にかたではない、飲酒運転の車にはねられ死んだ。変わっているところと言ったら歳がさほど離れていない妹と死んだことだろうか、まあとりあえず。

「知らない天井だ」

「うーん、君といい君の妹といいもうちょっと驚いてくれないかな？」

なんか小さいのがしゃべりかけてきた

「誰だお前？」

「スル ！？え？え？死んだはずなのに誰かにしゃべりかけられたのに華麗にスル ！？」

騒がしいな、この低身長 минимумは

「ま、まあ私は神様だ！（エッヘン）」

神？このチツこい女みたいな容姿のが？無い胸張ってるし

「そうか、で、神様とやらが何の用だ？」

「え！？神様にあつたのに拜むわけでもなく、何するわけでもなく拳句の果てには敬語さえ使わない！？初めてだよこんなの！」

五月蠅いな、ん？何か重いぞ？

「ああ、今妹さんが上にのっかているからそれで重いんだと思うよ」

「そうか、さつきの質問に関してだが俺は神様なんか無責任な人間が作り出した愚像的なものにしかすぎず、もし入ようがそこまで絶

対的な力は無いと思っっているからな」

「うーん、たしかにそのとうりなんだけどね。そつだそつだ、二番目の質問だけどね」

二番目の質問？ああ、あれか

「すみません、あなた達を間違えて不幸な人生に追いやつた挙句殺してしまいました。お詫びとしては何ですがあなた達を青エクの世界に転生させてあげてあげます」

・・・

「殺すぞテメえ」

お、妹がしゃべつた。

「すみませんすみません、メンゴメンゴ、代わりに能力とかつけてあげるから許してください、そうしないと上にはばれて怒られるんだよ」

思い気つし、自分の保身のためだなこりやでも、まあ、悪くはないな。

「どんな能力だ？」

「望むならチートでも、奇跡の右でも、賢者の石でも、不老不死でもあげるよ？」

うーん、そこまでだと。つーか全部チートじゃね？

「ちなみにあなた達がどうあがこうが原作ブレイクはできないからね」

まあ、いいけど。

「決めるからちよつと待つて、ほらお前も一緒の考えるぞ」

「はい、どんなのがいいかなー、あいつを殺す能力とかはどうだろつ」

わざと声に出してるなこいつは

「ひいつ!」

ビビるなよ・・・っーか拒むことはできんのか?

十分後

「よし決めた!」

「私も!」

うん、一緒に言おうと画策していたんだなこれが

「ど、どんな(ビクビク」

まだビビってるよ。

「手騎士^{テイマー}の才能、出せるのは狐妖怪全般、もちろん白面金剛九尾もな。あと騎士^{ナイト}の才能もな、魔剣をつけてくれると嬉しい。それから勉強の才能は今のままでいいや」

コンだけありやあ十分

神「え?それだけ?そりゃあ、強いけどたったそれだけでいいの?」

「俺はな、妹のも聞いてやれ」

「う、うん(ビクビク」

だからなぜビビる?あそつか、神の二言は禁忌だっけ?

「私はお兄ちゃんと一緒に手騎士^{テイマー}の才能、出せるのは狸妖怪系全般。もちろん陰神刑部狸もね。あと竜騎士^{ドラグーン}の才能もね、銃も付けといてあとは勉強の才能も今のままでいいし、まあこれくらいで許してやるよ」

「ありがとうございます(土下座」

中三の女子中学生が神をひれ伏してる光景。うーんシールドだ

「ああ、両親だけど青い夜で死んだ上一級被魔師で学校はもちろん正十字学園、被魔塾にも通っているし、妹さんの方は特別に被魔塾にはお兄さんと一緒に通ってる、お兄さんは奥村燐と一緒にのクラス、もちろん希望どりの才能、武器、あと私からのささやかなプレゼントをあげるよ。これでいい？」

「おい、ささやかなプレゼントって何だ？
とんでもないものじゃないよな？」

「えーと、あれだ、人脈かな。それと、とある魔術の禁書目録の魔術の才能、あ！ちなみに才能は全部努力しないと開花しないからね」
それならいい、苦勞はある程度した方がいいしね。

「それから、今の名前は忘れてもらうよ、記憶もあいまいになるから」

転生の意味ねーじゃねーか！？てか床に穴！？

「逝ってらっしゃい。おつと間違えた行ってらっしゃい」
ニタニタ笑うな　！！！！

プロローグ（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
明日も投稿すると思います。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

被魔塾（前書き）

登場人物紹介はどうでしたか？

では本文です。

被魔塾

八神SIDE

俺は今、正十字学園の入学式を受けている。

それにしても偉い奴はどうしてああも長ったらしい話が好きなんだろうか、長いだけでたいした中身がない、非効率の極みだな。

数時間後

今俺は被魔塾の教室で自己紹介をするらしい、どうも塾の方は今日から授業があるらしいそれでだろう（妹はなんやかんだあって塾と一緒に受けることになった）しかしあの奥村燐だったか？何であるに騒いでたんだ？

まあ、いいか。

どうせそんな設定何だろうしな。

お、次は俺の番かじゃあいつてやるか。

「初めまして、神木八神です。手騎士^{テイマー}、詠唱騎士^{アリア}、騎士志望^{ナイト}です。この剣は父親の形見で魔剣です、銘を『贄殿遮那^{「えとのしやな」}』といいます、また魔法円はすでに持っています。ちなみに九城は妹で出雲はいとこです。」

なんか、出雲が睨んできたような気がするな、まあ、あいつとは折り合いが悪いしな。

次は九城か、「転生者でーッす」とか言わないよな？

「初めまして、歳は皆さんより一つ下ですがよろしくお願ひします。お兄ちゃんテイマーの言った事は本当だからね。なりたいのは手騎士リア、詠唱ドラグーン騎士、竜騎士ドラグーンです。お兄ちゃん同様魔法円はすでに持っています。」
はあ、良かった。ここまで来てこの設定を壊したくはないしな。

てかもう授業があるのか？えーと一番最初はの授業は・・・魔障か・・・もうあるしいいか、その次の授業は、お！魔法円か、使い魔がだせるな、なにだそうかな？白面金剛九尾は・・・今の状態じゃ出せないし・・・『魔女狩りの王』インケンティウスはどうか？強すぎるからやっぱここは、白孤はくこが妥当かな？あと炎剣と、まあこれでいいか。

二限目

「稲荷神に恐み恐み白す 為す所の願ひとして成就せずということなし（ぼんっ）」

白孤が二体でたな、しかしあれだけでなんで威張れるんだ？

「そなたは何を望む！そなたは何を欲する！厚かましき者よ（ぼんっ）」

化け狸が三体出てきたな、欠伸をしてるよあいつ

「ほう、化け狸が三体か・・・凄まじい才能だな・・・」

ネイガウス先生が褒めてるけどあれは九城の本気じゃないぞ

「ん？たったこれだけが？望むなら陰神刑部狸でも出そうか？ネイガウス先生」

「な！？そんな大妖怪まで出せるのか！？」

まあ、本当に出せるだけなんだがな

「うん、そうだけど。ちなみにお兄ちゃんはお白面金剛九尾も出せるよ」

「そうか・・・いや出さなくていい、ここで出されると生徒達が才能という壁に当たってしまう可能性があるからな・・・」
「そりゃそうだ、別にどうでもいいけどな」

「じゃあ次俺ね」

「炎よ (Kenaz)」
みんながこつちを振り向いてるな、さっきの九城の説明でこつちを見てるんだろつがな・・・、じゃあ見せてやるよ、神からの贈り物をな。

SIDEOUT

「炎よ (kenaz)」

その言葉と同時に八神は大量のカードをまいた。カードはラミネート加工したルーンカード、その枚数は数千枚、数としてはたいしたことはないがここで見せるには十分すぎる威力を込められる枚数であつた。

「巨人に苦痛の贈り物を (PurisazNupizG edo)」

その言葉と同時に炎剣が湧きでた。

「この剣は摂氏2500度、人肉は摂氏2000度で『焼かれる』前に『溶ける』し、悪魔にも十分すぎるほどに威力があるな。どうも下級使い魔を大量に出して圧縮したものらしいな」

淡々と炎剣の説明をする八神に対して塾生たちは数人を除いて呆然とした、そして例外の一人がこう言った。

「すげー！どうやるんだそれ!？」

屈託のない言葉どりの羨む顔で燐が八神にこう言ったそして八神が

「こいつはどうも特殊な才能らしくな、親戚は妹を除いて誰も出来なかったぞ」

といい、なんやかんやでこの二人は友人になった。

夜

「どうでしたか？」

夜、ある学生寮で雪男が何者かに電話をかけていた。

「まあカタかったですですが初授業にしては上出来でしたよ」

ある人物とは、メフィスト・フェレスこの学園の理事長にして正十字騎士団の名誉騎士であった

「・・・いえ僕じゃなくて」

自分に対する評価をあまり気にせず別の事をきりだした。

「ふむ」

「あの炎は悪魔ちからに有効でした、使えます。不安定でまだ感情に振り回されているようですがセンスはいいようだ」

今相談しているのは奥村燐の力の事であった。

「自在に使えるようになれば我々正十字騎士団にとって最高にユニークで最強の兵器になるでしょう」

「じゃあ・・・」

「ただし監視は必要です使い物になる前に騎士團上層にバレたくないですからね」

「まあ、時間の問題でしょうが・・・」

「・・・わかっていません。それと・・・」

燐に対する事は終わりそして・・・

「ええ、あの八神君の技術ですね。私も初めてみました、下級悪魔とはいえあれだけの数を出すと・・・しかも圧縮するとなると・・・彼らもまた監視が必要です」

「彼ら？彼じゃなくてですか？」

解っているながら。そんな口調で問いかける雪男の対し

「九城さんもです」

半ばめんどくさそうに答えるメフィスト

「・・・解りました。そうします」

「結構、結構ではまだどこかで」

こうして、危険因子および謎の因子の相談が終わっていった

被魔塾（後書き）

うわー、構成がめちゃくちゃだ　！！！！
読んでくれてありがとうございます。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

記憶（前書き）

今回は主人公の転生前の話を行います。

では本文です。

記憶

八神SIDE

塾が終わった、そのあと隣にルーンの事を教えた。（隣はすぐに頭を抱えて雪男先生に連れて行かれた）

九城は鍵で家に帰った。俺は寮に帰って寝ることにした。

夢を見た、転生する前の、唯一はっきりと覚えているあの事を

俺と九城で（転生前の名前は神によって消された）家に帰っていた。いつもどおり、本当にいつもどおりだった。

当時俺は中三、九城は中二だった、性格は破綻はしていなかった。それどころか優等生だったと思う、勉強の才能はその当時のままなはずだし、たしかどこかの委員会の委員長をやってたはずだ。

家に帰って扉をあけると父親と母親が死んでいた、いや、殺されていた。

強盗が一人包丁を持って立っていた。

その時俺は尊敬していたはずの両親を尊敬できなくなった。

二人でかかれればやり返せたはずだ、そう思った。

強盗がこちらに襲いかかってきた、俺は確か授業で使った彫刻刀で応戦したはずだ、九城は台所について包丁を持ってきた。

それから俺達は、血を流しながら、返り血を浴びながら、強盗に勝った。

そのあと九城が警察にこう通報した。

九「両親が強盗に殺されていました。その強盗は私達がどうにかしました」

声色一つ変えずにこう言った。

警察が来た、婦警さんが「怖かったね、怖かったね」と言ってくれた。

実際俺は何も感じていなかった。

通夜が終わり、葬式も終わった後、学校が授業料を免除すると俺達二人にいった。私立で中高一貫校だったからありがたいと思った。

それから数日全ての人たちが俺達二人を慰めた。

だが俺達はその人たちを軽蔑するようになっていた。その人たちは大事なことを忘れている。

俺達も強盗同様、人を殺しているという事に

あの時俺達は強盗を殺した、目は虚ろだったから薬物中毒者かもと思った。

俺達二人で殺せた強盗に殺された両親、世間体のために俺達二人を見捨てた両親、俺は両親にそう言うレッテルを貼った。

それから表面上はいつもどおりを演じた。

九城は俺にのみ懐くようになった、他の人にはただの両親が死んだ後の普通の兄妹の光景だと思っていたようだがそれは違う、

親が殺された後は普通は学校なんか来ない。普通はそうにきまってる、それを忘れていた人たちをますます軽蔑するようになった。

神のミスで死ぬ頃にはたしかもう全てを設定としか見ていないような気がする。だが周りの人にはばれなかった、九城にはばれてたよ。うだがその関係だけは設定とは思えなかった、そう、それだけだった、それだけが設定では無く当時のまま、いやそれ以上に好きだった、九城が・・・

そんな夢を見た。そんな別にたいした事のない。そして、とてもとても大切な記憶の夢を・・・

記憶（後書き）

どうでしたか？これが主人公が破綻した原因です。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

崇り寺の子その一（前書き）

原作介入します。はい

ちなみに主人公は原作の知識は消されておりませ

では本文です。

崇り寺の子その一

八神SIDE

「起きなさい、奥村君。奥村君」

「スキヤキ!？」

何言っただこいつは？授業中（一限目）に寝てることにも驚いた
が起きた時にいったことについても驚いたぞ

「……………起きなさい。八神君も起こしてあげてくれませんか
？」

少し困り顔で言われても…………

「えーと、起こしても無駄だと思います。前起こしてみたら5分も
たたずに寝ました」

「何だと!？あつ、ス、スミマセン」

俺には何かないのか？

「なんやアイツ…………なにしに来てん
ん？誰だろう？」

「^い帰ねや」

勝呂君か。まあ、燐に対しては仕方ないかな？

しかし気合入ってるな。あの髪。校則違反じゃないのか？

「つて、おい!？燐!？なにやりきった顔で寝てんだ!？」

「奥村くん!しっかり!」

「……………チツ!」

なにいらいらしてんだあいつは？

対悪魔薬学

「それではこの間の小テストを返します。志摩くん」
「ほおい」

「私 自身あるよ！得意分野だもん」
こいつは確かこの前この塾に入った、杜山しえみだったか？隣の知り合いみたいだが？

「そうなの？別にいいけど」
九城は他人にほとんど興味が無いからな

「そついや、お前なんで着物？」
学校でも見たことないし……

「杜山さん」
「は、はいっ」

こいつ赤面症か？あ、なんかしょんぼりして帰ってきたな

「41点？てか、サンチヨさんって何だ？」

「ウネウネくん？何それ？」

「ぶっはは！？得意分野なのにな！」

お前はどうなんだ？燐

「奥村くん」

頭かいて帰ってきたな。

「二点？凄いな君。いや今度遊ぼうよ」

「他人のふりすんな！！そういう手前はどつなんだ！」
こんな点数の奴とは他人でいたいわ

「ん？87点だが？」

「私は83点」

「畜生！」

何か悪いか？つーか年下に負けるって・・・

「勝呂くん」

「はい！」

おー、燐を睨んどる、睨んどる

「2点とか狙ってもようどれんわ 女とチャラチャラしてるからや

ムナクソ悪い・・・！」

ごもつとも、ごもつとも

「は！？」

は！？はお前だ、燐。

「よく頑張りましたね、勝呂くん」

ドヤ顔で帰ってきたな・・・ウザイが今の燐の顔の方が鬱陶しい

「98点、すげーじゃん」

「ホントだよ」

ウザイがすごいな

「お前らも凄いやないか」

テレ顔で言っているけど

「10点以上差つけられて言われてもなー」

「それもそやな」

「ここは否定するところじゃないのかな？勝呂くん？」

「ばばばかな、お前みたいな見ための奴が98点とれるはずが・・・常識的に考えてありえなーよ」

人は見た目によらない。今の世の中じゃ普通だぜ？言葉にやださんが

「なんやと 俺はなエクスリスト被魔師の資格得るために本気で塾に勉強しに来たんやー！塾におんのはみんな真面目にエクスリスト被魔師目指してはる人だけやお前みたいな意識低い奴目障りだからはよ出ていけー！」
まともだなー、少なくとも燐より

「な、何の権限で言ってるんだこのトサカ俺だつて一様目指してんだよー！」

真面目に授業受けてる権限じゃね？しかも一応って・・・

「お前が授業まともに受けとるとこ見たことないし！」

「ぼ、坊ほん 落ちついて」

「授業中ですよ、坊ほん・・・」

えっと確かこいつらは・・・子猫丸と志摩だったか？そういや、いっつも一緒に行動してるなこいつら

「いっつも寝とるやんかー！」

「お、俺は実践派なんだ！体動かさないと覚えんの苦手なんだよ！」

「うんうん、正論だ・・・どんどん言ってやって下さいね」

「ああ、まったくもって正論だ。もって言ってやれ」

ニコニコ笑顔で言う俺達

「だあッ ！お前らどつちの味方だー！」

「さてどっちでしょうか・・・おっと・・・」
あっち（笑）

体育・実技

「うおオおおお！・・・！」
何やってんだあいつら？

「何あれ」

「さあ」

少し困り顔で出雲の問いに朴が答えたな

「はは・・・、坊もほんけつこう速いのにやるなあ。あの子」
そうなのか？おっと

「しかし八神君・・・あれ反則じゃないですか？」

「あれがお兄ちゃんだから気にしない気にしない」

「でもさすがにスケボーは・・・」

駄目なんて言われてないもん。ってあいつらホントに早いな

「実践だったら勝ったもん勝ちやあああ！・・・」

！？燐を蹴りとばしたっ！？

「うわ！？危ないわ！こっちに当たったらどうすんだ！？」

「スケボー乗っ取る方が悪いわ！」

なにが悪いんだよ！？

「なにやってんだキミたちはア、死ぬ気かネ！」

「違いまーす！」

転生したのに死にたかないよ!?

「この訓練は徒競走じゃない悪魔の動きに体を慣らす訓練だと言っただでショウ!」

まったくそのとうりだ。

はあ疲れた、つか喧嘩してるよあの二人。

「勝呂くん こっちに来てくれタマエ」

「?はあ」

なんであいつだけなんだ? 燐もだろ?

「なんでアイツだけ?」

「さあ……」

「つーか何なんだアイツ……」

お前もだろ、燐

「かんにんなあ、坊^{ほん}はああ見えてクソ真面目すぎて融通きかんとこあつてなあ、ごつつい野望持って入学しはったから……」

「野望?」

「坊^{ほん}はね、『サタン倒したい』いうて^{エクソシスト}被魔師目指してはるんよ」
あー、そりゃあ無理だな……

「あつはははは……! 笑うやる?」

「笑うは行き過ぎだけど、不可能な夢だな……理由もおそらく『青い夜』だろうし……」

「不可能? なんでだよ? それに青い夜って何だよ?」

……こいつ何にも知らないんだな

「はあ、だって不可能だろ? サタンはこの物質界^{アッシャー}に同等の物質がな

いだらう？それどころかほとんどは10秒持てばまだいい方だ・・・
まあ悪魔と人間のこのような奴は虚無界ゲヘナに行けるが別かもしれんが・
・『青い夜』は力のある被魔師エクスジストたちをサタンが自分の炎ちからで大量虐
殺したことだ。解ったか？」

「お、おう・・・」

本当か？お、勝呂が帰ってきた

崇り寺の子その一（後書き）

長くなるので二回か三回に分けたいと思います。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております

崇り寺の子その二（前書き）

どうしよう、とあるが本格的に入ってきてそうとは言っても何十話も後のことですけどね

では本文です

崇り寺の子その二

勝呂SIDE

「いいかい、勝呂くん！」

「なんでや！なんで俺だけなんや！？」

「きみは成績優秀だし。基本教科の先生方は皆期待なさってるんだ

」

「はあ」

「あんまり問題は起こさない方が賢明だネ」

「……あのぉ……」

「なんでぼくだけ注意なんですか？あいつら……奥村 燐と神木 八神やって……」

「ん？八神君に至っては何にも注意することは、ないんだがネ」
「な、なんでや！？きよとんとした顔で言いおつとるし」

「スケボーに乗ってたやないですか！？」

「ん？誰が持ち込み禁止と聞いたんだネ？むしろ実践では車などで逃げる事が多い。そういう点では彼は最優秀だネ」

「た、たしかに……納得できたような……できんかったような……」

「じゃ、じゃあ、奥村は……奥村 燐は……」

「ああ……彼は」

「あいつは何も悪くないとは言わせんぞ！」

「一理事長（フェレス卿）が特別に入学させたワケあり生徒らし

「い 君もあまり関わらん方が利口だよ」
「特別やと・・・？」

SIDE OUT

八神SIDE

何故こうなった？

勝呂が帰ってきて・・・そうそれまでは良かった・・・
先生が何かわけわからない・・・とゆうか完全にプライベート丸出しで授業を中止して、それから勝呂が隣に喧嘩売って、隣があっけなく断ってそれにキレた勝呂が今あそこにいると・・・

「お兄ちゃん！？目がうつろになってたよ！？おい！戻ってこい！！！！」

「五月蠅い、いや止めなくて大丈夫かねあれ？」

「私は家族以外がどうなるうが知ったこっちゃない・・・あつ！そ
うだそうだ、大事なことを忘れてた」

「なんだ？とても悪い予感が・・・とゆうか巻き添えが増えたと喜ぶ
ような顔はもしかして・・・」

「お母さんここに引越すって」

「はあつ！！！？」

「どうしたのあんたが叫ぶなんて？」

「叫ばずにいられるか・・・一大事だ・・・こいつもうすうす解って
入るだろうが・・・」

「お母さんがここに引越すって言うてるの。勤務先は日本支部本
部らしいよ」

「・・・あんたらも大変ね・・・あんな子離れできない母親を持つと」
いや出雲にも結構、だきついていたぞ？こいつも顔色悪くなってきているし・・・

「ど、どうしたの？出雲ちゃん、八神君、九城ちゃん？」

戸惑って聞いてくるな朴俺らは今睡眠の危機に陥っているんだ・・・

「後で説明する・・・（ガクガク）」

「お願い、聞かないで朴・・・（ガクガク）」

「大げさだなー、二人とも」

「解った、今は聞かないでおいとくよ・・・」（九城ちゃんは喜んでるけど、二人はおびえてる？じゃあおばさん関係かな？じゃあ聞かない方がいいね・・・）

「・・・俺は」「俺は！」

お、始まったか。そうだな今を生きよう！未来じゃなくて今を大切にしよう！

「サタンを倒す」

覚悟を決めたような顔で言っているが難しい夢だな、悪魔の子でもなければ・・・そういえば、噂で悪魔の子が多く所属する部隊がロシアにあると聞いたことが・・・

「ブツ プハハハハハハ、ちょ・・・サタンを倒すとか！あははは！子供じゃあるまいし」

現実逃避のように笑う出雲だが声だけ聞けば侮辱するように聞こえるなこれは・・・

「おい！出雲！？今ので心が揺さぶられたらどうするんだ！？」

「あつ」

今気がついたかのように言っつな ！？

「ゲボオオオオオ」ボムッ

！？燐？何であそこに燐が居るんだ？いやなんで食われているんだ！？

「おい！」

「きやああ」

「燐！」

きやああじゃねえぞ出雲！？お前があれの引き金じゃあねえか！？

あ？どうなってるんだ？^{リバー}蝦蟇が離れていつてる？

「・・・なにやってるんだ・・・バカかてめーは！！！」

「いいか？よく聞け！」

なにがどうなってるんだ？ああ、バカ神めなになが『原作知識消しとくねー』だ！？その代わりにとあるの知識をくれたけどよ！今の状況が解らん！

「サタンを倒すのはこの俺だ！！！！てめーはすっこんでろ！！」
は！？

え、ちょ、えー！？あいつ俺の話聞いてたのか？悪魔の子でもなければ不可能だと言ったのに・・・
あいつのばかさは鳥レベルか？はあ、あいつらあつちでギャーギャー騒ぎ始めたし・・・

SIDE OUT

S I D E O F F

「遅くなりました」

夜の鉄塔に二人と一匹の悪魔がいた

「久しぶりだなアマイモン “地の王”よ」

「ハイ・・・お久しぶりです兄上」

地の王 アマイモン、世界各地で悪魔もしくは神として恐れられ、
崇められる悪魔。余談だが相対する天使は神の火ウリエルである。

「して、父上のお答えは？」

「・・・父上は兄上の申し出を受けると」

能面のような無表情で言うアマイモン

「・・・ほお・・・それは大変結構」

その応答に何かを企んでるかのように笑うメフィスト

「では父上には「我らの小さな末の弟は私の羽の下ですくすく育っている万事うまくいっている」とお伝えしてくれ」

「解りました・・・兄上は実家には戻らないのですか？」

「行け。父上をお待たせするな」

「・・・ハイ」

追いたてるようにアマイモンを返したメフィストは

「・・・フッフ戻らないとも、私のような放蕩者にとってはこんな
愉快的玩具箱はないからな。楽しいお遊戯はこれからだ」

夜景を一望しながらこう言い放ったのだった。

S I D E O U T

八神SIDE

気持ち悪い

燐が真面目に勉強しようとしたり、勝呂が燐に親切だったり・・・

「先生、今日もう帰っていいですか？」

「気持ちは解りますが駄目です」

苦笑いで奥村先生が言うが、

「こんな気持ち悪い空間にもっといると!？」

「すみません、そうです」

酷い・・・

うう、寒気が

SIDEOUT

崇り寺の子その二（後書き）

書き終わりました。

本文で書いたロシアの悪魔の子が多く所属する部隊は『殲滅白書』の事です。後で出てくるかもしれません。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

友千鳥その一（前書き）

八神と九城の母親の事がちよこつと出てきます。

子離れできないをなんて言うんでしょっ？

これから漫画での一話を二、三話にして書いていきたいと思ひます

では本文です。

友千鳥その一

SIDE OFF

「今日こそ・・・絶対・・・お友達をつくる!!」
被魔塾に行く扉の前で何か決心を固めたような顔でプルプルふるえながら言うしえみだが

「今日こそちゃんとあいさつするんだ。頑張るぞ!」
今までちゃんとあいさつしなかったのかとようなこと言う、あいさつしたぐらいで友達できれば世の中は苦労しない

「見ててね、おばあちゃん・・・!!」
そう言いながら扉をくぐっていくしえみ、そして出雲と朴に廊下で会い

「・・・こ、こんにち・・・わッ」
なぜかあいさつするだけと盛大に転び、びっくりした二人に振りかえられ

「・・・」
「大丈夫!?ご、ごめん・・・。ちょっと出雲ちゃん」
出雲は何も言わずに塾に向かい、朴は心配しなぜか謝り出雲を追いかけ行って行った

「・・・!!」
しえみはそのことと・・・とゆうかあいさつだけで転んだことに顔を真っ赤にしていた

「しえみ。何やってんだそんなところで・・・」

「んなもん、転んで顔真つ赤にして放心してるだけだろ」

その時、間が悪いとゆうか、何とゆうか、燐と八神が入って来て、燐はしえみのわけのわからない行動？について思ったことをそのまま口に出し、そして八神は的確に現状を説明た

「・・・燐」

「俺はいない事になってるのか？」

しえみは燐の名前だけいい、そのことに首をかしげる八神

「な・・・なんでもない・・・！」

「無視かい」

「ドンマイ」

八神の言葉を聞き忘れたのか、ただテンパってるだけなのか無視してなんでもないと言いながら塾に向かうしえみ

被魔塾の教室

「夏休みまで一カ月半切りましたが、夏休み前には今年度の候補生エクスイア認定試験があります。候補生になるとより高度な訓練が待っているため試験はそうたやすくありません。もし合格した場合夏休みは任務にあたってもらいます」

「なっ!!!?え?さ、里帰りできないんですか!?!」

雪男の最後の言葉に八神と出雲は驚き、顔がひくついていた

「はい。そうですがどうしたんですか？」

「ご愁傷様。いえお母さんがここに引つ越すと言ってそれを防ぐための最後の・・・とゆうかそれしなかったら確実に引つ越すんですよ。うちの母は」

雪男は里帰りできない事を固定し、九城は満面の笑みでご愁傷様と
いい首をかしげている人たちに説明をした

「・・・もしかしてあなた達のお母さんは神木 砕さんですか？」

「どうして知ってるんですか？うちの母の名前を？」

なぜか雪男は久城達の母親の名を言いあて、それに九城は首をかし
げ八神と出雲は名前を聞きガタガタ震え始めた

「いえ、私達が候補生エクスワイアだった時の教師だったんですよ。銃器の・・・

「へえー、どんな授業だったんですか？」

「脱線してしまいますからそれはおいおい話すとします」

雪男の言葉には九城も驚き授業内容を聞こうとしたが脱線してしま
うため、おいおい話すと言いながら二人がおびえる理由を理解した
ようだ

「まあ、候補生エクスワイアになるための強化合宿を来週一週間行います。強化
合宿に参加するかしないかと・・・所得希望の“称号”マイスターをこの用紙
に記入して月曜までに提出してください・・・」

一通りの説明をして用紙を配る雪男。そしてようやく現実世界に戻
り始めた八神と出雲

「マイスター “称号” って何だ？教えくれ・・・オネガイシマス」

「はあ!?!」

燐の質問に思わず叫んでしまった八神

「どないしたんや、八神」

「ぼ・・・勝呂、燐がバカだ。あほだ」

「おまん今、坊ぼんって言おうとしなかったか？それに奥村がバカなこ

とは今に始まった事じゃないか」

八神の叫んだのを聞いてやってきた勝呂を八神は坊ほんと言おうとしたんじゃないかと聞き、さらに馬鹿なのは今に始まった事じゃないと言おう

「そりゃあ、そうだが、『マイスター称号”マイスター”マイスター』ってなんだ』って聞いてきやがった」

「・・・こいつは本当ほんまに被魔師エクソシストを目指してるんか？」

八神は燐が聞いてきたことを言い、勝呂は本当に目指しているのかとこめかみに血管を浮かび上げさせながら聞いた

「ははは、奥村くんてほんに何も知らんよなあ」

「な・・・何なんだよクソ・・・世の中にはそんな人もいるんだよ・・・」

志摩は燐が何にも知らないと言っていると、燐は否定もせず固定した

「マイスター称号”マイスター”マイスター」マイスターというのは・・・」

「子猫丸！！教えるな！（おしえんでええし！）」

「こねこまる！？」

八神と勝呂の言葉を無視して説明する子猫丸

「なんとなく解った。ありがとなこねこまる。お前らは何取るの？」

「何シレッと馴染んどるんやオイ！」

子猫丸が説明し終わりみんなは何をとるのかを聞き始め、勝呂はなぜかイライラし始め、それからは全員がなんやかんやで所得志望のマイスター“称号”を言う事になった

「前は使い魔を出せるものに出してもらった。今回は手本を見せる、そして全員に悪魔を召喚できる才能があるかをテストする」
ネイガウスがそう言いながら魔法円を書いた

「図は踏むな、魔法円が破綻すると効果は無効になる。そして召喚には己の血と適切な呼びかけが必要だ」

そう言いながらネイガウスは包帯が巻かれ血がにじみ出ている腕を出し、呼びかけた

「テュポエウスとエキドナの息子よ」
「求めに応じ」
「出でよ」
言い終わると魔法円から異臭をまき散らしながら屍番犬ナベリウスが出てきた

「先ほど配ったこの魔法円の略図を施した紙に自分の血を垂らして思い思い付く言葉を唱えてみる」

ネイガウスの説明が終わるやいなや出雲は白狐を二体呼び出した

「白狐を二体も・・・見事だ神木出雲」

白狐、狐妖怪の中では善狐ぜんこに分類される。古いものになると人語も理解すると言うがしかし

「千里眼により全てのことを見透かし」
「私との契約を思い出し」
「末廣大神としての力を今ここに振るわん」
八神は尾が四本ある善狐、天孤を一体呼びだし、その天孤は八神の足元で伏せた

「て、天孤を呼び出しただど？いや素晴らしいぞ八神」
ネイガウスは動揺しながら称賛をしたが、大半の生徒は何が素晴らしいのかを理解できずに首をかしげていた

「天孤は1000年生きた善孤がなる強力な神使なのよ、一部では神と同一視されてる所があるほどにね」

天孤のことを説明する出雲。たしかに今この世界で天孤を呼びだせ従わせることのできるのは数えるほどしかおらず、八神ほどの年齢となると皆無に等しかった

「実はもう一体呼び出せますけど疲れますからやめていいですか？」

「あ、ああ。良いぞこれはあくまで才能があるかのテストだしな。実際お前たちはする必要がないんだ」

たしかに前の時間で使い魔を呼び出したため呼び出す必要がなかったという

「私の言葉に迷い」 “お前の姿に戸惑い” “その力は防げない”

“出でよ”

その言葉と同時に水の狼が出てきたが八神と出雲は眉をひそめた

「それは・・・水虎の一種か？」

ネイガウスもこの使い魔は初めて見たようで何かは良く解っていないようだ

「ええ、多分。初めてやってみましたし・・・ね？牙狼」

今回初めて出してみたからわからないと言う九城

「化け狸はどうした？」

九城が出せる使い魔の大半が化け狸でそれを出さなかった事を疑問に思ったように聞いてきた

「いや、夢でこの言葉を聞いてさ、試したくなったの」

言外に昨日神が夢に出てきたとゆう九城

「そうか、解った」

そしてその意味を理解した八神は適当に答えた

ちなみにこのやり取りの間にしえみが緑男グリーンマンの幼生をだしたり、他の奴らが紙に穴が開くかとゆうほど魔法円の略図を見ていた

友千鳥その一（後書き）

どうでしたか？

天孤の知識はウィキで調べました。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております

友千鳥その二（前書き）

昨日投稿できませんでした、すみません。
友千鳥はこの話で終わると思います。

では、本文です。

友千鳥その二

SIDE OFF

「それは、^{グリーンマン}緑男の幼生だな。素晴らしいぞ杜山しえみ」

「……………!？」

ネイガウスが^{グリーンマン}緑男を出した、しえみをほめたがとうのしえみは顔を真っ赤にして驚いて声も出せずにいた

「ニー」

「……………こんにちは」

^{グリーンマン}緑男が鳴き声をあげ、そのあとしえみの頬に頬ずりをした

「ねえ、神木さん……ヒツ!？」

最後の方がおかしくなっているのは神木さんが全員、しえみの方を振り向いたからだ。

「どれだ、せめて下の名前で呼んでくれ」

「……………ごめんなさい」

下の名前で呼んでくれという八神に対してしえみは謝った

「え、えつとね。私も使い魔、出せたよ!」

「……………それが?」

神木家の三人組はしえみが使い魔を出せたことを『それが』で済ませた。

まあ、彼らにしてみたら使い魔は出せて当たり前のもので、出せないのは自信がないからといったものであった。

「……………今年は手騎士^{テイマー}候補が豊作のようだな、悪魔を操って戦う手

騎士は^{エクスシスト}被魔師の中でも数が少なく貴重な存在だ」
今年の豊作ぶりにかなり驚いているネイガウス、それからしばらく
使い魔の説明をして授業が終わった

「神木さん！」

「……だから、下の名前で呼べって言うてるだろうが……」
廊下で神木と懲りずに呼ぶしえみ

「おーい！おーい！」

「……………！！何で私につきまとうのよ！使い魔は自信さえあ
れば誰でも出せるものなの……！！」

と、まあいささかずれているが出雲がつきまとう理由を聞いた

「？えつと、あの……あの……」

何かを言おうとするしえみだが意外に短気な出雲と八神はこめかみ
に血管を浮かばせ始めていて、おおらかな九城でさえ、今にもどっ
かに行きそうな顔をしていた

「わ、私と、おとお友達になつてください！」

「……今はそれどころじゃない……！！」

「いいよ」

即答で出雲と八神は今はそれどころじゃないといい、九城はいいよ
と言った。

あまりの事に朴でさえポカーンとしていた。

「わ、私……友達いたこと無くって……」

しえみが続きを言ったが出雲と八神は次の授業にいそいそと出てい
った

「い、出雲ちゃん！？八神君！？まだしえみちゃんが話しているよ

！」

「話なら断った、時間の無駄だ」

「こっちも同じよ」

朴は二人を止めようとしたが聞く気なんかさらさらないと云う二人に、予想していたのか苦笑いをする朴

「あ、あの、しえみちゃん？私で良かったら友達になるよ？あの二人、今いろいろあるからそのあとにした方が・・・」

「え？あ、ありがとう！」

朴は自分で良ければ友達になると言い、しえみは喜んだ。

ちなみに九城は餓狼で遊んでいた

それからしえみと朴はしえみがいささかきこちないが、いたって普通の交友関係があつた

夜 旧高等部男子寮

「しえみにも友達ができたみたいだな」

「え？」

この寮の住人である奥村兄弟が雑談していた。どうもこの寮にはこの二人しかおらずいろいろ都合がいいらしい

それからしばらくして

「うわなんやコレ 幽霊ホテルみたいや！」

志摩がいきなり失礼なことを言い放ったが、何せ壁にはひびがあり、全体的に黒ずんでいるため仕方ないことだった。

「おはようございます、では中に案内します」

志摩の言葉を予想でもしていたのか中を案内すると言つ雪男

「……はい、終了」

強化合宿の内容の一つであるプリントをしていた訓練生達ベイツ

「プリントを裏にして回してください」

雪男がプリントを回してくださいといい、そして明日の事を説明し始めた

「ちょ……ちょっとボク夜風にあたってくる」

「おう、冷やしてこい……」

燐が知恵熱を出し勝呂の言葉を聞きとれたかさえ分からない様子で外に出ていった

「朴、お風呂入りにいこつ」

「うん、しえみちゃんも入る？」

「うん！私も入る！」

朴の言葉に出雲は少し顔をしかめたが、過去に八神の交友関係に口を出してボコボコにされたことがあった、ため何も言わなかった

ちなみに九城は母親の凄まじい抵抗があったため来た時には八神におぶられてきていて、今も寝ていた

「うはは、女子風呂か、ええな。こら覗いとかな あかんのや
ないんですかね。合宿ってそうゆうお楽しみ付きもんでしょ」

「志摩！！お前、仮にも坊主やる！」

「また、志摩さんの悪いクセや」

「白狐に噛み殺されるからやめとけ」

志摩を止めようとする勝呂と子猫丸だが八神は止めようとする雰囲気ではなく、過去にあった事を言うような雰囲気であった

「また、また可愛いわね妹の裸を見られたくないだけでしょ？」

顔が青くなりながら言う志摩だが八神はため息をつきこう言った

「過去のそういう奴がいてな、母さんにそいつの親が勤めている会社を潰されその後の人生を・・・一家心中だったか？」

とんでもないことを大マジの顔で言った八神にここにいた全員がこう決心した

(これから、この三人にかかわる時はあまり変なことをしないようにしよう)

風呂場

「お風呂場はまだ綺麗で安心したわ、どこもかしこもオバケ屋敷みたいなんだもん」

「うん」

出雲はひとり言を言いながら愚痴り、それに満面の笑みで相槌をするしえみだが一人暗い表情の朴

「あのね、出雲ちゃん、しえみちゃん？」

「なに？朴」

「なに？朴さん」

何かをきりだそうとする朴

「私、塾はやめようと思う」

「え……」

あまりの事に驚く出雲だがしえみは何となくわかっていたのか残念
そうな顔をしていたものうなずいた

それから朴はやめる理由を話したが出雲はそれでも引き留めようと
したが

天井から何かが、黒い何かが落ちてきた。

そして三人は天井を見ると屍系グールの何かがいた

「「「きゃああああ」「」」

廊下

「!?今のは……」

「叫び声だな……風呂場から聞こえてきたからおそらく出雲達だ
ろ」

雪男が叫び声を聞こえたのが驚いたが、たまたま同じ場所にいた八
神が落ち着いて現状を説明した

「俺は一応見に行く、先生は銃を持っていますか？」

「はい、私も助けに行きます」

八神が異様に落ち着いているのに少し疑問を雪男が持ったが、今は
それどころではないため走って風呂場に走ることにした

「おい、あれは……隣か？」

「クソ！何で兄さんが……」

風呂場

「“稲荷の神に恐み恐み白”」
朴は屍系グールの魔障をうけ倒れておりそれを今しえみがアロエで応急処置をし、それを邪魔されないために出雲は白狐を出そうとしたが

「おらあ ああ」

燐が屍グール、おそらく屍番犬ナベリウスを殴り、それに驚き白狐が出せなかった

「兄さん！」

そして雪男が入ってきてババババンと屍番犬ナベリウスに銃を撃ち、屍番犬ナベリウスは出ていった

それからはいえみの処置が正しいと雪男がほめ、気がついた朴はいえみに礼を言った。ちなみに燐は八神に引っ張られて風呂場から出ていった。

友千鳥その二（後書き）

うーん、多分めちゃくちゃ解りにくかったと思います。
そつゆつ点は感想の悪い所に書いてくれると嬉しいです。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

此に病める者ありその一（前書き）

最近投稿できませんでした。すみません
久しぶりに神が出てきます。

では本文です。

此に病める者ありその一

SIDE OFF

神の空間

「アベシ」

いきなり暮バトル漫画のやられたような奇声をあげながら蹴り飛ばされたのは、神であった。

「いきなり何すんだよ！私は見てくれのとうり、か弱い少女だよ！
（年齢はウン億歳だけど）」

「黙れ。俺を殺した奴が何を言う」
神を蹴り飛ばしたのは神木 八神。実は転生してからもちよくちよく神と話していたのだが、そのたびにまずは蹴り飛ばすのが八神であった。

「で、今回は何の用だ？九城にはもう行ったんだろ？さつさと話せ」

「あ、うん。実はね。原作ブレイク開始するわ」
衝撃の（笑劇？）発言であった。

「できないつつたのは誰だったか？」
顔を引くつかせながら、問いかける八神。

「あ、うん。それはね」

「それは？」

もったいぶる神にこうして欲しいんだろつなと、めんどくさそうに繰り返す八神

「君たち原作知識消したし、いくらブレイクしようが自覚ないじゃん」

元も子も無い、身も蓋も無い。八神はあきれて声も出なかった。

「あははは！どう？衝撃の事実は。つーか、キミたち転生させるだけで原作ブレイクだったっの」

自分で言ったことに、大爆笑する神だが、八神は肩をプルプルふるわせ

「じゃあ、何だ！あのイギリス清教とか、ロシア成教とか、ローマ正教とかも原作にはないのか！？」

「もちろん」

どうも神は原作どつりにする気なんざ端からなかったらしく。いろいろ要らん設定をブチ込んだとのこと

「ふっざけんなー！！！」

「おっと時間だ。じゃあねー、また今度とか」

ポチッとボタンを押し八神のいた所に穴があき、八神を退場させる神

「この魔法円の抜けている部分を前に出て描いてもらう。・・・神木出雲」

時は変わって被魔塾。今は魔法円・印章術の授業中で、ネイガウスが出雲を指名したが出雲は答えずにいた。

「神木出雲！」

「！！！」

それに気がついたネイガウスがもう一度呼び、それでようやく出雲は気がついたようで、自分でも信じられないという顔をしていた。

聖書：経典暗唱術

「悪魔の大半は、“致死節”という、死の理……。必ず死に至る言や文節を持っているでござマース」

そう言っているのは、本当に被^{エクソシスト}魔師か？というほどに太っている、教師であった。

「では、宿題に出した。“詩編の第30篇”を暗唱してもらおうでござマース。では出雲さん。お願いするでござマース」

「はい！」

そう勢いよく答えた出雲であったが完璧に暗唱することができず、周りも珍しいというような顔で見っていた。

そして次にあてられた勝呂は完璧に暗唱し、まわりは惜しみない拍手をした。

此に病める者ありその一（後書き）

授業らへんには八神や九城が全く出てきませんでした。
次の話には必ず出します。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

此に病める者ありその二（前書き）

よし！嫌いな戦闘シーンは次話に持ち越した！
皆さんすみません適当で・・・

ですが必ず次話で戦闘シーンは書きます！

では本文です。

此に病める者ありその二

SIDE OFF

被魔塾

「いや。でもあれだけの文節を苦も無く暗唱するなんて、お前凄いな」

聖書・教典暗唱術の授業が終わり、燐・しえみ・八神・九城の四人は京都三人組の周りにいた。

「お前本当に頭良かったんだな」

燐が勝呂を珍しく称賛したが八神は即答で

「お前より頭が悪い奴は、小学校行っても珍しい」

「そやな」

燐の馬鹿さを小学校に合わせても珍しいと言い、それに勝呂も賛同した。

「な、なにー！そりゃあ、小学校の時も結構サボってたけど（ゴニヨゴニヨ）」

燐は中学だけではなく小学校までサボっていたらしい。

「すごいねえ、勝呂くん！びっくりしちゃった」

しえみが改めて勝呂をほめたが

「いやいや、惚れたらあかんえ？ええけど」

おそらく冗談であろうが、お角違いなことを言った。

ちなみに勝呂が言った、詩編の第三十篇はこうであった。

“神よ、我汝をあげめん。

汝我をおこして、我が仇の我ことによりて、喜ぶをゆるし給わざれなり。

我が神よ、我汝によばわれれば我汝をいやし給えり。

神よ我汝が魂を陰府より救い、我をながらしめて、墓に下らせ給わざりき。

神の聖徒よ、神をほめうたえ、清き名に感謝せよ。

その怒はただしばしにて、その恵は命とともに流し。

我ひたすら神に願えり。

我、墓に下らば、我が血なにの益あらん。

塵は、黙すことなからんためなり。

我神よ、我、永遠に汝に感謝せん。”

と言うような長ったらしい文節を読んだが、これを現代語訳にするところだ。

主よ、わたしはあなたをあげます。

あなたはわたしを引き上げ、

敵がわたしの事によつて喜ぶのを、

ゆるされなかつたからです。

わが神、主よ、

わたしがあなたにむかつて助けを叫び求めると、

あなたはわたしをいやしてくださいました。

主よ、あなたはわたしの魂を陰府からひきあげ、

墓に下る者のうちから、

わたしを生き返らせてくださいました。

主の聖徒よ、主をほめうたい、
その聖なるみ名に感謝せよ。

その怒りはただつかのまで、

その恵みはいのちのかぎり長いからである。

夜はよもすがら泣きかなしんでも、朝と共に喜びが来る。

わたしは安らかな時に言った、

「わたしは決して動かされることはない」と。

主よ、あなたは恵みをもって、

わたしをゆるがない山のように堅くされました。

あなたがみ顔をかくされたので、

わたしはおじ惑いました。

主よ、わたしはあなたに呼ばわれました。

ひたすら主に請い願いました、

「わたしが墓に下るならば、

わたしの死になんの益があるでしょうか。

ちりはあなたをほめたたえるでしょうか。

あなたのまことをのべ伝えるでしょうか。

主よ、聞いてください、わたしをあわれんでください。

主よ、わたしの助けとなってください」と。

あなたはわたしのために、嘆きを踊りにかえ、

荒布を解き、喜びをわたしの帯とされました。

これはわたしの魂があなたをほめたたえて、

口をつぐむことのないためです。

わが神、主よ、

わたしはとこしえにあなたに感謝します。

これとさつき勝呂が言ったのでは、どっちが効果があると問われれば、それは同じである。

形は違えど意味は同じ。悪魔にとっては、形より中身の方が、効果的であり苦痛であるためである。

「暗記なんて、ただの付け焼刃じゃない！」

出雲が侮辱したように・・・否、自虐的にと言った方がいいだろう。少なくとも八神と九城にはそう聞こえた。

「あ？・・・なんか言ったか。コラ」

「坊・・・」

先ほどまで褒められていたから・・・では無く、先ほどの言葉は、詠唱騎士にとっては侮辱のような言葉であったため、勝呂は出雲に突っかった。

「暗記なんて・・・、本当の学力と関係ないって言ったのよ・・・！」

「はあ？四行も覚えられん奴に言われたことやないわ」

今にも喧嘩になりそうな不穏な空気。そんな中、子猫丸は仲裁に入っただが意味も無く

「あたしは覚えられないじゃない！覚えななのよ！！詠唱騎士なんて・・・詠唱中は無防備だから班に、お守りしてもらわなきゃならない。ただのお荷物じゃない！」

出雲の言ったことに、八神と九城は、やれやれといていた。

「なんやとお・・・!? 詠唱騎士目指しとる人に向かってなんや!」
「坊!」

勝呂は立ち上がり、ドスドスと出雲の方に向かって行った。

「なによ! 暴力で解決? コツワ〜イ。さすがゴリラ顔ね! 殴りたきや、ホラ。殴りなさいよ!」

それに拍車をかけるように、挑発する出雲。

「~~~~!!・・・代替俺はお前が気に入くわへんねや! 人の夢を笑うな!!」

ドンツ! と燐の座っている机を叩きながら言う勝呂。

「ああ・・・あの「サタンを倒す」ってやつ?・・・はッ。あんな冗談笑う以外に、どうしろってのよ!」

たしかにサタンを倒すという夢は、常人(被魔師がこれに入るかは不明だが)には不可能極まりない夢であった。

「じゃあ、何や。お前は・・・何が目的で被魔師エクスシストなりたいんや・・・あ? 言うてみ!!」

「目的・・・?」

出雲の脳裏に・・・そして、八神と九城の脳裏に広がった光景は、地獄。この世にそんなものがあるなら、そう言うのが一番と言うべき光景であった。

「・・・あたしは、他人に目的を話した事はないの! あんたみたいな、目立ちたがりや、ちがってね・・・!」

「この・・・」

出雲の言葉に、とうとう勝呂がキレ、胸倉をつかんだが、出雲が思わずと言った感じで手が出て、それが止めようとたった燐に当たり、さらに授業をしに来た雪男に見つかった。

此に病める者ありその二（後書き）

詩編の第三十篇はネットで調べました。

くどいようですが次話で必ず戦闘シーンは書きます。

ではまた明後日。

此に病める者ありその三（前書き）

此に病める者ありは、今話で完結です。

次話からはオリジナル要素が強くなります。

では本文です。

此に病める者ありその三

SIDE OFF

正十字学園 高等部旧男子寮

「皆さん。少しは反省しましたか」

雪男が塾に居合わせた者達に聞いたのだした。

しかし、塾生たちの膝の上には礮石バリキョウが乗っており、うめき声をあげていた。

「な・・・なんで俺らまで」

燐が雪男に聞いたが

「連帯責任つてやつです」

二、三言で一掃された

「この合宿の目的は、“学力強化”ともう一つ、“塾生同士の交友を深める”っていうのもあるんですよ」

「こんな奴らと、馴れ合いなんてゴメンよ・・・!!」

「コイツ・・・!!」

雪男の説明を無視して、また燐を間に言い争いをしようとする出雲と勝呂。

「馴れ合ってもらわなければ困る。被魔師エクソシストは、一人では戦えない!!」

そう、被魔師エクソシストは、集団戦法が定石。例外はあるものの、それでも例外は例外。この場のほぼすべての存在にとっては集団戦法は必須であつた。

「お互いの特性を活かし、欠点を補い。二人以上の班パーティで闘うのが基

本です。実践中になれば。戦闘中の仲間割れは、こんな罰とは比べ物にならない連帯責任を負わされることになる。そこをよく考えてください」

雪男が改め説明すると、さすがに出雲は口をつぐんだ。

「……では僕は、今から三時間ほど小さな任務で外します」

「!？」

雪男が席を外すと言うと、何を期待しているのか燐が反応した。

「……ですが昨日の屍ケイルの件もあるので、念のためこの寮全ての外につながる出入り口に、施錠し。強力な魔除けを施しておきます」

「施錠つて……、俺らどうやって出るんすか」

雪男の言葉に勝呂が問いただした。

「出る必要はない。僕が戻るまで三時間、皆で仲良く頭を冷やしてください」

鬼だ。この場にいた全員がそう思うような言葉であった。

ちなみに礮石バリヲシは、持っていればいるほどだんだん重くなる性質がある。つまり三時間も持っていればどうなるかは、予想がつくであろう

「つーか、誰かさんのせいでエラいめえや」

「は？あんだだつて、あたしの胸ぐらつかんだでしょ!？信じられない!」

また、出雲と勝呂が、燐を挟み口喧嘩を始めようとした時

「一灰は灰に(AshToDust)一塵は塵に(DustToDust)一吸血殺しの紅十字(Squeamish Bloody Road)」

八神がルーンカードを撒き散らし、詠唱をし炎剣を呼び出して、八神、子猫丸、志摩、燐、しえみ、九城、宝、山田の上に乗っていた

礮石を焼き払った。

「おお！ありがとうな、八神君」

「おおきに、八神君」

「すっげー！お前そんなことも出来たのか！」

「すごいねー。ねー、ニーちゃん」

「ニー！」

と解放された者たちは口々に、八神に礼を言ったが

「ちょ、あんた！なんでそいつらだけなの！？」

「そやで！俺はどなするねん！？」

解放されなかった、二人は文句を言ったが

「少しは頭冷やしてろ」

八神はそれを一掃した上に

「そやね。坊は少し頭冷やしていたほうがいいさかいね」

「ん。出雲ちゃんは少し頭冷やしてな」

子猫丸、九城に頭冷やしてると言われ、とうとう黙る二人だが

フツと電気が消えた。

「！？」

皆が驚きあわてふためく中で、志摩が携帯を開き明かりを確保した。それにならない皆が携帯を開いていった。

「あ…あの先生。電気まで消していきはったんか！？」

「まさかそんな・・・」

先ほどの事もあり、半ばありそうな事を言う勝呂

「停電・・・!?」

そう考えるのが妥当だ。何せ電気が付いているのはこの部屋だけ、これでブレイカが落ちるわけも無かった。

「いや窓の外は明かりがついている」

「どうということ?」

たしかに窓の外の建物は明かりがあった。

「停電は、この建物だけってことか・・・?」

隣が言った事は、日本では至極珍しい事ではあったが、そう考えるのも無理は無かった。

「廊下出てみよ」

「志摩さん。氣イつけてナ」

志摩が廊下に出てみようとし、氣をつけてという子猫丸

「フッフ。俺こういうハプニング、ワクワクする性質たちなんよ。リアル肝試し・・・」

志摩が扉をあけると、そこには継接ぎだらけの顔らしきものがあった。

「・・・なんやろ。目エ悪なつたかな・・・」

ボタンと戸を閉めぼつりと言う志摩に、勝呂が

「現実や現実!!!!!!」

認めたくない事を言っていた。

そして扉をブチ破り中に入ってきた、悪魔。

「グルグルルルルルオオオオ」

そしてうめき声を上げながら訓練生ベイズを見た。

「昨日の屍グール……!!」

「……!!」
出雲が昨日の屍グールだと言うと、なぜか燐が反応した。

「ヒイイ。魔除けはったんやなかったん!? てか……足しびれて動けな……」

勝呂は普通に絶叫していた。

しかし、屍グールは、そんな事などお構いなしに、二つある顔(?)のうちの一つが膨れ上がり、破裂した。

「っ!?!」

そんな中、しえみは

「ニーちゃん……! ウナウナくんを出せる」

また謎のフレーズを言い、緑男グリーンマンの幼生は何かの木を出し、即席のバリケードを築いた。

「……あれ? ……くらくらする……」

「しえみ!?!」

「ゲホ」

「あ、熱い」

皆がなぜか、風邪のような症状を訴え始めた。

「屍グールの魔症のせいだ。お前大丈夫なのか? 驚いたな……馬鹿には魔症さえ聞かないとは……」

八神が燐に説明し、疑問を口にした後、勝手に理解したようにうなずいた。

「杜山さんのおかげで助かったが……使い魔は基本的に精神や体

力を削るんだ・・・こいつの体力がつきたらもうお終いだ」
八神が不自然なほどに冷静に現状を説明した。

「え？八神君。君がさっき、つこうた炎剣で倒せへんの？」
たしかに、魔の五大元素によると、腐の王の眷属は火に弱い事にな
っているが

「無理だ。今のカード枚数では中級悪魔を二体も倒せる火力は無い。
そもそもそんなことをしたら、このバリケードが燃え上がる・・・。
いや・・・時間稼ぎ程度ならできるかもな・・・」

八神がブツブツ独り言を言い出し、その間に燐が

「俺が外に出て囿になる。二匹ともうまく俺について来たら何とか
逃げる。・・・ついて来なかったら、どうにか助け呼べねーか、明
るくできねーかとかやってみるわ」

「はア！？何言うてるん！？・・・バ・・・バカ！？」

燐が無謀なことを言い、勝呂が燐を、止めようとしたが無視をして
バリケードの中（人一人が通るほどの隙間はある）にはいていった。
そして、二匹のうち一匹だけが燐についていった。

「おい、勝呂達とはかく詠唱で倒せ。俺はこのバリケードが消え
た時のために炎のバリケードの準備をする。九城は、化け狸を出し
て足止めをしている。出雲は、もし出せるなら白狐を出せ。解った
な」

八神が考えがまとまったのか各々に指示を出した。

「っ！？」

その指示に絶句する出雲。何せ彼女は今、精神がとても不安定で使
い魔に逆に襲われる危険性があったのだから・・・

「八神君・・・、でもアイツの“致死節”知らんでしょ！？」

「屍系の悪魔は……」
「ヨハネの伝福音書”に致死節が集中しとる八神の指示に、志摩が異論を唱えたが、それに答えたのは勝呂であった。」

「俺はもう、丸暗記しとるから……全部詠唱すればどっかに当たるやろ！」

「全部？二十章以上ありますよ！？」

「……二十一章です……」

子猫丸が言った、二十一章。この多さは前話に出てきた、詩編の第三十篇を単純計算で二十一回唱えるようなものであった。

「子猫さん！」

「僕は一章から十章まで暗記しています。……手伝わせてください」

「子猫丸！頼むわ……！！いいよな、八神」

「ああ、むしろ願ったりだ」

子猫丸も言うといい、八神は壁にルーンカードを輪のように貼りながら、ありがたいと言った。

「ねえ、風邪の私に働けと……？」

「当たり前だ。三体でいいから出せ」

九城は八神に言われていやいや詠唱した。

「“そなたは何を望む！そなたは何を欲す！厚かましき者よ”」
すると三体の化け狸が出てきた。

「なんですか？あの屍グールは？主よ」

「我らはいつを倒せばいいのですか？主よ」

「ならば我らは期待にお答えしましょう。主よ」

出てきた化け狸は、順番に話してきた。

「ああ、うん。そうだね。あいつを倒すから力を貸せ」
すると、化け狸達は、バリケードに入っていき屍グールに襲って行った。

「坊。じゃあ、俺は全く覚えとらなのでいざとなったら援護します」
すると志摩は仕込んでいたのか、キリクを取り出した。

「子猫丸は一章めから、俺は十一章めから始める。つられるなよ！」
「はい！」
「いくえ」

そして、二人は詠唱を始め、八神はルーンカードを貼り終えたのか
一時的に休憩しており、九城は呪言じゆごんを言ったりして化け狸達を強化
したりしていた。そして、なにも出来ない、出雲は唇をかみしめて
いた。

「・・・心を騒がすな、神を信じまた、我を信ぜよ」
「彼己より語るにあらず」
「汝、汝ら導きて、真理をことごとく悟らしめん」
「子猫丸はもうすでに詠唱をし終わり、勝呂はもう最後の章に入っていた。」

九城はもうすでに化け狸をしまい、銃に・・・機関銃に切り替えていた。

そして、とうとう、しえみが倒れた。

「杜山さん！」

そしてバリケードが消えたが、すぐに八神がこう言った。

「 邪悪を罰する裁きの光なり、

冷たき闇を滅する凍える不幸なり。

その名は炎、

その力を使いて我らを守り、我らの力になれ”」

すると、先ほど貼ったルーンカードから火柱が上がり、炎の壁ができた。

「うおおお！？何やコレ！？凄いなあ！！！」

「うわ！初めてやったのにうまく行った！？」

志摩が八神をほめたが八神は初めてやったらしく、びっくりしていたが

「でもこの枚数はきつい・・・あと十数秒持つかどうかだ。あと四日で誕生日でこの、贄殿遮那を抜けたのに・・・」

贄殿遮那は、十六歳にならないと抜いてはならないという掟があったのだった。

しかし、八神は今にも倒れそうなほどにふらふらであった。

「クソ！すまん。これ爆破させるわ！“起爆”！！！！！」

八神が起爆と言うと、炎の壁が屍ケルに、爆風が襲った。

「グロ、ロ、ロ、」

しかし、たいしたダメージにはならず
勝呂に一気に襲って行ったが

「のやる才……！」

「死体め！喰らえ！」

志摩のキリクと九城の機関銃によって阻まれた。

「……ちよつと、あんた……ま……まさか死ん……！」

いずもはしえみに駆けより、物騒なことを言おうとしたが、ちゃんと脈があり安心したようだ。

「う……かみ……き……さ……」

「し……しつかりしなさいよ」

何かを伝えようとするしえみ。
そして、

「……今日はいつもの神木さんじゃない……だ、ね。大、

丈夫……？」

出雲はその言葉で吹っ切れたようで

「……“稲荷神に恐み恐み白す……！”“為す所の願いと
して成就せずということなし！”」

すると、白狐が出てき出雲を、チラつとみたが、たいして何も言わ
ずに

「汝よ……何か用か？」

「あいつを倒す！行くわよ！」

白狐は出雲に従い、志摩と九城の猛攻を何とか抜け出した、屍ガイに向
かって行った。

「ふるえゆらゆらとふるえ……”^{たまゆひ}霊の被！！！！”」
すると、二匹の白狐は猛スピードで屍ケイルの周りを駆け廻った。

「神木さん！！」

「やった……！？」

だが、まだであった。

「……また、これを録しし者……”この弟子……なり！」
勝呂をつかもうとする屍ケイルだが

「千里眼により全てのことを見透かし”私との契約を思い出し”
末廣大神としての力を今ここに振るわん”」
八神の出した、天孤によって阻まれた。

「我等は、その証の真なるを……知る”」
その言葉と同時に電気がつき、天孤と闘っている屍ケイルが怯んだ。

「我おもうに世界も”」

「ゲモ”オオオオオ」

勝呂の言葉に悲痛な声を上げる屍ケイル。

「その録すところの書ケイルを載するに”耐えざらん！！！！”」
その言葉と同時に屍ケイルは、一度も勝呂に触れることも出来ずに消え失
せた。

「消えていいぞ。天孤」

「ほう……、天狐ずかいの荒い事だ。」

そう言いながらも消えていった、天孤。

「今回は助かったわ。八神。」

「ん。でも燐はどうしたんだか」
勝呂は八神に礼を言い、八神は辛うじて覚えていた燐の事を皆に聞くと

「あっ！」

皆忘れていたようだったが、廊下からどたとたと音がして来て。
（ほぼ全員が構えた）

「おい！」

燐が帰ってきた。

「……ぶ、無事？」

「……………」

燐の帰還に、皆が絶句していた。

「おおおま……もう一匹は……」

ここにいる全員で（例外が二人）で倒したのを、燐は

「え……？ああ、倒した！」

その言葉に貢献者二人は（八神と勝呂）

「お前らも倒したのか？スゲーじゃ、え？フンプ！？」
勝呂はラリアットをし、八神はぶっ飛ばされた燐の上に礮石バリヨンを乗つけた。

「大丈夫？」

それを冷ややかに見る出雲はしえみを起こしていた。

「……………うん」

「・・・、あたし、あんたが大ッ嫌い・・・!!・・・でも今回は助かったわ。それだけ・・・!」

まどろっこしくはあるが、しえみに礼を言う出雲。

「・・・これは」

「雪男」

「先生」

その時、雪男が入ってきて、少し驚いているようであった。

「!ネイガウス先生」

「!!!」

そして、なぜかネイガウスが入ってきて、それに、さらになぜか隣が反応した。

此に病める者ありその三（後書き）

さあ、此に病める者ありは終わりました！
次話からはオリジナル要素が強くなります！

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。
いやほんとにお願いします。

おもひで（前書き）

久しぶりです。

期末考査も終わり何とか投稿できるようになりました。

では本文です。

おもひで

SIDE OFF

「くっそお ……!!!」

燐の怒声が病室に響き渡った。

「まさか・・・抜き打ちテストだったなんてな・・・」

燐はそのあとすぐに、落ち着きベッドに寄りかかった。

実はあの屍は、^{グール}候補生昇格試験の一環だったのだ。

「まあ、大丈夫だろ」

それに八神は安楽的と言えるような事を言った。

ちなみに彼はなぜか^{ドクター}医工騎士に驚かれ、今すぐ集中治療室に連れて行かれそうだったが、メフィストの指示によりそれは断念された。

そして、それをなぜか、出雲と九城はうつむき悔しそうな顔をしてそれを見ていた。

「ああ~~~~。僕、大丈夫やるか・・・」

「なんや。そんなもん今考えてもしよーも無いで」

子猫丸の弱気な言葉に、勝呂は適当に答えたが

「坊や志摩さんはええですよ!・・・僕ときたらろくに腰立たんようになつてたんですから・・・」

しかし、子猫丸は心配症なのか言葉を続けるが

「あんた達は大丈夫でしょ・・・奥村先生は試験前・・・チームワークについて強く念を押してたわ・・・つまり候補生^{エクソワイア}にもとめ

られる素質は“実践下での協調性”……!

「まあ、そうだろうな」

出雲の説明に八神は興味無いと言わんばかりに適当に相槌を打った。

「……ねえ、一つ聞いていい?」

「なんだ? 出雲?」

出雲は八神に何かを聞こうとした。その雰囲気はこの場にいた全員が注目した。

「なんで、あんな適当に屍グールを撃退したの? あんたの実力なら適当な使い魔で何とかなるでしょ?」

「何をいつとるんや、おまんわ……」

出雲の言葉に勝呂は耳を疑った。的当に撃退した、適当な奴で勝てた、この言葉はあの試験の意味を根底から覆すような意味であったからだ。

「はは、やっぱり気づいてたか……いや、母さんに本気を出すのは絶対にやめろって言われたんだよ……」

「どうして!!!? 朴だつてあいつに!!!」

八神の何の悪びれの無い言葉に出雲が怒鳴った。

「……、どうして……か……。別にどうでもよかった、人の心配がいつぱいあつたしな……。Despair611それが俺に、俺が魂に誓った名だ」

「ッ!?!? ……もういいわ……」

Despair、日本語で『絶望』を意味するラテン語であった。これを語った、と言う事はこれ以上探るな殺すぞ。と言外に八神が警告している証拠だった。

「?????。何言つてんだお前ら……?」

「バカっ！今そないな空気ちゃうやろ！」
隣はわけが解らないという顔をして、八神に聞いたが勝呂はそれを止めた。

「・・・お兄ちゃん。完璧にレイヴェニアちゃんに関わってるよね・・・」

「ん？当たり前だろう。なんで俺がそれ以外で母さんの言う事を聞かなきゃならんのだ？」

九城が謎の人名を言い、出雲以外の者が首をかしげた。

「レイヴェニア＝バードウェイ。言ってみればお兄ちゃんの許婚よ・・・」
頭を抱えながらとんでもないことを言う九城

「・・・はあ！！！？」「・・・」
そして、当たり前なのだが周りの者は驚く。
ちなみにこの声で寝ていた、しえみが起きてしまった。

「なにを驚く？これでも二カ月に一度は俺もあっちに行ってるぞ？」
「いや、あのね・・・イギリス人が許婚って時点でかなり常識外れだし、そもそもこの時代に許婚って言うのがね・・・」
訳が解らないという顔をした八神に九城は説明をしたが・・・

「？ああ！そうか！お前ら、昔、俺とレイヴェニアの嫌がらせで一時間ほど生ゴミバケツに閉じ込められたのをまだ恨んでるんだな！」
「・・・いや・・・もういいや・・・」

我が兄ながらこれで大丈夫か、と思うほどに的外れなことを言う八神を心配する九城。

「ええと、はなしもどして、ええか？」

気まずそうに話を戻そうとする勝呂

「ん、いいが」

まわりは、もうちよつと聞きたそうな顔をしているが八神が即答で答えたためあきらめた。

「まあ、八神と杜山さんは確実に合格やな！そうじゃなかったら俺ら全員落ちるわ・・・」

話を強引に戻した勝呂などを中心に雑談が続いていった。

「なあ、八神」

「何だ。燐」

二人は病室から出て廊下で話をしていた。

「さっきお前が言った、えーと・・・」

「Despair 611の事か？」

燐は八神に先ほどのことを改め聞いてきた。

「そう！それだ！それどういう意味なんだ？」

「『絶望と言う名の贈り物』だ。Despair単体では絶望だけ

なんだがな」

「へえー。カッキーなあ、なんか」

燐の言葉に顔をしかめる八神

「俺以外にそんな事言うなよ。これは覚悟でも、決意でも、戒めでも、とても大事な、名なんだ」

これは、俗に魔法名ともいわれている名でもあった。

エクソシスト 被魔師全員がこれを持っているわけではなく、本当に大切な誓いを立てた者が持つ名でもあった。

ただ訓練生でこれを持っているのは本当にまれなことであつたが・

「そ、そうなのか？悪かつたな・・・なんか・・・」

「ああ、別にいいよ」

そんな話をしていく二人であつた。

それから数日後

「無事全員候補生昇格エクソシスト・・・！おめでとぅございます？」
八トなどを出しながらそのことを告げる、メフィスト。

「お・・・おお~~~~しゃあ~~~~!!」

「よ・・・よかつた!」

「やつた〜」

「まあ、当たり前だな」

これを聞いた元訓練生改め訓練生達は口々に感想を言っていた。
しかし……

「でもさー、これって母さんがこっちに来るんだよね」
九城の言葉に、八神と出雲は固まった。

「はい。先ほど砕さんにこの事を話したら、『夏休みにはそっち行くからい場所作っとけ!!!』と言われました」
メフィストが、やれやれとやりながら言う。

「い、いやでも俺はイギリスに行けばいいし……」

「なっ!?! 逃げるんじゃないわよ!」

二人は何かを言っているが、候補生達は首をかしげた。

「ああ、彼女は私と同じ……砕さんは『名誉騎士』何ですよ」
なんかとてつもなく凄い事を言うメフィスト

「はあ!?! 名誉騎士って一人じゃなかったんですか!?! いやそれ以上」

混乱する訓練生達

「ん? あーと、ではみなさん。魔銃について何か知っていますか?」

「そりゃあ、もちろん……」
竜騎士志望の勝呂が答えた。

魔銃とは古くから研究されていた分野で、その目的は魔剣と同じく、悪魔を銃にも憑依させれるか。と言ったものであり、またこの数十年で実用的なものが開発されたものであった。

「そうです。そしてその魔銃の開発者が神木 砕さんなのです! その功績が称えられ正十字騎士團の名誉騎士になったのです!」

あまりの事に周りはものも言えなかった。だがメフィストは続ける

「ちようどいい機会なので、正十字騎士團についても詳しく教えますね」

「ちよ！？フェレス卿！？それは二年生の単目ですよ！？」
雪男が止めたが

「それもそうですね。立ち話は流石になんですし、もんじゃでも食べながら話しましょう」

見当はずれな事を言っていた。

駄菓子屋

「えつとですね。まずは聖騎士パラディンに替えは効いても、四大騎士アークナイトには替えは効かないというところから話しましょう」

駄菓子屋で話を続けるメフィスト

簡潔にまとめるところだった。

四大騎士アークナイトからは聖騎士パラディンは生まれない。

これはおかしいことだった。普通は聖騎士パラディンが居なくなったら四大騎士アークナイトから誰かを引き上げるはずなのにだ。

事実、実力はもちろんのこと権限、発言力、その他もろもろ四大騎士アークナイトのほうが聖騎士パラディンよりも上であった。

四大騎士のメンバーは、

ローラスチュアート、ワシリーサ、マタイリース、そしてフィアンマの四人で構成されていた。

そして、ローラスチュアートは正十字騎士團十字教三大派閥の一

角イギリス清教の最高司教アーキbishoppであり

また、マタイ^三リースに至っては正十字騎士団十字教三大派閥の中でも特に威厳のあるローマ正教の教皇であつた。

この二人にはいくら三賢者グリコリであろうと下手に意見が言えないのが現状、またそのほかの二人に至つてもかなり特殊な人材であるために上の二人とほぼ同じ状況であつた。

ちなみに、この人員は30年前から変わっていないそうだ。

「とゆうのが、四大騎士アークナイトです。いや彼らは、いくら私と言えども敵に回したら一日生きられるかどうか……」
あまりの事にボー然とする訓練生達エクスライア。

「まあ、今日はこの話はここまでと言う事で、もんじゃを頼みましょー!」

そう言うつと浴衣姿のメフィストは立ち上がり

「電話を少ししてきますね」

と言って出ていった。

「いや、おまんの母親凄い人やつたんやな……」

「ん? 凄いぞ。いろいろな意味で……」

勝呂が八神に話しかけていたが

「いや、本当にすごいわよ。高校生つて言つても通じるくらい若作りしているし」

出雲が八神の言っていたいろいろの一つを打ち明かした。

「そついや、私が小1の事から29歳つて鯖読み続けてるよね。誰も疑わないし……」

さらに九城が続く

「とゆうか、二カ月に一度、イギリスに行く金をよこしてくれるけど、あれってどうやって手に入れてるんだ？働いてる姿なんか見たことも無いのに」

さらにさらに八神が続く

「・・・いや、ホンマ凄いな」

勝呂が、これ以上聞いていたら、どうかしそうだと思ったのか話しを終わらせた。

「そついや、八神君。君の許婚つてどないな人なん？」

次に志摩が八神に問いかけてきた。

「写真あるけど見るか？」

「・・・もしかして肌身離さず持つてるわけ？」

ポケットから写真を取り出す八神に出雲は思わず問いかけた。

「？、そつだが？」

八神の言葉にもついやと言いながら、頭を抱える出雲と九城

「八神君。見して見して」

「ほい、汚したらぶち殺すからな」

「わかっとなるって」

そつして写真を見る志摩。ついでにほかの訓練生達エクソファイアも覗き込んでいた。

そこに映っていたのは金髪碧眼の美少女であった。

「ブハッ！！ふ、普通に美人や！！！？え？許婚ちゃうん！？」

「わゝ、かわいいこの子何歳？」

「同い年だが？」

しえみの問いに、訳が解らないというような顔をしながら答える八神。

「……いや、でもこれ……異様に露出少くないか？顔以外は素肌だとるように見えんし……」

「ああ、それはレイヴェニアちゃんが『八神以外に顔以外の素肌を見せるだなんて、考えただけでも吐き気がする』とかいって、真夏でもレースの手袋にストッキングとか着用してるんだよ」

普通は手ぐらいは見せてもいいのに、と言いながら頭を抱える九城。

「とゆうか、二人が一緒にいるときなんか見るに堪えないわよ。どこでもかしくでもいちやつく上に、二人ともDSで……今までどれほどの罫にはまってきた事か……」

何かを思い出したかのように頭を抱え始める出雲。

そうこうしているうちに、日も暗くなりみんな帰っていった。

おもひで（後書き）

はい、とある魔術の禁書目録の登場人物だの、世界観だのがいろいろ出てきましたね。

レイヴェニア「バードウェイはとあるの世界より少し大きくした感じのを想像して頂ければ幸いです。

たぶん明日も投稿すると思います。

そしてこれからは、もっと、とあるの世界観が派手になっていく予定です。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

感想本当にください！！なんか一週間放置していたのに感想一件も来なくてちよつとがっかりした、超子供な作者ですから感想ください！恵んでください！

初任務（前書き）

今回は久城中心です。

感想が来ずいじけていたら、こんな時間になりました。
すみません。

では本文です。

初任務

SIDE OFF

「あゝ、暑い」

そう言い放っているのは、九城であった。

「仕方ないでしょ。でも蚊が多い」

次に答えたのは出雲であった。

「・・・君たち、今が任務中だという事を忘れているよね？」

次に行ったのは、上二級被^{エクス}魔師^{シスト}で、この任務の責任者であった。

「いや、でも今、運んでるのって野孤だね？完ツツツ全に、お兄ちゃんの得意分野だね！？」

彼女たちが、今運んでいるのは野^や孤^こと言われている、狐妖怪であった。

そして、八神は生まれつきと言うか、神の付け加えた能力により、狐に好かれやすい体質をしていた。

「・・・、ここ、山よ。あいつは貧弱ってわけじゃないけど、たぶん来ていたら、今頃ぶっ倒れているはずよ」

「話の腰おるようで悪いけど、今の話に出てくるのって誰？」

そんな話をしながら、野孤を運ぶ彼女たちだが・・・

「そついや。なんで、この野孤を運んでるの？」

九城が任務の根本的な・・・と言うか、任務内容の紙に書かれている事を、聞いて来て頭を抱える、二人。

「いや。この野狐は、この山が住みかじゃなかったんだけど、山が人間によつて破壊され。そして、報復とばかりに人間を喰らつて被^{エキ}魔師^{ソシスト}に追われていたんだよ」
それに、丁寧^{エキ}に答える上二級被^{ソシスト}魔師。

「もうすぐで、別個隊に会えるはずだから、それまで・・・？」
「・・・血の臭い？」

血の臭い。それが三人の不安を駆り立て、急いで別個隊に加わろうとし、先を急いだ。
そしてそこにあつたのは

「え・・・？全滅？別・・・個・・・隊が全滅？」
そう、別個隊が見るも無残な姿になつて、転がっていた。

「私の言葉に迷い」 “お前の姿に戸惑い” “その力は防げない”
“出でよ”

「稲荷神に恐み恐み白す」 “為す所の願いとして” “成就せずと
いうことなし”
しかし、候補生^{エキソライア}であるはずの二人は、冷静に使い魔を出した。
それに、半分放心していた上二級の被^{エキ}魔師^{ソシスト}は、自分の武器である刀を取り出して、指示を出したが、上から大猿が降つてきて

「我が山を、血で汚しおつて！！生きて帰れると思つなよ！！！！
人間どもめが！！！！」

いきなり現れた、大猿。俗に猿神と言われるような、悪魔であった。

「・・・喰らえ、餓狼」

「えっ！？いきなり攻撃！？もうちょっと聞いてあげようよ！この
山の主だよ！？」

「ぬ！？外道め！！！！これごときで私が倒せると思つな！！！！」

いきなり攻撃する九城であったが、猿神は知能も高く話し合いで終わる場合も多かった。そして、猿神は襲ってきた餓狼を避け、怒鳴った。

「はあ。やっぱこいつを使わなきゃならないのかな？」

そっぴいながら、二丁の銃を取り出した九城。そして指をナイフで軽く切り、血を銃に垂らした。

「その弾は騙し」 “その軌道は変動し” “その力は我がために”
「！！！」

詠唱をし、すると

「呼びましたか？主よ」

「敵を撃つのですか？主よ」
銃がしゃべりだした。

「ま、魔銃！？え？もしかして、あなた達の神木って、あの神木碎さんの神木！？」

「私は、違うけど九城はそうよ。ウケ、ミケ！援護をするわよ！」

「白狐づかいが荒いなあ」

「チツ、めんどくさい」

上二級^{エカソシスト}被魔師が、九城が魔銃を持っている事に驚いた。

それは、当たり前のようなことであった。

魔銃は、それほど普及はしておらず。魔銃を持っているのは、上級^{エカソシスト}被魔師でも一握りであったからだ。

『ふん！それがどうした！』

「こっぴつけたんだ！喰らえ餓狼」

九城は餓狼に命令すると同時に銃を撃った。だが弾は出ずに、餓狼が出てきた。

これは、魔銃特有の特殊能力であった。そして九城の魔銃の固有能力は幻術であった。ほかには全魔銃共通の能力として弾丸の軌道操作もあった。

『む！？幻術の類か！？』

それに驚く、猿神。さらに後方と前方からは出雲の白狐、左右からは、どちらが本物かもわからない餓狼。

「見えぬか。左が本物だ」

『騙されるか！！！！』

猿神は白狐を差し置いて、右の餓狼を攻撃した。

しかし、それは霞となって消えたが、さすがは神の名を授かるもの。すぐの反応し、白狐もろもろ薙ぎ払いながら左から来る餓狼をぶん殴った。

が、餓狼は水飛沫となつて猿神に降りかかった。

『ムツ！？水か？これは？』

「そうだよ。本命は機関銃」

そう言いながら、機関銃に切り替え、撃ちまくる九城。

『遅いわっ！！！！』

そう言いながら木に飛び移る猿神。そして、物凄い速度で木の実を九城に投げつけたが

「私を忘れていないっ！！！！？」

上二級被魔師エカソシストが、割り込み、木の実を一個一個斬り落としていった。

「へえー、凄いなー。でもこれで終わりだよ。『言言』げんげん 走れ」

『なっ！？これ・・・は・・・！！！！？』

九城が、何かを言うと、猿神の全身から水が出てきて苦しみだした。

「“餓狼”っていう名を聞いて、攻撃系の使い魔を想像したでしょ？こいつの正しい名は“言言”。その能力は“言言”を“喰らった”相手の体液を自在に操るんだ」

猿神は答えない。否、答えられなかった。普通なら悪魔であろうと死んでもおかしく無い量の体液を操っているのだから、生きて、まだ立っている。それは称賛に値することであった。

「私はお兄ちゃんとレイヴニアちゃんに、いやと言っただけで教えられたよ。真っ直ぐに突っ込んでいくのは、馬鹿のやること。罨を何重にも張り巡らして、言葉で騙す。ってことをね！！！」

九城が思い出したのは、

二人に騙され、生ゴミバケツに一時間突っ込まれた記憶。

二人に騙され、炭酸飲料にハツカ飴を入れ酷い目にあつた記憶。

二人に騙され、母親の前で語尾に「ニヤー」と付け酷い目にあつた記憶。

しかもこの二人は、ちゃんとアリバイまで作つてあるから面倒この上なかった。

『グヌヌ、まだ、やられるわけにはいかんだ。この山を汚す人間どもを生きて返すわけにわ・・・』

その言葉を皮切りに、バタツと倒れる猿神。

「別に殺しちゃいけないよ。おそらく、野孤がこの山の生き物を殺したんだろうね。その前から人間が木とかをきり落として、野孤のしたことを人間がした、と勘違いしただけだろうしね」

そう言いながら、餓狼の魔法円を破る九城。

「ねえ、君本当に候補生？^{エクソワイア}実力的に言えば、私を超えちゃうけど・

・・・」

なかば、自分を恥じるように言う上二級被魔師。エクソシスト

「あー、私って知識量とかを補うために、あそこ入っただけだしね。でも、お兄ちゃんなんかはもつと凄いよ。なんで被魔塾に入ったのが解らないぐらいに」

「そーいや、たしかにそうね。なんでアイツ被魔塾にいるのかしら？」

そう言いながら、この場を離れる九城と出雲と上二級被魔師。エクソシスト

さて、場所は変わり、ここは神木家の本家のとある一室である。

「いやー、あんたら本当にどんだけ挫折知らないのよ？私もこの結

果にはびっくりしたし、あの女狐の常識っていうか、良識の無さを改めて思い知ったわ」

そう、言うのは神木 碎。魔銃の開発者として世界中の被魔師エクソシストにその名を轟かせるものであった。

彼女の服装は巫女装束ではあったが、綺麗な黒髪を先つちよだけ、前側は赤、左側は白、後ろ側は異様に艶のある黒、右側は青に染められているという謎の風貌をしていた。

「それを言うだけのために、俺を正十字学園から呼び出したのか？まあ、レイヴェニアが居たからいいけど」

「私はイギリスからだぞ？まあ、八神がいたからいいが」

碎の前で話を聞いていたのは神木 八神とレイヴェニア「バードウエイ。ちなみに二人はひつついており、周りをイライラさせるまでに惚気ていたが、この部屋にいるのは、この三人だけであり碎はこれを推奨していた。

「まあ、二人とも、上一級被魔師合格おめでとう。配属部隊だけでもあ、大方予想しているだろうけど、イギリス清教第零聖堂区『必要悪の教会』。それと、配属日程だけど、まあ、林間合宿が終わつたらすぐね。それでねー」

二人は、最後の恐るべき猫なで声に戦慄を覚えた。

「いまから、正十字学園に行くわ。フェレスにはもう伝えたし、あと藤本獅郎との約束もあるしね」

藤本獅郎。この名を言ったが、今の二人にはそんなことはどうでもよく

「俺の学校は？」

「もうイギリスの入学先は決めてある」

「待っているまで、私は何をしていればいいんだ？」

「大丈夫。二人とも私が受け持つ授業を手伝ってもらおうから」
さらり、さらりと、とんでもないことを言う砕。

「ちなみに、イギリスに行くことにすれば、……………」
一緒に住めるわよ?」

「行く!!!何が何でも行く!!!」

「行かせる!!!何が何でも八神を行かせる!!!」

二人にとってみれば、学校が変わるとかよりも、住む場所が変わるとかよりも、一緒に住めるかどうかの方が大事なようだった。

初任務（後書き）

神木 砕ついに登場!!!

いままで、見え隠れしていた九城の実力を書かせて頂きました。

レイヴェニアの性格がいまいち解りませんが、まあ、この作品内で
のものと思ってください。

八神性格ブレまくりでしたね。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

八神、軽くキレル（前書き）

題名だけじゃ意味不明でしょうが、八神が軽くキれます。そして、神が久々に登場します。

では本文です。

八神、軽くキレル

SIDE OFF

神の空間

「アベシツ!!!!?」

いつもどおり、神が八神に蹴り飛ばされた。

ただ、いつもと違う点があるとすればそれは、神がもうすでにボロボロで松葉杖まで使っており、そして八神の蹴りがいつもより強かったことだろう。

「ちょ、ねえ!!!君さあ!!!こんなか弱そうな少女がボロボロになってるのになんで思いつきしけるの!!!?」

「ぎっけん。俺はさっきまでレイヴェニアと一緒に寝ていたのに、どうしてこうもゴミくずに会わなければいけないんだ」

神は八神の行動に怒り怒鳴ったが、八神は・・・まあ・・・神を貶した・・・

「ねえ!!!たしかに君の全てを設定としか見ない性格は大分直つたけど、今度は、君の嫁関係になるとブチギレルは、デレルは、性格豹変しすぎじゃね!!!?むしろそつちで破綻してね!!!?」

「あゝあ!!!?」

「スミマセン。ワタシガチョウシニノリスギマシタ」

今度は神が、八神の「破綻しているところが違ってきてね?」と言ったが、八神は神を凄まじい形相でいらんだため、神は謝った

「で。何の用だ。このゴミかす」

「私の評価酷くね!!!?」

神をゴミかすと馬鹿にし、神はそれを酷くねと言ったが、八神が睨んだため神は黙った。

「で。な・ん・の・よ・う・だ？」

「えっとですな〜」

軽くキレかかっている八神に、神は恐る恐ると言った感じで用件を言い出した。

「とうとう、上の神々にばれてね？とりあえず君と九城の転生者だという自覚と、ここで私に会った記憶を消せって言われたの・・・です」

ブチッ。どこからか・・・いや。八神の方からそんな音が聞こえたような気がする。

「・・・。そうか。それじゃあ仕方ないな」

「え？ゆ、許してくれるの？」

以外にもすんなり「仕方ない」という八神

「ああ。仕方ないからお前を殺す」

「畜生！！！！やっぱこう言うオチか！！！！」

ここが吉本とかだったら、安っぽいコントに見えるようなやり取りをする一人と一柱

「だからさ！！！！君たちにもう二つほど願い事をかなえさせるって上から言われてんだよ！！！！これでどうにか許して下さい！！！！お願いします！！！！」

「あゝアゝ！！？じゃあ、あれだ！！！！俺とレイヴェニアの幸せな未来とオオオオオ！！！！」

もうキレているのか、異様にテンションが高い八神

「ねえ！？君達の幸せな未来ってさあ、絶対に人類の脅威だよね！
！！？」

「だからどうしたアアアアア！！！！？」
「どうもしません！！！」と言う神に対して八神はもう一つの願いを言った（少しは冷静になって）

「いま、俺の魔術の知識を書物にして、拠点の一つに置いていくれ」
「解った。いやね？ホントにごめん。私も悪いとは思ってたよ？ちなみに君達をあそこに送って、面白い設定は確かに私は加えたけど、それ以外は全く私は干渉してないから。おっと、もうそろそろ妹さんにこのこと説明しないといけない時間だ」
最後の最後になって、八神に謝罪をする神。

「そうか・・・これでお前に会うのも最後なんだな・・・」
その言葉に少し残念そうな声をする八神だが・・・

「ねえ？何で腕はガッツポーズなの！？」
言ってることとやってることが一致していなかった。

「仕方ないだろ？さっさと俺をレイヴエニアの所に戻せ」
「じゃあね。お幸せに。二人に神の幸あれ」
そうやって、転生者はその自覚は無くなった。

何かの拍子に思い出す。だなんてことは無い。
神の力を全力で使い、記憶を破壊したのだから・・・
思い出すだなんてことは無い。

そう、絶対に・・・
もしかしたら、神はこうなると解っていても、関係性を求め、わざと二人殺したのかもしれない。
神に名は無い。否、付けられなかった。名のある神たちは、大半が

彼女を見下し、逆に同じく名の無い神たちは、名の無い神の中では力のある彼女に嫉妬していた。

自分は、常に中途半端だった。そう自己嫌悪に浸っていたのかもしれない。

こんな中途半端な力よりも、名が欲しかった。仲間が欲しかった。

そう願いつけたが神が何に願うというのだろう、と・・・

ただ、神は・・・

「うん？これからは彼らの活躍でも見てみようかな？そうだなそうだな！アルテミス様をお願いして、しばらくあの世界だけの管理に専念しようっと！」

前向きに、前向きに考えた。

この提案は、アルテミスの助言もあってか、すんなり通され実質上神は長い休暇をもらったのであった。

八神、軽くキレル（後書き）

・・・うん。最後らへんが、神の心情みたいになっちゃったな
〜？

（神）おい！何が悪いんだよ！？

あれ！？何で神がいるの？

（神）アルテミス様に頼んでここに作者との、ミニコーナーを作っ
てもらったんだ！！！！

アルテミス様すげー！！！！じゃあさ！！！！

（神）なんだい？

転生者の被魔師って題名変えようかな？

（神）いや、やめとけ。この題名でアクセス数を稼いでるようだしね
それもそうか・・・。じゃあ最後に

（神）あの事言うの？

ああ。じゃあせーの

「誤字脱字の報告、感想お待ちしております」

鬼事（前書き）

はい、不純の道化です。

この話は、原作でもかなり重要ですね。

もちろんこの作品でもかなり重要な話になります。

では本文です。

鬼事

SIDE OFF

遊園地：メッファイランド

「皆さん。初任務どうしたはりました？」

志摩が皆に初任務の事を聞いてきた。ちなみみんながここにいるのは、任務であり楽しく休日をごそー。とかではない。証拠に周りには人はいない。

「・・・どーもこーも・・・」

勝呂は少し不満そうな声で話して言った。どうも彼らは任務と言うよりは雑用をさせられたようだ。

そんな中で一人

「俺は一足先に悪魔倒しちゃったぜ！」

これが漫画だったら「ジャーン」とか言う効果音がつきそうな顔で言う燐

「・・・はあ？」

「しかもそのあと俺の使い魔にしたんだ！」

信じてなさそうな声で、一応聞く勝呂にさらに言う燐

そのあと勝呂が「じゃあ、使い魔出せ」的なことを言ったが燐は

「え・・・？寮に置いてきたよ」

使い魔の意味が無くなるようなことを言った。

そのあと勝呂は燐を信じていないような感じで次の話に入っていく、雑談とかをしていた。

「・・・てか女子おそない？それに八神君も」

「すみません！」

志摩がちよつとした疑問を言い、ちようどその時、出雲と九城と見えみが走ってきた。

「遅れました・・・！」

「し、しえみ！？どうした？キモノは？」

走ってきたしえみはなぜか着物では無く、正十字学園の制服だった。・・・、まあ、それが正常なのだが・・・

「着物は任務に不向きだからって・・・理事長さんに支給してもらったの・・・神木さんと朴さんに着方教わっていて遅れました・・・！」

前半は燐に後半は雪男に言うしえみ。

そのあと「変じゃないかな？」と聞くがほぼ全員が「可愛い」といった。

ちなみに、燐はセクハラまがいなこと言い雪男に、本で顔を叩かれた。

「あ。お兄ちゃんは今日は来ません。多分来させようとしたら学生を皆殺しにするよ。あ！訂正、絶対にだったよ」

テヘツと言う九城だが、どうも冗談には聞こえなかった。

「え・・・っと・・・どうしてですか？」

雪男が恐る恐ると言った感じで九城に聞いた。

「本家に呼ばれたんだよ。で、レイヴェニアちゃんもいると、ハッ、どうせ当主どもがお兄ちゃんとレイヴェニアちゃんにネチネチネチ

ネチ文句を言うに決まってるよ。あれは、上層部が欲を貼っただけなのに、そのすべてをお兄ちゃんに押しつけやがって！」

「はい？どう言う意味ですか？」

「・・・なんでもありません。九城言い過ぎよ」

意味深なことを言う九城だが、これを詳しく聞こうとする雪男。これに出雲は「なんでもありません」といった。神木家は世界的に有名な被魔師の名家だ。これ以上聞くなはまずいと感じたのか、そのあとは誰もこのことは聞かなかつた。

「・・・では、一人の欠員が入るとはいえ・・・全員がそろつたため組み分けを發表します」

何か申し訳なさそうに言う雪男。

「三輪、宝。山田、勝呂。奥村、杜山。・・・出雲さん、九城さん。志摩以上です」

間際らしいからだろうが、出雲と九城の事を本名で読んだ雪男。彼らの反応はさまざまだったが

「ちょ！若先生！！僕なんで一人なん！？」

「八神君がいないからです」

志摩がまっとうな質問をしたが、八神がいないからで一掃された。

今回の任務は^{ゴースト}霊の探索だった。

^{ゴースト}霊は死んだ、人や動物から揮発した物質に憑依する悪魔であり、大抵はしたいの生前の感情に引きずられる。

と、まあ、そんな感じで^{ゴースト}霊の説明も終わり、みんなが組ごとに散らばった。

さて、場所も時間も変わり、ここは神木家の本家の別宅である。ちなみに朝である。

「おい。起きろ。レイヴェニア起きろ」

「・・・こんな美少女が浴衣でお前の上に乗っているのに、どうしてこうもお前は襲ったりしないんだ？」

八神とレイヴェニアは、・・・まあ、・・・おかしい痴話喧嘩をしていた・・・

「・・・3歳のころからお前はそうやっていただろうが」

「ん？そうだったか？」

ちなみに二人は同い年である。

「おい！！！！ふつたりつとも　！！！！朝だよー！！！！」

そんな中いきなり砕が、二人の寝ている部屋に入ってきた。ちなみに二人とも浴衣はかなり着崩れている。

「二人とも　？もつと脱ぎ脱ぎしましようねー？グヘヘ」

そんな二人を見て目を？にし、よだれを垂らしながら迫る砕。それに対し二人は見事な早着替えで対応した。

「チツ。まあ、もうそろそろ準備しなさいねー。ご老人達が呼んでるわよー」

どうも砕は、言葉に「まあ、」と言葉の最後を伸ばす癖があるよう

だ。

そんなこんなで、二人は当主会談に呼ばれた。

「で、何の用だ。婆」

いきなり八神は、神木家本家の当主を婆呼ばわりした。

「き、貴様!!!大婆さまになんてことを!!!」
分家の当主の一人が叫んだ。それに便乗し多くの分家当主達が八神を非難した。

「だって、本家当主寝てるぜ?」

そんな馬鹿なといいながら、本家当主を見る分家当主達

「すうーすうー。むがむが、入れ歯が生え換わった!?」
本当に寝ていた。しかも意味不明な寝言まで言っていた。

「大婆さま!?起きてください!それに入れ歯は生え換わりません!?!」

「ムツ!?起きておるぞ!?ほら・・・ちゃ・・・ん・・・すうーすうー」

ダメだこりゃー!!!と分家当主達が叫んでいる間に八神とレイヴエニアは脱走した。

それから、二人は砕と話なんかをしていたが

「まあ、もうそろそろ、正十字学園に行こうかなー?」
と、砕が言ったため、八神とレイヴエニアは身支度をし、正十字学園にいつも以上に不機嫌そうな顔をしながら行った。ちなみにこの時、^{ゴースト}霊の探索が始められており、^{ゴースト}焔たちが^{ゴースト}霊を発見していた。

さて、またところが変わりここはメッフィーランド

「っーか、つい勢いで追っかけちゃったけど……。見つけた事は報告しておかねーとな」

燐は^{ゴースト}霊を報告したことを雪男に報告しようとしたが、その時上から手が伸びてきて、剣を、倶梨伽羅を奪い取った。

「!!!???うわっ。誰だてめー!?返せ!!!」

「誰……。?あ、ハイ」

後ろから、剣を奪い取ったのは頭のとんがった、どことなくメフィストに似ている者であった。

「ボクはアマイモン。悪魔の王様です。あなたの兄のようなモノです。ハジメマシテ。あと、剣は返しません」

「?.....」

律義に自己紹介をするアマイモン。そして剣は返さないとこも言った。

「ははあ。これが降魔剣。……。一体どういうからくりなのかな」

そう言い終わると、燐の剣を何となくと言った感じで抜くアマイモン

「な!や、やめろ!!」

そして、燐が反応したがもう遅かった。剣は完全に抜かれ燐の周りは青い炎で包まれた。

それからアマイモンは剣の説明を……。というか、自分なりの解釈

を一通り話したが、燐はそんなことはどうでもよくアマイモンに飛びかかった。

その時メフィストをかたどった像の首が燐のキックで粉碎した。

「あー。兄上の首が」

そう、アマイモンが言ったがたいして何も思っていないようだ。そして、ジェットコースターの所に飛び移った。

「てめえ、まじで何が目的だよ！」

メフィストの像（首なし）の上でアマイモンに向ってどなる燐

「目的。暇だったので遊びに来ました」

「はあ!？」

暇だから遊びに来た。これが友達との話だったら納得がいくが、彼は悪魔、しかも大物。そしてここは^{エクシスト}被魔師が多くいる場所。どう考えても不釣り合いだ。

「日本の遊びも少々勉強したんです」

そう言いながら、ジェットコースターの骨組みを登るアマイモン。

「鬼さん^{おに}こーちら 手ーの鳴ーるほーうへ」

「・・・のやるオお。ナメてんじゃねーぞ!！」

そう言いながら、アマイモンの方へ行く燐

「鬼さん^{おに}、こーちら 手ーの鳴ーる方へ」

そう言いながらアマイモンは、ジェットコースターの一番上らへんで追いかけてきた燐にデコピンをした。だが、デコピンのはずなのだが鉄でできたジェットコースターの骨組みを粉碎しながら燐を叩き落とした。

「何やアレ。何が起きた!？」

ジェットコースターが、アマイモンのデコピンで崩れていくさまを遠くから見ているのは、勝呂と山田であった。

山田はジェットコースターが崩れると、その方向へ走っていく

「!?!。おい!どこへ・・・ゲエ!?!」

勝呂の最後の反応がおかしくなっているのは、山田がジャンプでどこかに消えたからであった。

そんなとき、アマイモンは落ちていきなすべのない燐を殴っていた。

「う~~~~ん。ガツカリだ。こんなものに、父上と兄上が夢中になる理由が解らない」

能面のような顔のため、表情からはいまいち解らないが、アマイモンの声には落胆の色が見えた。

ただ、しゃべっている間も燐を殴りつけていたため燐の顔は血で染まっていた。

ズン、とそのよう中を音をたて地上に落ちた燐と、着地したアマイモン。

そして、アマイモンは止めと言わんばかりに燐の顔を殴った。

「あーあ・・・、いい退屈凌ぎになると思ったのに、なっ」

アマイモンは、喋っている途中で燐に殴り飛ばされた。いや、燐を知っている物が見たら本当に燐なのかという表情の燐にだ・・・

「グルル・・・」

燐（？）は標的であるアマイモンを一瞥し

「ガアアア」

唸り声をあげ、アマイモンに跳び上がった。

燐は炎（ちがひ）を使い、アマイモンを燃え上がらせた。

が、アマイモンは余裕の顔をしていて

「ワイイ。そうこなくては」

無駄口を叩く余裕でさえあった。

そして、アマイモンは地に手をつけ地震を起こした。

そして、必然的に脆くなつたジェットコースターが崩れ、その瓦礫

が、たまたまそこにいたしえみに降りかかった。緑男（グリーンマン）の幼生はとっ

さに木のバリケードを築いたが、そんなものでガードできる量では無かった。

しかし

「一本足の家の人食い婆さん 體のランプをくださいな。不実な継母達を焼き殺す、炎を噴き出す髑髏のランプを」

童女のような歌声が響いた。そして、しえみの上にあつたはずの瓦礫は燃え上がり消し飛んだ。

「・・・誰ですか？あなたは？」

アマイモンは正気に戻り体力をかなり消費している燐より、突然現れた真つ赤な修道服を着ているシスターの方に興味が向いた。

「ただの通りすがりのシスター兼魔術師兼被魔師兼四大騎士のワシ

リーサよ。あなたアマイモンでしょ？どうしてここにいるのかな？」

「・・・はあ。解りました。ここはいったん引きます」

そう言つて、アマイモンは倶利伽羅をワシリーサに投げつけ、どこかえ飛んでいった。

「おい！？何があつたんだ！？」

そんなとき山田がここに来た。

「あらー？その声はシユラちゃん？」

「っ！？ワ、ワシリーサ！？どうしてここに！？」

山田に向かつてシユラと言い、山田（？）は反応した。

「ん？、いやねー。藤本との約束を守りに来たのよ。いま、ファイア
ンマ以外の四大騎士アークナイトおよび砕がここに向かつているわよ」

「？、ファイアンマ？誰だそれ？つて、それどころじゃない！？何で
そんな大物がここに来るんだ！？」

先ほどまで当事者であつたはずの燐を置き去りに話を進めるワシリ
ーサと、パーカーを脱いだシユラ。

「……！！燐！？どうしたの！？」

その時、しえみが走つてきて、血だらけの燐を心配したが、その時
あちこちから扉が開いた。

「うう、イギリスでは真夜中だといけるのに、これではお肌も
荒れてしまいきけるのよ」

あいた扉の一つからは、見た目十九歳のバカ口調でベージュ色の服
を着た少女が出てきた。

「……」

あいた扉の一つからは腰の曲がつた老人が出てきた。

「まあ、九城ちゃんと出雲ちゃんはどこにいるのー！？早く顔見な

いと変態泣いちゃうよー！」

「どうでもいいから、俺とレイヴェニアを離せ」

あいた扉の一つからは高校生と言っても刺し違えの無いのが出てきて、両手で八神とレイヴェニアを抱いていた。

「え？・・・え？八神君？その人たち誰？」

しえみはあの中では唯一知っている八神にうるたえながらも彼らが何者なのかを聞いた。

「四大騎士三名と俺の母さんと、俺のよ・・・レイヴェニア」

「嫁と言ってもいいんだぞ？」

八神は懇切丁寧に説明したが、レイヴェニアは嫁と言ってもいいと答えた。

「あー？三賢者？まあ、今から正十字学園に来いー。え？来れない？じゃあ、あんたが神木家にきて、お漏らししてピーピー泣いた写真ネットにアップするけどいいよねー？え？来るの？いやいや、無理しないでいいよー。ふーん、じゃあ待つてるねー」

八神のお母さん・・・つまりは神木 碎はスマートフォンを取り出し、こともあるつか三賢者を脅した。

「・・・私が言えば良かったのではないか？」

腰の曲がった老人。マタイ・リースは碎に言った。まあ、確かに三賢者はローマ正教徒であり、ローマ教皇である彼の申し出には答えなくてはいけないのだが・・・

「ん？まあ、脅したかったただけなんだけどねー」

碎は、元も子もないことを言った。

「・・・。な・・・ぜ、あんたらがここにいるんだ？」

シユラは口をパクつかせながら四人に聞いた。が、その時、ある扉がバターンとあいた。

「はあ、はあ、で、要件とはなんですか？」

扉を開けたのは、三賢者グリコリであつた。かなり急いだらしく息が上がっているが、まあ、仕方ないだろう。

「うーん？いや、ここに魔神サタンの落胤こである、奥村 燐が居るんだけどさー」

「なっ！？本当ですか！？」

「てめー！？何言つてやがる！？」

砕はすんなり、奥村 燐が魔神サタンの落胤こであると言つた。

しえみは何が何だか分からずにいたが、雪男が来たため少しは安心していた。

「まあ、百聞は一見に如かず。ワシリーサ、その剣貸してー」

砕は、ワシリーサから剣を貸してもらい、そして

「や、やめる！？」

「砕さん！？何をやるんです！？」

奥村兄弟は焦つた。なにせ砕は剣を抜こうとしたのだから

「まあ、やめないー」

そういつて、砕は剣を抜いた。

そして、燐は青い炎に包まれた。

「ほれ、証拠。でも処刑はさせない」

三賢者グリコリは、ついできた聖騎士パラディンの、アーサーに処刑をさせようとしていたが砕はさせないと言つた。そして、鞆からある紙を取り出しこ
う言い放つた。

「ここに、ローマ正教、イギリス清教、ロシア成教、および四大騎士^{アークナ}全員、名誉騎士^{キャンサー}全員、そして、今は亡き藤本獅朗の署名がある。内容は奥村 燐の力が世に露見した際その身柄はロシア成教に移されるものとすると言ったものだ。もしあんたら、三賢者^{グリコリ}がこれを拒否した場合、ローマ正教、イギリス清教、ロシア成教は、正十字騎士団を宗敵とする。さあ、これに賛成する？しない？」

すらすらと、言葉を紡ぎ続ける砕。

それに反して、奥村兄弟は驚いていた。まさか父親が、藤本獅朗がここまで考えていたことに

「そんなもの、引き受けれるはずないだろう！そんな悪魔はさっさと処刑すべきです！でしょう？三賢者^{グリコリ}」

「まあ、あんたに聞いていないよー。エンジェル。私達は三賢者^{グリコリ}に聞いているの」

引きつけるべきではないという、アーサーだが砕にしゃべるな的なことを言われる。

「……残念ですが……」

三賢者^{グリコリ}の一人が断ろうとした時。

「さて、問題です。フィアンマはどこにいますでしょうか？」

「……それは、もちろん。バチ……まさか……」

砕が問題を出した。

その答えを言おうとした三賢者^{グリコリ}は気づく。

これを断れば、バチカンは地図から消えると。

「正解はバチカンです。さて第二問、フィアンマの力で、敵をバチカンと定め右手を振ったらどうなるでしょう？」

「貴様！さっきから言っている、フィアンマとは誰のことだ！？」

「いけません、エンジェル！解りました。その、奥村 燐はロシア
成教に任せます」

クリコリ三賢者は、燐の事をロシア成教に任せることの合意した。

と、同時に彼らは四大騎士、アークナイト名誉騎士のことを再認識した。

なんて化け物たちだと……。そう思いながら帰っていく三賢者と
その御一行。

「てめえー！さっきから何言ってるんだ！？おい！八神！どう言う事
だ！？」

「ん？お前が魔神サタンの落胤こだろうが俺は気にしないが？それにお前が、
ロシアに行くのは林間合宿が終わってからだから心配すんな」

燐は、先ほどレイヴェニアとともに、砕から解放された八神に何が
どうなっているのかを聞いたが、八神は的外れなことを答えた。
そうこうしている内にほかの生徒も集まり、燐の青い炎を見た。

「九城ちゃああん 出雲ちゃああん 会いたかったよー？」

「母さん！？いや、それよりあれってどういう事！？」

皆が、シヨックを受けている。それもそのはずであったが、アークナ四大騎
士はお構いなしに

「私は帰りけるのよ」

「私も業務があるから帰るとする」

「ちよつと、燐君借りるねー。全く、こんな子を拘束具も無しにほ
つつき歩かせるだなんてどうかしてるわよ」

「ちよ、おい！引つ張るな！？」

燐の炎は、収まったがすぐにワシリーサに引つ張られて、どこかに
行った。

それからしばらく候補生エクソワイアたちは、立ち尽くしていた。

鬼事（後書き）

作者「いや、急展開しすぎましたかなー？」

神「本当に急展開過ぎるよ。原作ブレイクもいい所だよ」

作者「そういや、ミニコーナーだけどさ」

神「お！考えたの！？」

作者「読者の皆さんにアンケート取ろうと思う」

神「は？どう言う事？」

作者「いや、考え付かなくてね？選択肢はこれだ！」

？登場人物紹介

？質問コーナー

？その他

神「まあ、普通かな？で、期限は？」

作者「12月18日までです。その他を選ぶ際はどんなものもいいかも書いてね」

神「じゃあ、最後に」

「誤字脱字の報告、感想お待ちしております」

魔術師对被魔師（前書き）

はい、いきなりわけのわからな過ぎる題名ですが、これらが苦手な人はやめといた方がいいです。

独自設定

パワーインフレ

後付け設定

雪男と隣が遠くなる

原作ブレイク

これらがあっても大丈夫な方は本文に進んでください。

では本文です。

魔術師对被魔師

魔術師

魔術と言つのが世の中にいる。

これは、異世界の法則を無理矢理現世界に適用し、様々な超常現象を引き起こす技術とされている。

そして、この技術を使う者たちを魔術師と言つ。

彼らは「まっとうな手段では叶わない願い」を持つが故に、魔術という異常な手段に頼った者達とされている。

その成り立ち故に、魔術師の行動原理にはまず「個人的な願い」がある。

故に彼らには被魔師エクソシストのように、世のため人のためと言つた行動原理は無く、むしろ「え？努力して手に入れた技術を何で他人のために使わなきゃいけないんだ？」と言つた感じで本気でうるたえる者までいる始末だ。

また、魔法名も魔術師が起源であり、被魔師エクソシストそのものまでが、魔術師が起源とされている。

世界には『魔術師兼被魔師エクソシスト』と言つた者もいるが、それはあくまで自分の手段のために被魔師エクソシストの免許も取つたようなものが多い。

さらに『被魔師兼魔術師エクソシスト』と言つた者はいない。それは魔術の知識そのものが、毒でありどうしても魔術の方が優先されてしまうからだ。

さらに、歴代の四大騎士アークナイト全員が『魔術師兼被魔師エクソシスト』であり、歴代の

パリンディン
聖騎士は『純粹な被魔師』であった。

S I D E O F F

場所：メツフィーランド

「どう言う事ですか！？兄の！兄の能力を生徒たちに露見させるだなんて！！あなた達は一体何を考えているんです！？」

雪男の怒号が響いた。しかも泣く子も黙りそうなほど怖い形相でだ。

「んー？まあ、何が悪いのー？あの子の能力はいずれ絶対に騎士團にばれるわ。じゃあその前に主導権を握る。とても理にかなってると思っけど？」

ただ、その形相、怒号は砕には何の効果も無かった。そして淡々と事実を告げる砕。

「っ！？じゃあ、僕もロシア成教に・・・」

「あー、無理無理。まあ、あきらめなさいー」

さすがに砕の言葉で意見を変える雪男。だがそれは砕にやめろと言われる。

「なぜですか！？どうして駄目なんですか！？教えてください！」
そしてまた怒鳴りだす雪男。そして砕は答えた。

「だって、あんたみたいな無駄な人件費払うほどロシア裕福じゃないしー。隣君は・・・うちの息子が異端中の異端とすれば、隣君は特例中の特例だしねー。はっきり言ってあんたはもうお役目ごめんなの。アーユーオーケー？」

完全に雪男をバカにしながら言う砕。それに怒りで今にも爆発しそうな顔を雪男はしていた。

「おい、砕。あいつが異端中の異端だと？じゃあ、あいつも魔術師か？」

そんな中お構いなしに、シユラは割り込んできた。

「そーよー。まあ、めちゃくちや優秀なね」

「そうか・・・砕。こういうのでビビリメガネにけりをつけさせたらどうだ？」

そう言いながらあることを提案するシユラ。それに砕はウキウキしながら聞いていた。

「まあ、すつごく面白そうねー。おーい、八神ちゃああん？雪男とシユラちゃんと闘いなさい」

シユラの出した提案とは、自分と雪男を八神と闘わせ、そのうえでこつちが勝ったら雪男をロシア成教にいれる。八神が勝ったら雪男はすつぱりと諦めると言ったものであった。

これに八神はめちゃくちやいやそうな顔をした。

「なぜだ？レイヴェニアと一緒にならいいが」

「それじゃあ、試合が成り立たないでしょー？」

八神はそれからもごちゃごちゃ言っただがとうとう承諾した。

場所：大監房

八神達が闘うのは日本支部の大監房の一つであった。もしもに備え、被魔塾の先生達が監視をし、いい機会だからと塾生たちも見ていた。

「いや、しかし。八神君が魔術師だったとは、私もびっくりでした」

「嘘つけメフィスト。あの子が炎剣を出した時点で解ってたろうに。あの子は適当な嘘でごまかしたようだけどね」

談笑をする、名誉騎士キャンサーの二人。

「なあ、八神って強いんか？いや、わかっとるけど……どこまで強いんや？」

勝呂が九城と出雲に八神の事について聞いた。

「解らない。魔術師ってこともさっき初めて知ったし……そもそもお兄ちゃんは今三の時に日本に戻ってきたからそんなには詳しくないんだ……」

自嘲気味に笑う九城。その姿を見て皆はこれ以上聞くのはよそうと思っただ。

ただ、勝呂の問いは、これから始まるのを見ればわかることであっ

「シュラさん、この勝負何が何でも勝ちましょう」

「あー、無理だニヤーン」

雪男が勝とうと言ったが、シュラは即答で無理と言った。

「なっ!?!?どう言う事ですか!?!?」

「だって無理だろ。私達は魔術の存在は知ってても、原理までは解らない。逆にあいつは^{エクソシスト}被魔師の弱点も、長所も知っている。明らかに分はこちらが悪い。。そもそも、^{エクソシスト}被魔師は対悪魔であって対人じゃない。対人じゃないのは魔術師でも大抵、同じことらしいが、あいつの所属は・・・あの『^{ネセサリウス}必要悪の教会』らしい」

シユラは今の状況を冷静に言った。

そして最後に重々しく『^{ネセサリウス}必要悪の教会』の名を言った。

『^{ネセサリウス}必要悪の教会』についてはまだ詳しく追記はしないが、ここに所属する者は『結局は誰かが追わなければならない、汚れを一手に受ける、異端中の異端』とされる部隊であった。

「それでも、それでも、僕は兄を守ると神父の墓前で誓ったんだ！だからこの勝負は・・・」

「・・・もうそろそろ始まる。冷静になれ」

シユラは感情が高ぶった雪男をなだめ、今から始まる負けが決まっている闘いに集中した。

「では、これより八神君対雪男、シユラコンビの闘いを始めます。制限時間はなし。でははじめ！！！」

勝負が始まると同時に、八神は雪男のほうに爆発的な推進力で突っ込んでいった。否、本当に靴の足裏に爆発を起こして進んでいた。そして雪男は八神に蹴り飛ばされ、壁に激突し、そのまま起き上がらなかった。

「・・・やっぱりか」

シユラはそう呟いた。

「当たり前だろ？こいつははつきり言っただ邪魔だ。それにふざけている。兄を救いたいと言いなから、俺を殺そうとはしていないかった。ふざけるにもほどがある」

シユラのつぶやきに八神は答えた。だがシユラは

「ちがうよ。私が言っているのはそう言う事じゃない」

そう答えた。

「私が言ったのは、お前の眼だ。お前の眼はまるで昔の私の眼なんだ。日々を生きるために生きる。そんな眼をあんたはしている。よほどの地獄を味わったか・・・、または、よほどの地獄を味わっているかだな・・・その眼は・・・」

シユラは暗い声でそう言った。それを聞いた八神は

「・・・少し時間をくれないか？お前と闘うには、こいつと契約しなきゃならないようだ」

そう言い、おもむろに贗殿遮那にえとのしやなを取り出した。

「ああ、いいぞ」

「ありがとう。っと」

そうして、八神は剣を抜いた。

そして、八神の目の前に鎧武者が現れた。

この鎧武者は、被エクスシスト魔師達には、かなり有名な悪魔であり、その場は騒然とした。

『・・・汝が我の新たな主か？』

鎧武者は八神に聞いた。

「ああ、そうだ」

八神は鎧武者にそう答えた。

『血の証を示せ』

「こっか？」

鎧武者の要求に八神はナイフで指を軽く切り血を見せた。

『・・・たしかに汝は我が主の血の者。汝、我が要求にこたえられるか？』

「要求はなんだ？」

八神は鎧武者に要求を聞いた。

『我が求めるは強者^{つわもの}。汝、強者と闘うか？』

「ああ、戦う。いやでも闘うぞ、俺は・・・」

鎧武者の要求に何の迷いも無く答えた。

『いいだろう。契約は果たされた。我が名は天目一個。贄殿遮那に眠るものなり』

そう言いながら天目一個は、消えた。いや、剣に帰ったのだ
誰が見ても業物と解る大太刀『贄殿遮那』に

「さあ、契約は済んだ。再開しようか・・・エクソシスト被魔師」

八神はシユラに贄殿遮那の切っ先を向けながら言った。そしてシユラが答える間もなく、八神は靴裏に爆発を起こし突っ込んだ。

「っ！？だが、私はビビリメガネのようにはいかないぞ！」

「そうみたいだな。だがまずは剣だけで闘うとしよう。思った以上に馴染むなこの剣は・・・まあ、0歳のときからもていたからそれはそれで普通なんだろうが・・・なつと」

二人は目にも止まらに斬撃の荒らしを繰り返した。もう何合も撃ちあっている。

(おいおい、こいつはもう16年やそこらで身につく剣術じゃないぞ！？それになんだ？この違和感は？・・・そうか！こいつ、動いているように見えて実はほとんど動いちやいねえ。いや、動きを異常なまでに抑えているってどこか？)

そんな中、シユラはこう思いながら打ちあつ事が出来ていた。普通は斬撃を防ぐだけでも怪しいのを、シユラは攻撃も織り交ぜながら闘い。そして物事を考える余裕までもっていた。

「うわー、っと。できれば剣術だけで済ましたかったんだけど・・・なっと」

そう言いながら後ろに引く八神。だがこれは逆にシユラに攻撃のチャンスを与えるようなものであった。

「霧隠流魔剣技。蛇牙だつば！！！！」

シユラは常識外れの剣での遠距離攻撃を行った。よく漫画などで見かける、『斬撃を飛ばす』と言った感じだ。

「なっ！？どこのファンタジーだよ！？」

そう言いながら八神は、シユラの遠距離攻撃を贄殿遮那で触り消していった。

「・・・どういうことだ？」

「贄殿遮那の魔剣としての効果だよ。それと、もうそろそろ、魔術使っわ」

シユラは遠距離攻撃を消されたことに、げんなりをしながら八神に聞いたが八神は、簡単に説明する気も無いらしく魔術を使うと言った。

その言葉にその場にいた全員が唾を呑んだ。

「いや、この贄殿遮那は最高だと思っぞ？ただし『象徴武器シンボリックウェポン』は格別だ。そうは思わんか？」

そう言いながら八神は、贄殿遮那を服の中に隠し、服の中から先に細工が施された杖を取り出した。

八神の今の服装はゆつたりとした服装で、シユラも暗器には警戒し

ていたがその予想を上回る大きさの物をかくしていたため驚いていたが、すぐにそれは警戒に変わった。

「Despair 611。絶望と言う名の贈り物」
八神は魔法名を名乗り、そして

Tutto paragone . Il quinto dei
elementi .

「万物照応。 五大の元素の元の第五。」

Ordinalla canna che mostra pace
ed ordinata .

平和と秩序の象徴『司教杖』を展開」

Prima . Segua la legge di Dio
ed una croce .

「偶像の一。 神の子と十字架の法則に従い、
Due cose diverse sono connesse .
異なる物と異なる者を接続せよ」
そう詠唱した。

すると、杖の先端の細工が開き、まるでその先は蓮のようだった。
そして、ゴン。と八神は杖を地面にぶつけた。

そのあと、シユラの後頭部にゴンと言う衝撃が走った。
普通の被^{エクス}魔師^{シスト}では脳震盪を犯して倒れてもいない衝撃だったがシユ
ラは何とか耐えた。

（私と同じ遠距離攻撃か！？いや違う！いくらなんでもタイムラグ
が少なすぎる！？）

シユラは何が何だか分からずにいたが、兎に角その場から動いた。

「蓮の杖だ。ロータスワンド これ以上は教えるつもりはない」
八神はそう言いながら蓮の杖ロータスワンドを地面に次々とぶつけ、ありとあらゆる方向に打撃を与えていた。その打撃はシユラの方に行っただが、それをシユラは何とか避けていた。

「へへ。シユラちゃん凄いわねー。ロータスワンド 蓮の杖か・・・、ようは、偶像理論の応用ね。

杖の象徴するエーテルが万物に似ていると言う特性を生かし、空間そのものに作用しているらしいわよー。

ようは呪いのわら人形の類で、杖を傷つけることで連動した他のものを同時に傷つけることができらしいみたいなんだけど・・・あの子、確実にただの時間稼ぎ感覚であれ、使ってるわねー」
碎は、誰に頼まれるわけではなく蓮の杖ロータスワンドの説明をした。

「ほう、そういうものでしたか…いや、魔術は『天使の力』テレスマを使うので疎くてすみませんね・・・」
メフィストはそう言いながら紅茶を飲んでいた。

「うわー、凄いな。もしあんたが魔術も知っていたら俺、負けてるかもね。じゃあ、こいつだ」
そう言いながら八神は、短剣を取り出し、それで蓮の杖ロータスワンドを傷つけた。そしたら、突風が起こり空間を割きながらシユラの方向に飛んできた。

「っ！？霧隠流魔剣技、蛇牙！！！！」
シユラは何とか空間を切り裂きながらやってくる攻撃を防いだが、突風は防げずに飛ばされた。

「ふーん。これでも無理か…じゃあ、こいつはどうだ？」
そう言いながら両手に持っていた武器をしまい、深呼吸をする八神。
そして

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ
それは邪悪を罰する裁きの光なり
また、それは冷たき闇を滅する凍える不幸なり
その名は炎、その形は拳

真紅・巨腕！！！！」

八神が詠唱を終わると、真紅に燃える巨大な腕が一本現れた。

「あー、大丈夫だ。痛みを与える間もなく殺してやるから」
そう言いながら八神は右手を振った。

すると巨大な腕は、右手に連動しシユラを攻撃した。

「嘗めるな餓鬼が！！！！」

シユラはそう言いながら巨大な腕を叩き斬った。

が、八神は

「舐める？おれがどうしてお前をなめなきゃならないんだ？そもそも、俺はレイヴェニアは・・・まあ、舐めたいがそれ以外は舐めたくはない。気持ち悪い」

この場にいる、神木家関係者以外は心の中で、気持ち悪いのはお前だと思っただが口には出さない。直感で言ったら殺されると解ったからだ。

ちなみに九城、出雲は頭を抱え、碎は滅茶苦茶喜んでいた。

さらにいうと、レイヴェニアは頬を赤らめ・・・姿だけを見るだけなら普通に美少女なのだが言ってることが、そこそこの問題があったため周りは引いていた。

「それに、まだ、真紅・巨腕はしんでいないぞ？」

「なに???!？」

八神がまだ真紅・巨腕は死んでいないといい、シユラは警戒したがもう遅かった。叩き切ったはずの巨大な腕に捕まれ、宙に浮かされた。

「ん？燃えない？なんだそれ？少なくとも、それは摂氏3000度はあるはずなんだが……。ああ、そうかお前が来ているそのコート、トリノ聖骸布を模したものか！なるほどなるほど。どつりでぐちゃぐちゃのガムみたいにならないわけだ」

そのあともブツブツ言う八神、そんな中、シユラは一瞬の拘束の緩みを見つけ、抜け出した。

「はあ、はあ、これでお終いだ!!!!霧隠流魔剣技。蛇腹化、蛇牙!!!!」

シユラは剣に血を垂らし、今までで最大級の斬撃を飛ばした。

この闘いを見守っていた者たちはこれで決まった。と大半が思ったがしかし……

「誰が一本しか出していないと言った？」

八神の残酷無比な声と同時に、地面を溶かしながら巨大なもう一本の腕が現れ、シユラの斬撃を防いだ。しかも今度は八神の腕とは連動していない。

「はあ、はあ。はははは、なあ、私の負けだ。最後に聞いていいか？」

「なんだ？」

シユラは負けを認め、八神にあることを聞いた。

「何でお前はそうやって、死体を見るような眼で人を見れているん

だ？その眼をしている奴らは、あまりに人を殺し過ぎた拳句、人を人とは見れず死体としてしか見れなくなったような奴らばっかだったぞ。お前もそうなのか？」

八神は無表情のままシユラを見つめ、砕の顔からは初めて笑顔が消え、九城と出雲はまさかという顔をし、レイヴェニアは初めて八神以外を見た。

「・・・おれが初めて、魔術師として、自分の意思で、人を殺したのはロンドンでだ。たしか、6歳だったな。レイヴェニアと一緒に多くの魔術師を殺したよ。そのときずいたんだ。『ああ、人間はなんて脆い生物だろう』と・・・」

八神は妹にも、従妹にも話さなかったことをここで言った。その八神の眼はどこまでも遠く、どこまでも絶望に満ちていた。

「だから、どうした？殺人なんていつでも起こるしどんな理由でも起こるものだ。おれの心に建っている三本柱は、復讐、憎しみ、そして・・・」

その場にいた皆は唾をこくりと飲んだ。

「レイヴェニアだ」

八神は大勢の前で堂々と惚気た。

それに、九城は

「お兄ちゃん！！！本音は！？」

と大声で聞いた。これには全員が割と本気で驚いていた。

「レイヴェニア、レイヴェニア、・・・家族、だ」

その場にいた全員が、家族はどっから降ってきた！？と思い、口になりそうになったが、レイヴェニアを見て黙った。

何せレイヴェニアは、可愛らしい姿で

「あゝ？八神八神、うん、私もそうだよ。愛してるよ八神。そうだ、

に弱・・・いや、序盤に倒されたものだから・・・さ？」

砕の言葉に皆はポン、と手を叩いた。全員が忘れていたようだ・・・

「まあ、それはどうでもいいとして。この二人は大丈夫よ。一緒に寝かしたときや完全回復するから」

「砕さんが語尾を伸ばしていないという事は、真面目だという事ですから安心してもいいですよ」

砕は八神とレイヴェニアを抱き上げ（おんぶでは無い）、メフィストは砕を真面目だから大丈夫と言い、ドクター医工騎士にシユラと雪男の治療を命じた。

魔術師对被魔師（後書き）

作者「詰め込みすぎたかな？」

神「さあ？まあ、原作ブレイクは凄かったけどね」

作者「うぐ！？痛いところを・・・」

神「で、感想来なかったら君ミニコーナーどうするの？」

作者「安価に登場人物紹介かな？」

神「きつと今頃読者の皆さんは、じゃあ聞くなよ！って思ってたんだね」

作者「すみません。読者の皆さま・・・」

神「じゃあ、最後に」

「「誤字脱字の報告、感想お待ちしております！！！！」

勉強会（前書き）

今回は小説の話です。

はつきり言って立ち読みのをつる覚えで書いたものだから、めちやくちやだと思います。

それでも言い方は本文へ

では本文です。

勉強会

SIDE OFF

「頭が痛い」

そう雪男はつぶやいた。

彼は八神との闘いで、約束どおりロシア成教入りをあきらめた。

わけではない。むしろ、あっちから入ってくれと願い下げるまで努力しようと決意したようだった。

それはさておき、燐がロシアから帰ってきた。

金髪紅眼の女の子を連れて・・・

詳しく書くと、悪魔の落胤の女の子を連れてだ。

それはまだいい。まだよかった。

なんか、燐はワシリーサに気に入られ、ワシリーサは

「この子養子にする！」

と言い。こともあるうか燐をロシア国籍にした。もちろん合法的な方法では無い。

そして、悪魔の落胤の女の子。サーシャ・クロイツェフを連れて帰ってきた。

なんか二人とも同時期にロシア成教に、保護されいろいろな書類に名前を書いていたら、その中にワシリーサがまぎれさせた、婚姻届けがあつて二人とも間違えて書いてしまったようだ。

しかもワシリーサは、それを後生大事に抱え込んでいる始末。

これを聞いたブラコン、雪男はキレた。いろいろキレた。たまりに

たまっていた不満を爆発させた。
それからもひと悶着あり、今は、一学期期末テストが近い時期となっていた。

「2.5点・・・」

これは燐とサーシャの最高成績である。間違っても25点では無い。

八神によると悪魔の子は大半がこういう点数なそうだ。

悪魔にも天使にも心は無く、天使は正常なコンピュータ。悪魔は混線を起こしたコンピュータらしい。

だから悪魔の子は頭の半分が混線でできており、怒りっぽく、法則関係にはとんでもなく弱いらしい。

まあ、そんな御託はどうでもよく問題はこの点数だ。

このままでは、いろいろまずいと雪男は思っている。

何がまずいかはどうでもいいが、とにかくまずい。

ちなみに燐は、今感動ものの漫画を読んで泣いている。

サーシャは、・・・座っていた。

二人の服装は正十字学園の制服であり、なぜか手枷足枷をつけていた。

これまた八神によるものだが、他にも見えない拘束具は50ほど付けられているとのこと。

「気は進まないが・・・こうなったら彼らに頼もう・・・」
そう言って雪男は、携帯を取り出しある人たちを呼んだ。

「皆さんよく来てくれました。単刀直入にいいます。兄さんとサーシャさんの勉強を見てやってください」

雪男に呼びだされたのは、九城を除く被魔塾の塾生たちと、八神とレイヴェニアであった。

雪男は、被魔塾の期末テストとかを作らなければいけなかったため彼らに頼むしかなかったのである。

「・・・はあ。そんなことでおれとレイヴェニアの時間を割いたのか？今すぐ死体^{オラジエ}にしてやるから表出やがれ」

八神は、満面の笑みで恐ろしいことを言った。そしてたしかに凄まじい殺気が込められていた。

「まあ、そう言わずに・・・学食の食券上げますから」

正十字学園の学食は、四ヶタ行くほどに高値であり教えるのには十分すぎる報酬であった。

それからもなんやかんやあり、全員が何とか了承した。

「なんかすまねーな・・・おれらのせい・・・」

「いいですよ。困った時にはお互い様です。ね？坊？」

ここにいる全員が、隣の事情を知ってもなおそれを受け入れた。

理由は、八神の一言にあった。

その一言は、

「子は親を選べない。違うか？」
であった。

たしかにそうだ、それに隣の性格がよいことも全員が知っていた。悪魔の子だと知ってそれが変わるわけではない。ならばいつもどうりに接しよう、そう全員が思った一言であった。

「おお、そつや。おまんはいつも一人で何もかもを背負い込む。たまにはこういう事もせな、あかんのや。しっかし、2 / 5点・・・しかもこれが最高やと?」

「第一の回答ですが、悪魔の子は大抵そうです」
勝呂のあきれ口調に、サーシャが答えた。

「おやー?この点数は俺でも20点取れたテストですよ?」

「・・・志摩、おまんも補習組や」

志摩は自分の点数を言った挙句、補習組に入れられた。

「ま、まあ、大丈夫でしょう。坊は暗記の変た・・・天才ですし。出雲さんはクラス一の秀才。八神君とレイヴェニアさんも、この前のテストでは、学年全体で順位が一桁に入っていましたし」
子猫丸が希望的観測で、大丈夫だろうと言った。

「じゃあ、僕は出雲ちゃんとマンツーマンで・・・」

「おっしや、志摩は俺と子猫丸。サーシャは八神とレイヴェニア。

燐は出雲と八神と俺。八神には負担駆けるけどいいか?」

「ああ、いいぞ。この布陣なら大丈夫だろう。・・・杜山はコーヒーを作ってる。気休め程度には眠気も覚める」

志摩の意見を完全に無視して、話を進める勝呂と八神。

二人は、意見が合う事もあってか仲がよかった。

そして、勉強会が始まった。

5分後

「ああ!?九九ができないってどういう事だあ!??」

「第一の回答ですが、悪魔の子は大抵そうです」

「子猫丸!さつさと志摩に喝入れる!!!」

「煩惱退散!!! 喝!!!」

「もういやー!!!」

もう早くから阿鼻叫喚の光景が出来上がっていた。

4時間後

「はあ、はあ、何とか、全員九九はマスターしたな」

「そ、そうやな。何とかできたな、晩御飯にでもするか」

8時ぐらいから始めていたため全員腹がへっていた。

ちなみに、燐とサーシャはブツブツと九九を呟いていた。

「ああ、そうするか」

八神は勝呂の提案に従い、弁当を取り出しレイヴェニアのと交換した。

「八神。今回は気合入れて作ったぞ!」

と、レイヴェニアは誇らしげに弁当箱を渡した。

二人の弁当箱は何となく高そうな細工がところどころに施されていた。

「み、みんな! わたし、薬草スープとハーブクッキー作ったんだけど食べる?」

「「食べない」」

しえみの提案に、即答で答える八神とレイヴェニア。

「おい、てめー、なにいつてんだ」

「あ? どうして俺がレイヴェニア以外の女子が作った手料理食べなきゃいけないんだ?」

燐のみが八神に文句を言ったが、八神は至極同然のように、半ば変態的なことを言った。

まわりは、前の鬪いもあつて何も言わなかったが、出雲は二人の弁当箱を凝視していた。

「八神、食べてもいい？」

「ああ、いいぞ。俺も食べるがいいよな？」

「うん」

と、恋人同士のような会話をしながら、八神とレイヴェニアは弁当箱をあけた。

なぜかその弁当箱からは、鉄臭いにおいがしてきた。

「・・・はあ。あんたら、またケチャップを使っていないケチャップライスを作ったわね？」

出雲がわけのわからない事を言い、その場にいた全員が首をかしげた。

そんなことをかまいなしに、出雲は八神とレイヴェニアの手をあげさせた。

二人の手首には包帯が巻かれていた。しかも赤く滲んでいる。まわりはうすうす、きずきはじめた。

「このケチャップライスは、ケチャップの代わりに自分の血を使ってるのよ。このヤンデレ夫婦は」

「？、それぐらい普通だろ？」

出雲は、頭を抱えながらとんでもないことを言った。

八神は、一生懸命レイヴェニアの血が使われたケチャップライスを食べながら答えた。

レイヴェニアはレイヴェニアで黙々と、八神にくつつきながら八神の血が使われたケチャップライスを食べていた。

ほかの者たちは、しえみが作った薬草スープとかをありがたく食べようとしたが、

スープからは、^{「トルタル}魍魎が湧きでており、ハーブクッキーからは煙がもくもくと出ていた。

「・・・そうだね。私は今ダイエット中だったんだわ！だから・・・ごめんなさい・・・」

出雲は女子の特権を使いこれを何とか回避した。

「第一の見解ですが、ゲテモノは上手いと相場は決まっています」

「あ、ああそうだな。きつと見た目は悪くても味は言いに行きまっする」

燐とサーシャは勇敢にもこれに挑み、一口目で目が虚ろになって

「・・・第一の、回・・・答です・・・が、トテモオイシイデス」

「あ・・・ああ、とても・・・おい・・・しいぞ・・・」

その言葉を最後に二人は倒れしゃべらなくなった。

志摩は女子を泣かせたらあかんといい、食べたが燐とサーシャほどには酷くはならなかった。

勝呂、子猫丸は志摩の言う事が最もだったためそれに従った、が燐とサーシャほどにはならなかった。

「多分、二人は舌の感覚も強化されているんだろうな。だから常人以上に、そう言う物には弱いんだと思うぞ？実際に、悪魔のこの大半は料理がうまいしな」

血ライスを食べながら今の状況を解析する八神。

「燐は^{サタン}魔神の落胤。サーシャは水の王エギユンの落胤だ。多分、普通の悪魔の落胤なんかよりは舌の感覚がいいんだろ。大分前だが燐の作った定食を食ったが、細かいところまで味付けされていてうまかったぞ。今じゃ、その旨さと安さが評判を呼び週一しか開かないも関わらず予約しないと、いけないようだしな」

後半は、その場にいた全員が噂で聞いたことがある話だったため、ふーんで済んだが、よく話を思い出してみるとんでもないことを言っていた。

「水の王の落胤やと・・・？」

「ん？言っでなかつたか？ああ、『必要悪の教会』の中で有名だったから言うのを忘れていたよ。サーシャ・クロイツェフは、水の王エギユンの娘だ」

うーん、うーんと唸っているサーシャを見て皆が、こう思った、そして皆がすぐに自己嫌悪に陥った。

こいつは、危険なんじゃないのかと・・・

「まったく、この二人はこれから行われることにきずいていながら、それを拒否しないなんてな・・・」

「なにがこの二人に待ってるの？」

八神はぼそりと言ったが、出雲は聞き逃さなかった。

「はあ、雪男には言うなよ？いいか？この二人はある狂った計画の実験台になるんだ。その計画は、俺らは名目上『神上』と呼んでいる。内容はこの二人の頭の混線を人間の力で直そうといったものだ」
まわりは良くは解らなかった。

「よお、解らんが・・・？」

「解らなくていいんだ。解ったら本気でここで殺すしかなくなるからな」

勝呂が解らないと言ったが、八神はそれでいいといい、死体を見るような眼になった。

「はあ、この二人は、同じ悪魔の子には・・・と言うか、全ての生命に優しすぎるんだ。優しすぎるがまでに優しすぎる。まるであの

子のようにな……。なあ、悪魔の子たちが……。特に若い悪魔の子は、なんて二人を呼んでいると思う？」

「……なんや？なんてよんどるんや？」

八神の言葉に、皆が集中して聞いた。

「若君、姫君だよ。悪魔の子は、基本的に誰にも愛されない。人間には冷たい視線を浴びせられ、悪魔には、特に中級の悪魔には中途半端と言われ、悪魔の親には体をつけ狙われる。そんな悪魔の子に、二人は無償の愛を見せたんだ。いや、悪魔の子たちはこの二人を頼れたんだ。その力から、一人ではしなければいけないと思っていた、悪魔の子たちは自分を超す二人を見て崇めた。そして二人は彼らを守るために、この実験に参加したんだ」

まわりは黙った。周りは乱の力を、多かれ少なかれ羨ましかつたのだ。

その力が何を生むかも考えずにだ。

「まあ、二人のためにも勉強会を再開するか？おい、二人とも起きる」

そう言いながら八神は、燐とサーシャを蹴り飛ばした。

「うぐ。……第一の見解ですが、日本には饅頭怖いという怪談があるそうですが、私からすればクッキー怖いです」

「あれ？何でお前らいるんだ？」

蹴飛ばされ二人は起きたが、どうも記憶が混乱しているようだ。まわりは、そのままの方がいいと思ったため何も言わなかった。

そして、勉強会が再開したがなかなか進まず、そんな中……

「八神ちゃああん？レイヴェニアちゃああん？頼まれていたもの作ってきたよー！」

いきなり、砕がいつもどりの巫女装束で現れた。

「よかった。これでだいぶ楽になる」

「御母さん。ありがとうございます」

そう言つて、砕からある紙の束をもらった二人は、安堵の声を放つた。

「これは、母さんが、正十字学園の過去の出題傾向から解析して作った予想問題集だ。万が一に備えて、母さんに頼んどいてよかったよ」

そう言いながら八神が見せた紙には、問題が書かれていて、隣には解りやすい解析が乗っていた。

「なんや！これ！俺らも欲しいわ！」

「本^{ほん}当^まですね。僕たちにもくれませんか？」

「まあ、大丈夫！全員分作つといたよ！。これは勝呂くんね。応用問題を中心につくつたから！。これは子猫丸君。応用問題を大目で作つといた！。出雲ちゃんも、応用問題が中心ね！。八神ちゃんとレイヴェニアちゃんは、必要ないつて言つたから作らなつたけどいいの？」

ほいほいほい、予想問題集を渡す砕。それを見た皆はあまりの解りやすさに、自分が解らなかつた所を、ピンポイントで解析が入っている事に驚きを隠せずにした。

たしかに砕の授業はめちやくちや解りやすく、塾生たちには評判だったがここまでなると凄いの一言であつた。

「じゃあ、みんなー！目指せ番数一桁！ー！」

そう言いながら、砕が全員を教え始めた。

三日後

「あいからわず、教えるのがバカみたいにうまいですね」

「あらー？教育者としての嫉妬ー？でも、いいじゃない」

いま、名誉騎士キャンサーの二人、砕とメフィストは今回のテストについて話をしていた。

「まさか、上位一桁を塾生たちが総なめとは……、あの燐君、サ
ーシャさん、志摩くんまでもですか……。雪男先生、八神先生、
レイヴェニア先生に至っては全教科満点の同一一位。ホント、バカ
みたいな結果ですね」

砕はとんでもない記録を叩きだしていた。教えてみたらめっちゃくち
や成績が全員上がっていたのであった。

「まあ、私を誰だと思ってるのー？」

「コスプレで巫女装束を着ている変態ですよね」

「な！？これでも気まぐれで教員免許が取れた天才よ！あの子たち
を一桁にすることぐらい簡単なんだから！！！」

そう言いながら、最近も萌文化について熱く議論していく二人であ
った。

勉強会（後書き）

作者「いやー。最初から最後までグダグダだったよ」

神「ホントだよ全く。で、ミニコーナーである登場人物紹介は？」

作者「次話からします」

神「じゃあ、最後に」

「誤字脱字の報告、感想本気でお待ちしております」

楽しいキャンプ(前書き)

初めて、新規小説作成覧で小説書きました。
すごく便利でした。

では本文です。

楽しいキャンブ

パラパラ、そのような音が祓魔師^{エラジスト}専用の書庫から聞こえてくる。調べ物をしているのはシユラであった。

彼女が調べているのは天目一個の事であった。

天目一個はもともと、かなり有名な悪魔ではあったが詳しい事はほとんどが闇に閉ざされていた。

ピタツと紙をめくる音がやんだ。天目一個の項目が見つかったのだ。この項目にはこう書かれていた。

天目一個

日本で言う戦国時代から江戸時代初期にあらわれた上級悪魔とされる。

この悪魔の特徴は、祓魔師であろうと、悪魔であろうと、一般人であろうと、強者^{つわもの}であれば問答無用で斬りかかるところにある。故に史上最悪の悪魔ともされている。

この天目一個を討滅し、大太刀に封じ込めたのが、贄殿 遮那。そして彼女を崇め、彼女の子孫は第一子に彼女と同じ名をつける風習が出来たとされる。

また彼女が使っていた大太刀を家宝とし、銘を贄殿遮那とした。

「……どう言う事だ？あいつの名は神木 八神じゃなかったのか？」

シユラはそう呟いた。この項目が正しければ八神の名は贄殿 遮那でなければいけないのだから。

ただ、これには続きがあった。

その続きはこうだ

ただし、中には稀ではあれ、遮那のあとにその者の固有名詞として別の名をつける場合もある。

しばしシユラは考え、今度は日本の被魔師家系図の一覧を調べた。

まずシユラが探したのは贄殿家ではなく、神木家であった。

理由は簡単で、神木家と言ったら日本最大級の被魔師の一門であり、南の明陀、西の神木と言われるまでに有名な一門であった。

そして碎の名があった。結婚相手は十中八九、贄殿 遮那であった。子供の中には神木八神の名は無く、神木九城の名があった。しかし、その隣には贄殿遮那八神にえとのしやながみの名があり、その隣には許婚としてレイヴ エニア「バードウェイの名があった。

しばし、シユラの動きが止まりまた、家系図を調べ始めた。次に調べたのは贄殿家であった。

そして案外すぐに見つけた。驚くことに、この家系の第一子。つまり頭首はもうすでに八神となっていた。つまり、彼の祖父、父は死んでいる事になる。それ自体は、たいして珍しくも無いのだが没年が『青い夜』つまり、八神が生まれた年であった。

「・・・いや、しっかし。本当に贄殿遮那ばつかな・・・。この家系は・・・」

そう言いながら家系図を、元の場所に戻すシユラ。

そして、今度は魔剣全集と言う胡散臭い本で調べ物をしだした。実際にこの本は信ぴょう性については胡散臭かったが、全ての魔剣が乗っているため、こついうような調べ物には最適であった。

「贄殿遮那、贄殿遮那、贄殿遮那と。あったあった」

この本の面白いところは、神話に出てくる聖剣から、おとぎ話に出

てくるような剣まで取りそろえているところにあった。

そして、この本によると贄殿遮那は、

能力：不明

使用者：贄殿家の第一子

出来た時代：江戸時代初期・・・だと思っ

弱点：あつたらいいな。

「ザツケンなー！！！！ああ！？能力不明はまだいいとして、出来た時代が、だと思っ！？そして弱点があつたらいいなだ！？ふざけるな！！！！真面目なのは使用者だけかよ！！！！」

シユラは書庫で怒鳴った。幸いなのはこの書庫に今は誰もいない事だろうか・・・。

「あらー？シユラちゃん？まあ、書庫では静かにする者よー？またカビ臭いもの読んてるわねー。何を調べてたかは、予想がついているから言わなくていいわよー」

そして、どこからともなく音もなく現れる、見た目高校生の年齢不詳の女、神木碎。

「うお！？い、いつからそこに！？」

「まあ、それより早く上に行かないとー。面白いもの見逃がすわよー」

そしてシユラを引っ張りながら、上に行く碎。

そして、上では八神とレイヴェニアを多くの大人が取り囲んでいた。

「23代目！せめてこの袴を！」

「俺の名前は数字じゃない！！！！」

「レイヴェニア様！せめてドレスを！」

「誰が着るかそんなもん!!!」
などと、大人たちと言い争っている八神とレイヴェニア。

「し、失礼しました。遮那樣。しかし、そのような安っぽい洋服などは……」

などと、八神を遮那と呼ぶ給仕姿の女性。

「遮那樣もレイヴェニア様に何とか言っただけです。このように安っぽい服など……」
などと、多少若作り感のある男性が八神に助けを求めた。

「まあ、酷い言われようね。メフィスト」

「……まあ、彼らは……というか、八神さんとレイヴェニアさんは、8歳ぐらいのころから国家大臣クラスの給料をもらっていますからね」

砕がメフィストに制服を安っぽい呼ばわりされている事、に、多少の同情をこめて言います。
メフィストは、顔を引くつかせながらも何とか納得しようとしていました。

「なんやアレ？」

「さあ、なんやろ？」

「うお!? なんや!? 八神君、あんな美人さんにかまってもろくて羨ましい!!!」

そうこうしている内に、京都三人組と燐、サーシャが来た。

「相変わらず、壮大な過保護ね」

「うーん。なんで、あの人たちが日本こちにいるんだろ？」

そして、出雲、九城も来た。

「……皆さん、今日から楽しい夏休みですね！」

さすが、雪男君。ここは日本人精神をむき出しにして、見て見ぬふりをするようだ。

「だー！！俺らは、今から山に登るんだ！！！！動きやすい服の方が言いを決まっているだろう！」

「さすが八神！大好き！！！」

八神が袴などを着ない口実を言い、レイヴェニアは惚気た。

「う……。解りました。では我々はイギリスで待っています。あと、この方がついて来たんですけど、どうしましょう？」

八神に袴を着せようとしていた給仕があきらめ、そして後ろから背がレイヴェニアぐらい……。つまり、子猫丸より頭一つ分大きいくらしいの女の子が出てきた。

その少女は驚くほどに造形などが整っており、頭には彼女には大きいヘッドフォンをつけており、髪と目が金色であったが、眼が八神そしてレイヴェニアと一緒に眼をしていた。

また、背中には使いこまれたと思われるライフルが、あたかも自然なほど担がれていた。

そしてライフルを見た、勝呂と九城が驚きにある銃の名を言っていた。

「「メ、メタルイーター？」」

二人の言葉を聞いたのか、少女はじつと二人を見。そして

「メタルイーターm5です。しかし、生きていやがりましたか。さつさと死んでください。八神、レイヴェニア」

無関心そうに銃の名を言い、そして八神とレイヴェニアを見てさつさと死ねという少女。

「「じゃあ、まず手前が死ねよ。シャル」

それに八神が答えた。そして、八神とシャルと呼ばれた少女はフツと笑い。

ガキイイイン。と、一気に戦闘モードに突入した。

「ああ！？お前忘れたわけじゃねーよな！俺がなんで『decem』のまとめ役やつてるかをなあああ！！！」

「ええ！覚えてますよ！！それはあなたが一番強いからです！しかし、貴方は接近戦、つまりは白兵戦に特化しています！つまり、遠距離戦が得意な私が勝てるどつりは十分にありません！！！」

と、二人はいきなり。八神は贄殿遮那。シャルはメタルイーターm5を取り出し、今にも戦争けんかをしだしそうになっていた。

「ダああ！！！何でこつも！今年の『十番目の月』は戦闘狂なのよ！！！！でもそこが可愛い！！！」

そして、いきなりわけの解らないモードに突入した碎。

「お、おい！そないなもん！メタルイーターなんか来ないなとこでぶつ放したら！」

「そ、そうだよ！それは、それは、対人ようじゃなくて！対戦車用に作られたフルートライフルでしょ！？危ないを通り越して、未曾有の乱射事件だよ！」

竜騎士ドラクーンを目指す、二人にはシャルの使っている銃の危険性を知っていた。

もともと、あれはメタルイーターMXと言う名の試作品があったのだが、これは反動だけで安物のヘルメットを粉碎するような代物であつた。

しかし、これは、MXからストック、グリップ部を大幅に改良し、水冷式冷却装置を取り付けた、WW3での制式採用品。銃器というより、そのまま鈍器にでも使えそうな凶悪な塊。というふれこみの

ものであった。

「坊！？なんでそないのを知ってるんですか!？」

「授業にあつたやる!っーか、何であないもんをもつとるんや!？
値段なんか想像も出来んほどに高かつたはずやぞ!？」

志摩の質問に答えながらもパニくる勝呂。

「ああ〜？八神〜？頑張れ〜？」

レイヴェニアはいつもどおり、八神に対して熱烈なラヴコールを送っていた。

ちなみに、レイヴェニアとサーシャは超短期入学と言う扱いであった。

「では、これより、“学園森林区域”に行きます。皆さんにいいですか？」

「これのどこがいいんだ!？おい、ビビリメガネ!？聞いてるのか!？」

街中で戦争けんかをする二人は、周りの眼をめちゃくちゃに集めていた。

「まあ、もうそろそろやめさせないとねー。レイヴェニアちゃああん」

そう言いながら碎は、レイヴェニアの小さな胸をホルドし八神の所に投げた。

そして二人はぶつかり起き上がらなかった。

「・・・あの、二人とも。気絶したふりして誤魔化そうとしないでください」

「チツ。おい、シャル。お前をコンマ一秒でも早く死んでほしいのは山々だが。見てのように林間合宿がある。これが終わったらまたこの続きをしよう。だからさっさと帰れ」

八神はレイヴエニアを抱いたままシャルに帰れと言った。当のシャルは、しばし考え答えもせずに鍵を使いどこかへ行つた。

「おい、碎。あいつは何なんだ？ 『必要悪の教会』^{ネセサリウス}の魔術師か？」

「んー？ そうよー。まあ、ちなみにあの子が使う魔術は、十字教に汚染されたギリシヤ神話つてどこかしらー？」

碎はシユラの質問に答えながらも、とある魔法印が書かれた紙取り出していた。

「角は鹿、頭は駱駝、眼は鬼、身体は蛇、腹は蜃、背中の鱗は鯉、爪は鷹、掌は虎、耳は牛に似る者よ” “我が求めに応じ出でよ” “碎の言葉と同時に巨大な龍が紙から出現した。

「じゃあ、私はこれで先に言ってるねー」

そういい、龍。正確には辰に乗り飛んでいく碎。

「では、遮那樣。レイヴエニア様。お待ちしております。一心、不法入国ですので」

そう言い、給仕姿の女性は鍵を使いどこかに消えていった。

「・・・なあ、八神。お前が頭首をしている贄殿家は日本じゃないのか？」

「どこで調べたそんなもん。いや、俺が6歳の時、いろいろあつて本拠地をイギリスに移したんだ。もともと贄殿家は魔術方面が強かつたからな。魔術大国イギリスでも十分にやっていけたんだよ」

そう言いながら山に登る彼ら。ちなみに隣とサーシヤはテンションが高くなっており、はしゃいでいた。

「・・・なあ、八神。なんで、そないなもんに乗って山を登つとるんや？」

「おいおい。俺が荷物持って山なんか登ったら今頃、血反吐はいて倒れてるぜ？」

そう言う八神は天狐を呼び出し、それに乗っていた。レイヴェニアはレイヴェニアで一角獣ユニコンを呼び出しそれに乗っていた。

「出雲ちゃんと九城ちゃんはなんで、使い魔に乗らへんのですか？」

「・・・使い魔を呼び出して使役するっていうのは、意外と精神面でけっこう疲れるのよ。あの二人はその桁外れの精神力に物を言わせているだけ。私達にはそんな芸当できないわよ」

志摩は少し疑問に思ったのか、出雲と九城に聞いたが、出雲は自分たちには不可能だと言った。

・・・いまさらだが、妙に適応能力の高い奴らである。

「さて、ここでテントを張ります」

そして、目的地に着いた。雪男は各自に指示を出し暑苦しいコートを脱いだ。

ちなみに役割は、男子はテントの設営と炭熾し。女子はテント周辺に魔法円の作図と夕食の支度であった。

結論から言おう。この配分は間違いだ。魔法円の作図は八神、レイヴェニア、出雲、九城に任せた方が効果的で速いのだ。

夕食は燐、サーシャに任せた方がおいしく出来るであろうし。そもそも、レイヴェニアに至っては八神に食べさせるためだけに、また血ライスを作りかねない。危険だ。

テントに至っても、燐と八神はこういう物とは無縁の生活を送ってきたため壊すに決まっているし。（八神は、テントみたいに出来ているけど実は、魔術的な防衛設備が、がんがんに入った要塞を組み立てていた）

そして、

「ちよ、あんた！何手首切ろうとしてんのよ！？」

れに雪男は反応した。

「ううん。なんか、最近燐は何かを背負っているような顔をしているから……」

八神の、『このことは雪男には言うなよ』の言葉を思い出したのか、あいまいに答えるしえみ。

「……しえみさんは兄さんを良く見ていますね」

しかし、雪男はそんなことも知らずに答える。その顔にしえみはそのことを言おうかと思っただが、出来なかった。出来たのに出来なかった。

「んー。夕食も済んだし、これから始める訓練を発表する」

「あ、僕が説明します」

八神が訓練の内容を言おうとしたが、これは、この中では一番下っ端の雪男が引き受けた。

「皆さんには提灯に火を点けて戻ってきてもらいます。三日間の合宿期間内に火を消さずに戻ってきた者に実践任務の参加資格が与えられます。ただし提灯は全部で4つしかありません。つまり参加資格は4枠というわけです」

シユラは酒を飲んでいたが、何かを考えているのかたいして何も言わなかった。

八神とレイヴエニアは眠そうに、うとうとしており。その姿を見た砕は、キヤーキヤー言っって喜んでいた。

「まあ、燐君とサーシャちゃんは、その手枷足枷と見えない拘束具で、炎と水は一時的とはいえ完璧に封じてあるわよー。まあ、使い過ぎると爆発するような霊装だけどねー」

「それに……この……課題は……森ごと……燃やせば……
・すぐに……合格で……き……るしな……」

砕はあくまで、燐とサーシャはみんなと同じだと言外に言った。八神はとんでもない近道を言っつて、レイヴェニアとともに寝た。

「うん！睡眠薬はちゃんと効くようねー。まあ、自分で作ったもんだから半信半疑だったんだけど」

「・・・お母さん？どうやって作ったの？」

そう言いつつも、おのおの四方に歩いていく訓練生。エクソワイア

そして、雪男の銃声とともに訓練が始まった。

楽しいキャンプ（後書き）

神 「さつさと、ミニコーナー始めるぜ」

作者 「おい・・・最初の言葉奪うな」

神 「それより、今日紹介するの誰？」

作者 「神木 砕さんです。理由は説明しやすいから」

神 「そっかー。では、これです」

神木 砕

性別 女

職業 魔術師兼被魔師

使用魔術 神道系魔術を良く使う。

所属 フリーの魔術師

コスプレで巫女装束を着こむ変態。見た目18歳だが、実年齢は少なく見積もっても36歳。

使い魔は十二支を使役している。

被魔塾歴代制圧ランキング堂々の一位。理由は他人の弱みに付け込むのがうまいから。

作者 「つてことでいいかな？」

神 「いいんじゃない？そんなにネタばれしていないし」

作者 「では、最後に」

「誤字脱字の報告、感想お待ちしております」

神木家没落物語（前書き）

・・・うーん。本気で転生関係なくなってきたいな。
今回の話では、シユラがとある決心を固めます。

あと、八神とレイヴェニアの暗い過去が少し出ます。

では、本文です。

神木家没落物語

「なあ、砕」

シユラは何かを決心したように砕に話しかけた。

「なに？シユラちゃん。今、私はこの二人を愛でること忙しいんだけどー？」

砕は二人を、自分の胸で寝かしており、時々動く二人を見てよだれを垂らしていた。

はつきり言おう、ただの変質者のようだ。

「ワタシさー。魔術師になろうと思う」

「・・・、それはどうして？」

シユラの言葉に砕、雪男が反応した。

「考えてみたんだよ。私が被^{エラ}魔術師で居続ける意味って奴を。答えは案外単純だった。獅朗のようになりたかったんだ。でも、それだけじゃなかった。あんな場所で生きていたから強くなりたかったのが一番強かったんだと思う」

星を見ながら話し続けるシユラ。砕の顔は険しい。雪男は驚きを露わにしていた。

「・・・、それでも十分な理由よ。魔術師になる理由なんて、なんだっていいの。モテたいでも、貴女のように強くなりたいてもね？でも、ほぼすべての魔術師はとんでもない挫折を背負ってるの。飢餓で仲間を殺さなきゃいけないかった。力が足りなかったから仲間が死んだ。そんな挫折をね。私の挫折はこの二人を守り切れなかった事なの」

八神とレイヴェニアを撫でながら喋る砕。その眼は悲しみで満ちて

いた。

「あなた達は信じられないでしょうけど、この二人も昔は純粹な被^{エケ}魔師^{ソシスト}を目指していたの。でも、それは最悪の形で断たれたの。神木家の被^{エケ}魔師^{ソシスト}に利用されたことだね。だから二人は被^{エケ}魔師^{ソシスト}を恨み、憎しみ、憎悪した。そして、この子たちは、あの日から人間らしい感情がほとんど無くなったの。最近、一人の少女によってある程度は救われたようだけどね」

そして、碎は昔話を語り始めた。

神木家没落物語

昔々、神木家と言うとても繁栄した一門がありました。当時、神木家は世界有数の被^{エケ}魔師^{ソシスト}の一門でもありました。

しかし、その神木家も三つの災厄によって没落してしまいました。

一つ目の災厄は『青い夜』

二つ目の災厄は・・・これについては後々語ることにしましょう。

そして、三つ目にして最大の災厄は『白面金剛九尾』

・・・当時、神木家では、齡三歳で天孤を出し。齡5歳で空孤を使役する天才がいました。

この才能に目をつけた神木家上層部の中堅たちは、彼に無理やり、当時日本では最も複雑な魔法円で彼に呼びだされる中で最も強力な使い魔を呼びださせました。

しかし、物事は予想どおりにはなりませんでした。呼びだされたのは、目を疑うほどに美しい毛並みを持ち、尾が九本ある狐妖でした。その狐妖の名は『白面金剛九尾』。

その力は八候王^{パール}と同等かそれ以上。もちろん齡五歳の子供には屈せず暴れまわりました。

不思議なことに魔法円を消しても白面金剛九尾は消えずにいまいた。

神木家の被魔師達は必死で抵抗しました。しかし、圧倒的な力の前では全て薙ぎ払われるのが落ちでした。

そうこうしている内に少年は、だんだん精神的に衰弱していきました。

そして、白面金剛九尾を呼び出した彼の母親は、泣きながら神木家に伝わる秘術中の秘術。禁術中の禁術を使い、息子の中に白面金剛九尾を封じました。この術で彼女は体力を使い果たし倒れ、神木家最高峰の被魔師たちも力を使い果たし半年間眠り続けました。

そして、この事件の発端である者達は自分に責任が来るのを恐れ、呼びだした少年とその許婚に全ての責任を押し付け地下牢に入れました。

少年はある一族の頭首であり、その家の者たちはぶち切れ戦争を起こしました。

少女の家も名家でした。そして、もちろん戦争を起こしました。

さて、牢獄に入れられた少年に使われた秘術の名は『二魂合体』と言われるもので、これは一つの体にもう一つの魂を入れる荒業でした。

悪魔憑きと違い少年の魂はそのままでした。しかし、少年の体はそうではありません。

一つの体に二つもの魂がある。それに体は耐え切れずだんだん破壊されて行きました。

少年の許婚は自分も、その負荷を背負おうとし無理やり自分にも移しました。

二人はだんだん衰弱していき、届けられる食事も最低限のものだけでした。

そして、少年と少女が監獄に入れられてから半年後。とうとう外に出されました。

神木家の被害は凄まじく、彼らを監獄に入れた者の家はお取り潰し。また、その者たちの子供たちにも白面金剛九尾の負荷の一部を負わせました。

その親たちは必死でやめて下さいと懇願しましたが、少年と少女の家と母親はそれを許しませんでした。

そして入れられたほとんどの子供たちは、良くて発狂、植物状態になりました。

それでも生き続けました。少年の母親は発狂した子供親にこう言いました。

お前たちがやった事はこれよりも重いんだぞ。と……。

少年と少女は被魔師に絶望しました。

そして少年の家は、こんな所に大事な頭首を置いておけないといい。少年の許婚の家がある、イギリスに本拠地を移しました。

少年の母親は二人に泣きながら謝りました。そして、彼女は少年と少女を救うために魔術師になりました。

しかし、少年と少女は、神木家に復讐をするために魔術師となり、多くの魔術師を、被^{エクスシスト}魔師を殺しました。

神木家は三つの災厄により弱体化し、その権威も弱まっていきました。

世界有数がアジア有数になり、アジア有数が、今では日本有数にまで落ち込みました。

最近ようやく、弱まりにも歯止めがかかり。なんとか、権威も持ち直しています。

しかし、少年と少女には許されずにいます。

「これがね。私が、そしてこの二人が魔術師になった理由よ」
あまりにも酷い話だった。エクスシスト被魔師の欲でこの二人の未来は暗いものになってしまったのだから。
この話を聞いたシユラと雪男は、今一度、八神とレイヴェニアを見た。

一体どれだけの闇を負っているんだという感情で見た。

「でも、まあ、この二人は二人で、それなりに楽しい生活を送っているみたいよ……。でもねえ、今のままじゃいけないの。絶対にダメなの」

「どう言う事だ？」

砕は八神とレイヴェニアを撫でながら、今のままではだめだと言った。

シユラはその理由を聞いた。

「だって、まだこの二人の中には『白面金剛九尾』がいるのよ。だから内臓が破壊されていつてるの。現在進行形で」

なっ、と二人は驚いた。内臓破壊がいまだに続いていることに驚きを露わにした。

「破壊された内臓を抽出しようにも、少しずつ進んでるから無理。魔術でも二人を直す方法なんかなかった。ただ一つの救い道は、もう一回この二人に『白面金剛九尾』を呼びださせることだけ」
静かにこれを聞く、シユラと雪男。シユラは、これだけの覚悟で魔術師になってもいいのかと迷った。

雪男は、なんて思えばいいのかでさえ解らなかった。

「でもね、シユラちゃん？あなたの覚悟は魔術師全体で見れば重い方なの。私達が重すぎるだけ」

星を見ながら話す砕。その姿は、どことなく悲しみに覆われてた。そして、改めてシユラは覚悟を決めた。

「解った。私は魔術師になる！そして強くなつて見せる！」
力強く宣言したシユラ。その姿をニコツと見る砕。

そんな二人をただ見る雪男。そして彼はこう思った。自分はどうする？と・・・。

「じゃあ、魔法名を決めましょう」

「いや、もう決めてある」

砕の言葉にすぐに、答えるシユラ。

「Fortiss808だ。意味は、強さを追い求めるものだ」

Fortiss。強さを意味するラテン語。まさにシユラの目的にぴったしの名であった。

「いい名ね。・・・貴女ネセサリウス『必要悪の教会』に入りなさい。あそこは

『対魔術師』そして、『対被魔術』に特化した魔術師の部署よ。貴女の夢を達成するにあそこほど、ぴったしなところは無いわ。この二人から推薦状をもらいなさい。それが一番の近道よ」

砕はシユラに部署を紹介した。そして、魔術師養成の学校も同時に紹介した。さらに砕は何かを思い出したように、こう続けた。

「ああ、私の魔法名を言わなきゃね。salvare510よ。意味は子供を救う」

魔法名を名乗った者には、魔法名で返さなければいけない。

アドバンスドウィザード
これは近代魔術師の掟のようなものでもあった。

そんな中、一本の花火が打ち上げられた。

これはリタイアの証であった。

「まあ、はやいわねー。って、ああ。二人の寝起き顔が見れる！よっしゃ！」

「・・・雪男ー。お前行けよ」

砕はいつもどおりの変態に戻り、もうちょっと、砕から魔術を教えてほしいシユラは雪男に、ほん投げた。

「・・・はあ、解りました。しっかり仕事してくださいね？」

「おー。解った解った。じゃあ、砕。魔術について教えてくれ」

雪男はそう言いながら、森へ生徒を回収に行った。

「んー？貴女の夢の場合はこの二人に教えてもらった方がいいわよー。・・・、それに今は、それどころじゃないようだしねー」

そう言った砕は、後ろをにらみつけた。

それと同時に、八神とレイヴェニアが起きた。シユラも体調を確認した。

「んー。あいつ等、僕たちの事に気づいています。生意気な」
砕が睨めつけた先には、アマイモンとメフィストがいた。

「・・・ねえ、兄上。ボクはあのサイって女とは戦いたくありません。なんだか面倒そうですし。それに、あの八神とレイヴェニアでしたっけ？あの二人からは、なぜかいやな感じがします。戦いたくありません」

「・・・アマイモン。お前が戦うのは、奥村燐とサーシャ・クロイツェフだけだ。それに地震は使うな。私の学園が物理的に潰れる」
アマイモンの口から珍しく弱気な声が聞こえたが、メフィストはたいてい気にしていないようだった。

神木家没落物語（後書き）

神 「今回は神木八神こと、贄殿遮那八神を紹介するZ E」
作者「あゝ、はいはい。解りましたよ。では、たいして好評でもない自己満足の始まりです」

神木 八神（偽名）

贄殿 遮那八神（本名）

性別 男

職業 魔術師兼被魔師

使用魔術 十字教、北欧、ギリシャ、神道、その他いろいろ。

所属 イギリス清教『必要悪の教会』ネセサリウス内『decem』のまとめ役。

八歳のころから、国家大臣クラスに安定した給料をもらっているため金銭感覚はおかしい。

服装は基本的にゆったりした服装を好む。

ある事情により、内臓がかなり破壊されており過度な運動はできない。

もしした場合は本人曰く、『血反吐はいてぶっ倒れる』とのこと。

ただし、体が弱いわけでも、体力が無いわけでもない。むしろ、凄くある方。

魔術師としての実力は申し分なく、その実力は『プロの魔術師が干人がかりでもまだ甘い』と言われている。

被魔師を恨んでいるが、それは『神木家』のだけで、被魔師全体に対しては実はそうでも無かったりする。

人間らしい感情は砕曰くほとんど無いとのこと。

解りやすく言えば、レイヴェニアに対する恋愛感情は常軌を逸している。

作者「って言う事にしといた」

神「おい。レイヴェニアの事について触れてないぞ？」

作者「触れたら大変な事になる（キリッ）」

神「本音は？」

作者「すっげー面倒になる」

神「・・・、まあ、いいか。では最後に」

「誤字脱字の報告、感想お待ちしております」

ぎゃああああ！！？虫！？蟲！？むしイイイイ！？（前書き）

今回は九城がそこそこ活躍？します。

・・・あと、はじめに謝っておきます。すみません。

では本文です。

ぎゃああああ！！？虫！？蟲！？むしイイイイ！？

「ぎゃああああ」

夜の森で、ある中学生が絶叫していた。

「虫！？蟲！？いやあああああ！！！むしきらあああいいいいいい！！！！」

彼女は、神木九城。いま提灯を探している途中であった。

のだが、彼女は蛾に囲まれていた。

はつきり断言しよう。彼女は虫が嫌いだ。小学一年のころに、たまに帰って来た八神の壺毒を見て以来虫が駄目になってしまったのだ。

「そなたは何を望む！」　「そなたは何を欲する！」　「厚かましき者よ」

そうして化け狸を三体呼び出し、命じた。

「どうでもいいから私に近寄る蛾を片っぱしから殺戮しなさい！！！」

彼女は、性格が破綻しているように見えて実は、それは意外と他人のみで、しかも他人の領域が以外と狭かったりする。

虫が嫌いだったり、お兄ちゃん子だったり、お母さん子だったり、おばあちゃん子だったり、友達がたくさんいたり、いかにも今頃の中学三年生だったりする。

『主よ……。はあ、八神殿の使い魔が羨ましい。あんなしつかりした主を持って……。』

「魔銃と機関銃。どっちがいい？」

化け狸の一匹が愚痴ると九城はにっこりと脅し、それに化け狸はビ

シツと敬礼をした。

そして、提灯がある所まで着いたのだが・・・

「デカツ!? え? え? マジでどうしよう!? 私の使い魔は私に似て非力なのが多いし・・・。疲れるけどあれをやるしかないな・・・。いやだなー」

提灯の本体は化灯籠。ベケランタン

九城は化灯籠ベケランタンに札を貼りつけ、次に詠唱した。

「“雑魚供” “働け”」

そうすると天から、いっばいのデフォルメ化された子狸達が落ちてきた。

そして、化灯籠ベケランタンを背負い、九城は化灯籠ベケランタンに火をつけ詠唱を始めた。

ちなみにちゃんと燃料補給用の子狸もいる。(別に、子狸が火の燃料になってるとかじゃないよ)

順調に進む九城。

「第一の質問ですが、女子に荷物を持たせる男子とはどうかと思えますが?」

「そう言われてもなあ。お前は、奥村と同じぐらい馬力あるしな? 仕方ないんや」

所変わってここは、チームを組み化灯籠ベケランタンを運ぼうとする者たちであったが、サーシャが役割に不満を持っているようだ

「まあ、我慢しろ。俺だつていやなんだからよ」

「第一の解答ですが、あなたは男子だから仕方ありません」

燐、サーシャが化灯籠ベケランタンを載せたり屋かを運ぶかかり、勝呂が詠唱をして化灯籠ベケランタンの動きを止める係、志摩、子猫丸が蛾チュートの虫豸などを撃退する係、ここまでは良かった。しかし、次のしえみの係でサーシャが文句を言った。しえみの係は化灯籠ベケランタンに燃料エサをやるだけだったのである。これにサーシャは不平等だと言った。

「第二の質問ですが、では、自分としえみの係を変えてはどうですか？まえに、最近、力ついて来ているような気がしているとかほざいていたので、いい機会です」

丁寧なのか丁寧じゃないのか解らない口調でしゃべるサーシャ。内容を見ると悪魔のような内容であった。いや、半分は悪魔ののだが・

それからサーシャは駄々をこねていたが、とうとうあきらめりアカーを引くことを承諾した。

順調に進んでいく中で一本の花火が撃ちあがった。

それに、彼らは誰が落ちたのかをそこそこ議論していたが、すぐにやめることになる。

「おい……！吊り橋だ！」

「第一の解答ですが、たしかに吊り橋ですわね」

前方でリヤカーを引いていた燐とサーシャがいち早く反応した。

彼らの先には、人が渡れるかも微妙な吊り橋があった。リヤカーなんてとても無理であった。

「……第一の質問ですが、あれはなんですか？」

サーシャは指をさして暗闇に倒れる者をさした。そこには……

「九城！？何でお前がこんなとこで倒れているんだ！？」

「……うわ……。虫が、蟲が、むしがアアアア！！！」
燐が驚き声をあげ、それでおきた九城が、いきなり絶叫した。

「虫？なんのこと……。て、ぎゃあああ！？むし、むしが、ぎょうさんおる！？」

九城の話聞いた志摩が吊り橋の下をのぞきこんだら、そこには百足がうじゃうじゃいた。

これは普通の人でも絶叫するだろう。量のをだ。これでは虫嫌いの二人が大丈夫なわけ無く……。むしろ、良く失神しなかつたなどほめたいぐらいの量であった。

「うう、使い魔はいないし。化灯籠ベ格蘭タンがない所を見ると……。あいつら渡しを置いていきやつたな」

こうなると九城は、合格したことになるのだが……。

「でも一応保険はかけとくか。ねえ、私も手伝うよ」

この要請に、皆は快く了承したが、この吊り橋では志摩レベルに役には立たないだろう。

「今私にできるのは、銃を撃つことぐらいだよ。あ、虫はいやだよ！気しょいし！」

や、役にたたねー。と志摩以外が思ったが、志摩は涙を流して、同士が出来たと呟いていた。

「うう、それでこそ人や。小学校の頃なんか、教室で虫飼うことになつて……」

「ああ、それ私もあつたよ。私だけが必死で抵抗したのに……。誰も聞いてくれなくて……」

九城と志摩が何かを思い出したのか、おいおい泣きはじめているのを「右から、右から、右から来たものを、左へ受け流す」的に

受け流し化灯笼ベケランタンを向こう岸に渡した燐たち。

そして、泣きながら燐たちの方へやってくる九城と志摩。

燐はこれを出来たことに喜びジャンプをしたが

ブチツ。という音があたりに響いた。これは吊り橋の縄を斬った音である。カーンの種子字をついた…。

周りの反応は、？という物で、しかも百足の川から馬鹿でかい蛾が出てきた。

「なな、なにやってんやー!!」

勝呂が驚き声をあげ、周りの者たちはガビーンといった顔をしていた。

・・・九城と志摩は、もういやと唸っていた。

それから、力を拘束具によって封じられた燐には、なすすべがないわけではないが、勝呂のつかいい助け方によってどうにかなった。

「トーチャクー。あ、やっぱり私の化灯笼ベケランタンこつちに来てたんだ。あとでお仕置きだな。でも、どの化け狸かな？あの詠唱じゃランダムに決められるし」

そんなこんなでゴールに到着した燐たち。そこには先客として出雲、宝がいた。

「遅かったわね。私は三着だったから言う権利は無いんだけど・・・」

出雲が少し悔しそうに言った。

「ん？なんだお前ら？これで全員じゃないか。じゃあ、さっきのは・・・」

八神が試案にふけていると・・・。ちなみにこの姿を見たレイヴェ

ニアは八神に抱きついていていた。

「ヒユウウウウ」

と、口で言いながら上から人が、否、悪魔が落ちてきた。

「シュタツ。ゴー！ベヒモス！」

悪魔の名はアマイモン。八候王の一人であつた。

ぎゃああああ!!?虫!?蟲!?むしイイイイ!? (後書き)

神 「勝呂ファンは烈火激怒しているだろうね」

作者「だって、だって、あれの描写を書くって意外とつかれんだぜ!?挑戦したけどめっちゃくちゃになっただし!」

神 「まあ、心優しい読者の皆様もこれには、耐えられないかもね。それはともかく今回は、レイヴェニアを紹介するZ E」

作者「すみません。すみません。すみません。兎に角すみません。では、自己満足の始まりです」

レイヴェニア「バードウェイ

性別：女

職業：魔術師兼被魔師

使用魔術：象徴武器を使う事が多い。それ以外にも多彩な魔術が使える。

所属：イギリス清教『必要悪の教会』内『decem』の参報。
ネセサリウス

彼女に限った話ではないが、『必要悪の教会』を裏切ってもいいように、バードウェイ家の『明け色の陽射し』のボスもやっっている。(八神は贄殿家)

八歳のころから、国家大臣クラスに安定した給料をもらっているため金銭感覚はおかしい。
エタソリスト

被魔師志望の妹がいるようで懐かれているが、いろいろ酷い認識をされている。

曰く、「心配性」

曰く、「わがままで部下を振り回す」

曰く、「お金はド派手を使うことしか考えていない」

曰く、「ビルが爆破されても平気な顔して出てくるだろう」
曰く、「トンデモナイ事になってもなんとかする超人夫婦」
八神同様ある事情により、内臓がかなり破壊されており過度な運動
ができない。

もし過度な運動をした場合本人曰く、『可憐に八神の方へ血を吐き
ながら倒れる』とのこと。

ただし、体が弱いわけでも、体力が無いわけでもない。むしろ、凄
くある方。

魔術師としての実力は申し分なく、その実力は『プロの魔術師が千
人がかりでもまだ甘い』と言われている。

八神ほどには被魔師を恨んでいないが、八神の敵は問答無用で恨ん
でいるため結果的には八神とどっこいどっこいである。

作者「という事にしました。勝呂ファンの皆様、重ね重ねすみ
ませんでした」

神「みんな！こいつにしっこいつって感想に書いてもいいぜ！では、
最後に」

「誤字脱字の報告、感想お待ちしております」

やさしい事(前書き)

・・・心理描写難しいです。

それと、とうとうあの妖狐が出ます。

では、本文です。

やさしい事

「ゴー！ベヒモス！」

「グルオオ、オ、」

空から落ちてきた悪魔。アマイモンはペット（？）の鬼を解き放つた。

「ハツ！じゃあこいつでお迎えしてやるぜ！」

世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ

それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり

その名は炎、その形は軍隊

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ

ツ！『ザ・ナイト
騎士団』！！！」

八神はアマイモンに対しある詠唱を行い、人の形をした炎の軍隊を呼び出した。

それらは、一体一体が撰氏2000の軍隊と呼ぶには強力すぎるものであった。

「待ちくたびれたよ……！」

シユラはアマイモンに臆することなく、ピュイと指笛を鳴らし、地から一体の蛇を呼び出しそれを起点に炎が広がった。

そのあと、なぜかアマイモンは吹っ飛ばされた。

「……おい、まだだ。多分山じゅうの山魅、土塊、鬼、緑男が来てるぞ。絶対牆壁でもこの数はやばいな。というかなんだこの絶対牆壁は？まるでイギリス清教の劣化版だな」

八神の言葉に皆が外を向くと、そこには空を？む地の王の眷属達
いた。
それにレイヴェニアがため息をつきながら杖を取り出し、くるんと
バトンのように回した。

すると、絶対牆壁の周りに業火が起き、地の王の眷属が吹っ飛ばさ
れた。

「チツ。調整し忘れていたから本来の力の20%も出ていないな」
それにレイヴェニアは、普段とは違う口調で苛立ちを露わにしてい
た。

吹っ飛ばされた地の王の眷属の悪魔達が見た物は、業火の中から出
てくる炎の軍隊。

悪魔たちは心は無い。あるように見えても、それはただのそれっぽ
いものだ。

しかし、憑依した者の気持ちはいささかある。

彼らは、特に鬼達ゴブリンは憑依した物の生存本能が語った。
逃げる、死ぬ。と強く思ったがもうすでに遅かった。

地の王の眷属の悪魔たちは炎の軍隊によってぐちゃぐちゃのガムみ
たいにそこら辺にへばりついていた。

「ふーん。まあ、本当に化け物じみてきてるわねー。私の息子と義
娘は。でも、そこがいい！」

「碎さん。いつの間そこにいたのです？」

「あんたの弟が襲撃にあらわれてここにとばされたところから」
碎はメフィストの所に、というかアマイモンを追ってと言った方が
いいのだろうが、メフィストの所にいた。

「うーん。殺したい」

「じゃあ、私は、まずはあんたを、殺して解して並べて揃えて晒し
てやんよ。」

アマイモンの言葉に碎は反応し、零崎的な言葉を言った。

「は？うお！？ははは、兄上。この人、本当に人ですか！？」

アマイモンは、そのあと碎に蹴り飛ばされ嬉しそうに感想を述べた。

「人だよ。今のは魔術を使っただけ。魔術名は『母は強し』。その名のとおり、息子より、娘より強くなる魔術さ！」

碎はそう言いながら魔法円の書かれた紙を取り出し、詠唱をした。

「時間を決める者たちよ」
「我が契約よりその姿を現し」
「我がために闘え」
「出でよ」
「十二支」

そうすると、紙からではなく、四方。否、十二方から使い魔が現れた。

「ほう。凄まじいな。しかし、その量と質だ。持てて数分だろう」
メフィストはその数と質に感嘆したが、すぐに消えるだろうという結論に至った。

しかし、数秒もたたずに全ての使い魔が消えた。

「ゴメーン。銃に憑依させたわ。この技術はわたしの企業秘密よん
さあ、死に去らせ。屑が」

碎は十二支全てを二丁拳銃に憑依させ、撃ち鳴らした。

銃から出てきたのは、炎、氷、空気、さらには普通弾。しかも、銃の弱みである弾切れが無く、リロードの時間も無かった。

「……ッ！？クソ！？強すぎます。ここはいったん引かせ……
！……！？」

避けるのに精一杯のアマイモンは引こうとするが、碎の蹴りによって吹っ飛ばされた。

「な、なんやあれ！？誰がたたかつとるんや！？」

「母さんだよ。それとアマイモン。名ぐらいは知ってるだろ？」

勝呂が砕だと解って家も聞かずにはいられない。そのような強さを誇る砕。遠くから見ていてもその強さは他の追隨を許さなかった。

「あ、アマイモン！？」

「ああ、そうだ。だから今から防御に専念する。砕もいつかは疲れ
るだろうからな」

「そうだな。一応『騎士団』^{ザ・ナイト}の数を減らして一人一人につかせとく
がいいか？あと、『魔女狩りの王』^{イノケンティウス}も出さざるを得ないだろうがな」
驚く生徒たちをしり目に、必要最低限の会話だけで作戦を組み立てるシユラと八神。

「ちょ、アマイモンって八候王^{パール}の地の王のアマイモンですか？」

「そうだ。今は砕が、何とか気を引いてるがいつまでもつか解つた
もんじゃない。ほら、聖水かけるからな。さつさと来い。いちいち
説明してられない」

出雲の質問に簡単に答えるシユラ。八神とレイヴェニアは魔法円を、
しかもかなり複雑な魔法円を書いていた。

言われたとおりに集まった塾生に聖水をぶっかけるシユラ。

「いちいち説明してられないんだ。今から外に出した『騎士団』^{ザ・ナイト}
を呼びもどして数を減らし質をよくする。あと『魔女狩りの王』^{イノケンティウス}を
呼びだす。いいか、絶対に外に出るなよ？『魔女狩りの王』^{イノケンティウス}は俺に
つかせるから、お前らはその聖水の防御と『騎士団』^{ザ・ナイト}を二体ずつだ
けだ。はつきり言ってそれで足りるとは思っていないよ」

それでも必要最低限らしい説明を終える八神。そうこうしている内
に、炎の軍隊が戻ってきて数がボン、ボンと音を立て消えていった。
そして残った、人の形をした炎が二体つつ塾生のそばについた。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ

(MTWOTFFTOIIGOIOF)

それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり

(IIBOLAIIOE)

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり

(IIMHAIIBOD)

その名は炎、その役は剣

(IINFIIIS)

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ

(ICRMMBGP)

八神が詠唱すると魔法円の中から、真紅に燃え盛る炎の中に、重油のような黒くドロドロした人間のカタチをしたモノが芯になっている物が出てきた。

イノケンテイウス

『魔女狩りの王』。これは本来、『十年月明かりを溜めた銀狼の牙で…』とかいう代物であるため、たかが十数分でこれを発動させた八神は凄いわけではない。

イノケンテ

実は八神は世界中の地脈、龍脈、レイラインの交差点に『魔女狩りの王』を出すためのルーンを刻んでおり、出す際は一定の魔法円を刻むだけで良かったのだ。

・・・ただし、それでも八神の才能は凄いのだが。

「おい。絶対に外には出るなよ」

最後に八神は、そう忠告し地に座った。

それにならない塾生達も座ったのだが、しえみがふらふらと絶対牆壁の外にあるいていった。

「ナツ！？おい！？」

シユラがあわてて止めに入ったがもう遅かった。

しえみが外に出ると同時に空からアマイモンが墮ちてきた。

「『騎士団』。しえみを殺せ」

八神は現状を冷静に考え、冷酷な最善にして、最速にして、最悪の判断を選び、冷酷な声で『騎士団』^{ザ・ナイト}に命じた。

「おい！？お前！なんで杜山さんを殺そうするんや！？もっと別の方法が！」

「あると思うか？『騎士団』^{ザ・ナイト}はおろか、『魔女狩りの王』^{イノケンティウス}でも相手にならん。まあ、しえみが正常ならまだ話が別だがな。言っておこう。寄生虫に寄生される方が悪い」

怒りにまかせ、八神の胸ぐらをつかみかかる勝呂に八神は冷酷に現実を突き付けた。

しかし、そんな間にも『騎士団』^{ザ・ナイト}はアマイモンに潰された。

「チツ。ほら見るぐずぐずしているからだ。
灰は灰に

(AshToAsh)

塵は塵に

(DustToDust)

吸血殺しの紅十字！！」

(SqueamishBloodyRood)

八神は詠唱をし、炎剣を生みだした。

そして、贄殿遮那を取り出し

「纏え、贄殿遮那」

紅蓮の炎を贄殿遮那にまとわせた。

「おい、母さんはどうした？」

「勝手に、崖から落ちて行きました」

八神はしえみの心配より、まずは母親の心配をした。アマイモンは即答で答えたがその内容は砕のガツカリ度を上げるようなものであった。

「ありそう過ぎて逆に怖いな。それから、・・・そこは俺の攻撃範

困なんだよ」

八神は少し安心をしたようなそぶりを見せてから、アマイモンの後ろから地を溶かしながら、……『真紅 巨腕』を出現させ、しえみごと掴みかかろうとした。

「ハッ！それじゃあ、私も参加させてもらうよ。」

レイヴェニアはそう言いながら、『蓮の杖』ロータスワンドを取り出し、

Tutto paragone . Il quinto dei
elementi .

「万物照応。 五大の元素の元の第五。」

Ordinalla canna che mostra pac
e edordina .

平和と秩序の象徴『司教杖』を展開」

Prima . Segual legge di Dio
ed una croce .

偶像の一。 神の子と十字架の法則に従い、

Due cose diverse sono connesse .
異なる物と異なる者を接続せよ」

そう詠唱をし、ゴンと地面にたたきつけた。

……、おそらく彼らはしえみという犠牲など考えていないのだろ
う。

レイヴェニアがボスをしている、『明け色の陽射し』は『黄金』系
の中でも、目的のためならば手段を選ばない事で有名であった。

八神が頭首をしている贄殿家は、今や『殺戮無双』、『不必要悪』
とまで言われる集団であった。

そのような者達がいちいち部下でも何でもないものを助けようとする
のだろうか？

答えは簡単だ。そんなわけない。それどころか、利用さえしようと
するはずだ。利用するだけ利用し廃人になったら捨てるはずだ。そ
んな人格……殺格の持ち主なのだこの二人は。

しかし、そんなこと露程にも知らない者達は怒りで爆発しそうだった。

勝呂はもう耐え切れずになり、もう一回二人に掴みかかった。

「なんで、なんで、そないに簡単に人を見捨てる！！！！？」

「簡単だよ。そんなこと」

「はは、お前は光の側の人間だよ本当に」

勝呂の怒りの言葉を笑う二人、そんな中でもアマイモンに対する攻撃の手は止めていなかった。

出雲と九城は、二人のそんな事情は知らなくても、勝呂の言葉が禁句であることはすぐに判断した。

「俺ら（私たち）が見捨てられたからさ」「

冷酷に笑いながら言う二人に皆は恐怖を覚えていた。

アマイモンは、一瞬攻撃が緩んだ隙に逃げ出した。

そんなことは気にせずしゃべり続ける八神。

「俺らだけじゃない。『decem』は全員見捨てられてるぞ。燐とサーシャもだ。神様に俺らは見捨てられたんだ。もし、神様が完ぺきなシステムを作り上げたんなら、俺がこんな負荷を背負う事は無かったんだ。レイヴェニアが俺と同じ負荷を背負う事も無かったんだ。燐とサーシャが悪魔の子だという事も無かったんだ。そもそも、悪魔そのものがあるはず無いんだ」

勝呂の手を振り払い、燐とサーシャに何かを渡し、絶対牆壁の外に出ていく八神とレイヴェニア。

「・・・なんや、なんなんや！？お前らも、奥村もなんか言ったらどうなんや！？」

勝呂の怒りは・・・いや、疑問はすぐに燐の方へと向かった。

「・・・、なあ、お前ら生き地獄ってあると思うか？」

しかし、燐はすぐに答えた。全く勝呂を見ずに

「あるわ。実際に私達はこの目で見たんだもの。生き地獄を、そしてあの二人はそれを体験している」
出雲はすぐに答えた。九城も首を縦に振った。しかし、他の者たちは意味が解らずに首をかしげていた。

「・・・、そうか、俺も見たぞ。実験場に転がっている悪魔の子たちを。だから、勝呂。お前の意見はあの二人にとっちゃ、侮辱以外の何物でもないんだぜ？」

ここにいた者は戦慄を覚えた。ここにいる燐は、中身がごっそり入れ替わった何かじゃないのかと・・・。
しかし、シユラは苦い顔をしていた。まるで、やはりかと思うかのように

「まさか、本当にあつたのか？あの、『神上』計画は」

「おいおい、本場はバチカンだろ？しらばくれるなよ。それよりしえみが先だ。あの二人じゃ、本気で殺しそつだしな」

そう言いながら、絶対牆壁をでる燐とサーシャ。彼らは地獄を見た。しかし、だからこそ強くこつ思った。

これ以上仲間を失いたくない。と・・・。

「追いついたぞ。アマイモン。お前をさつさと殺す」

「そうだな。さつさと殺すとするか。まあ、その体は解剖いじくりまわすがな」

八神とレイヴェニアは、使い魔に乗ってアマイモンを追いかけ、とうとう追いついた。

「・・・、あなた達とは戦いたくありません。なぜか、めちゃくちゃに懐かしい嫌な感じがしますし。そもそも、魔術師とは戦いなれていません」

と、アマイモンは言ったが、そんなことはどうでもいいと言わんばかりに、炎をまとった贄殿遮那で斬りかかる八神。

後方ではレイヴェニアの的確な援護。

また、逆からは『魔女狩りの王』の攻撃があつた。

「うーん。この巨人はどうかになるんだけどな」

そう言いながら『魔女狩りの王』を殴るアマイモン。

『魔女狩りの王』は本来、再生の機能も付いているのだが、アマイモンの攻撃で再生する部位も残さず文字どおり消滅させられた。

「チツ。本格的に化け物かよ。まあ、贄殿遮那はそうはいかないぜ？」

「そうみたいなんですよ。人質もまったく効果ないみたいですし・・・。いつそ殺しましょうか？」

アマイモンは、八神とレイヴェニアにしえみという人質が効果ない事を悟ると殺そうかというそぶりを見せた。

「勝手にしてくれ。そいつがいなくても俺らには何ら支障はきたさない」

「うわー。人で無しですね。じゃあ、邪魔ですし崖に落としましょう」

八神の常軌を逸した応答に、アマイモンは人で無しでかたづけしえみをそばにあつた崖にほん投げた。

「ぎゃああああ！？調子に乗り過ぎて間違つて崖から落ちちゃってるー！？あ、そくだそくだ！おい！辰！さつさと姿を現せ！」
そう言いながら銃を撃つ砕。すると銃から辰が出てき、砕はそれに乗った。

「ふう。よかったよかった。ん？なんだあれ？」

助かったことで安心した砕がみた物は、先ほどアマイモンに落とされたしえみであった。

その時、砕の脳内にはある選択肢が思い浮かんだ。

？見捨てる

？助ける

？殺す

「・・・まあ、助けようかなー。一応教師だし」

少し考え助ける事にした砕。そして、しえみを辰の上に落ちるようにした。

別に衝撃を緩めようとかは考えていなかったため、ドンツというよ
うな衝撃音があたりに響いた。

「ハアハア。体力差がここにきて出たか」

「チツ。さすがに八候王は格が違うな」

八神とレイヴェニアは体の構造上、短期決戦に持ち込む必要があっ
た。

しかし、アマイモンはそんなに生易しい存在ではなかった。

「・・・じゃあ、もう最終手段に出るか・・・。もう二度と使
たくなかった奴だけだな。

「・・・ごめんな。レイヴェニア」

「いいよ。私は八神と同じ負荷を背負えてうれしかったしな」

八神とレイヴェニアは、一連のやり取りをし、八神は次に詠唱を始
めた。

「「其れは力」「力は秩序」「秩序は正義」「正義は悪」「悪は妖

” “妖は陰” “陰は陽” “陽は神” “神は偶像” “偶像は幻想” “

幻想は狐” “狐の王よ” “我等の身を喰らうならば” “我らに従え

” “姿を現せ” “金毛九尾の狐” “力を振え” “三国伝来金毛玉面九尾”

八神の詠唱のあとにあらわれたのは、目を疑うほど美しい毛並みを持ちながら、その凶暴性は隠せない。

日本史では化け物から神へ、神から妖怪になった妖狐、最強にして最凶、最高にして最悪の存在。

その姿を見た瞬間、先ほどまで余裕とまで言わなくても勝てると確信していたアマイモンの顔がこわばった。

その姿を見た瞬間、遠くから闘いを観戦していたメフィストが驚き、立ち上がった。

その姿を見た瞬間、碎は歓喜に身を震わせていた。

『・・・また性懲りも呼びだしたのか？喰らうぞ』

呼び出されたことに、いささか苛立ちを見せる九尾の妖狐。

「お前の気持ちなんかどうでもいいんだ。俺に従え、白面金剛九尾の妖狐」

しかし、八神は臆すことなくきっぱりと従えと言い放った。

『・・・ク、ク』

「？、何だ？」

白面金剛九尾の妖狐の反応にまゆをひそめる八神。

『クハハハハ！！なんだ！？え？この私に従え？ハハハ！そんな事言ったのはお前が初めてだよ。いいねえ、いいぜ。お前の使い魔になつてやるよ！』

笑いだした、白面金剛九尾の妖狐。しかし、すんなりとあまりにもすんなりと従う事に了承した。

「き、聞いていない！！！？なんで、なんで、何でこんな所に、姉上が居るんだ！？」

たじろぐアマイモン。そして、彼は恐怖で身を震わせていた。

『クハハハ！！久しいなあ、弟よ！しかし、今も昔も私とお前は敵だ！喰らってやるよ』

しかし、白面金剛九尾の妖狐はそんなことお構いなしにアマイモンを喰らいに行った。

「兄上！？なぜ姉上がこんな所に！？聞いていない！姉上は殺生石になったはずじゃあ！？」

『クハハハ！貴様は一体、何百年前の話をしているんだ！おい、メフィストオオオ！こいつを喰らい終わって、主が回復したら今度はお前を喰らってやるうか！』

白面金剛九尾の妖狐に喰らわれながら、必死に逃げようとするアマイモン。

しかし、白面金剛九尾の妖狐はそれを許さなかった。だが、八神を呼び出している八神は血を吐きながら倒れていた。

「ハアハア、レイヴェニア大丈夫か？」

「八神？私は大丈夫だ。それより八神の方が・・・」

二人の体には11年間もの長きにわたって白面金剛九部の妖狐の力があつた。それが一気に抜けたものだから二人の体は驚き、対応できていなかったのだ。しかも、あれだけの大妖怪。八神の精神はもう気を失う直前と言っても刺し違えがなかった。

「おい！？八神！？レイヴェニア！？大丈夫か！」

そんな中、塾生たちが来た。九城と出雲は、あの日の地獄を思い出して一瞬放心状態になっていた。

「・・・そう見えるのか？だとしたら眼科に行け」

「お兄ちゃん！？しえみちゃんは！？それにそんな事言ってる場合じゃないでしょ！」

「アマイモンが崖にほん投げた。何心配するな。あんなのいようがいまいが戦力には何ら支障はきたさない」

いい加減にしろ!!!と誰かが怒鳴った。驚くことにそれは燐であった。

「お前らの事はあつちで聞いた！俺らじゃ考えられないような修羅場をかくぐつてきたことも聞いた！だからって、そんな簡単に身捨てるな!!!仲間だろうが!!!」

皆は眼を見開き驚いていた。そして同時にこう思った、ああ、やっぱり燐なんだ。と・・・。

「おい!?八神!大丈夫か!？」

レイヴェニアが叫んだ。八神はもう気を失っていた。おそらく燐の言葉を最後に気を失ったんだろう。

それと同時に白面金剛九尾の妖狐消えた。

「くそ!!!なんで、なんで!!!何で姉上が!!!?」

怒りと恐怖で辺り一帯を破壊しつくすアイモン。

それに燐は、八神から渡された何かを握っていた。

八神から渡されたものは拘束具を解く鍵。ただし、これを解くと同時に悪魔の力が一気に戻る。

いままで、少しづつ放出していたからよかったものだが一気に、自我を保てる自信が燐には会った訳ではない。

しかし、それでも、仲間を守ろうと、拘束具に鍵をさし、燐は倶利伽羅を抜き放った。

「グがあッアアアアアアア!!!」

一瞬だった。一瞬で自我を失いアイモンに飛びかかる燐。

青い炎を撒き散らしながらとびかかる燐。

そんな中、砕と雪男が合流し、シユラは二体の悪魔の攻撃の余波を防いでいた。

「黙れ!!!!!!」

アマイモンは力の制限など考えずに、一体の悪魔を殺そうとした。もうそこにあつたのは、力により破壊だけであつた。

「やっとだ！ やつとこの日が来た！！！ ようやくこの二人を手術できる！ ようやくだ！ ようやく！」

砕は後ろで闘っている物など気にせず、八神とレイヴェニアをおんぶし、森から脱出するように指令を出した。

「しえみさん！？ しえみさんはどうしたんですか！？ なんで、肋骨とかが複雑骨折を・・・、聞いているんですか！？」

雪男は合流してすぐにしえみの異変にきず手当をしたが、砕は興味ないと言わんばかりに森から立ち去ろうとした。

「チツ。 そんな奴はどうでもいい。 それよりこの二人だ。 この二人の方が大事だ。 そんな奴はどつかそこら辺でくたばらせとけ」

砕は基本的に息子と娘（義理も）しか見ていない。 そんな人格の持ち主なのだ。

そして今、息子と義理の娘は血を吐いて気を失っている。 もう生徒なんかはどうでもよくなっているのだ。

「グがあアアアア！！！！」

そんな中、燐はアマイモンに圧倒的な力で圧倒していた。

「第一の質問ですが、しえみさんは私が背負います。 それよりこの森からの脱出が先です。 早くしないと私達が死んでしまいます」

サーシャは悪魔の力の恐ろしさを嫌というほど知っていた。 その力は人を殺せることもだ。

「くそ！！！ 何でもいつもこいつも！！！ 殺してやる！！！！」

「グルウウウウウウウウ！！！！」

アマイモンと燐の闘いはもうすでに戦争であつた。 それほどの力を

誇る悪魔だったのだ。

しかし、そんな中

「ハイハイ。ボク達　そこまです。これ以上は私の学園がケシズ
ミになる。今日のお遊戯はこれにて終了」
たった二人で戦争を起こすほどの力の持ち主を止めたのはメフィス
ト。

そして、彼らの兄であった。

やさしい事（後書き）

神 「また、別の作品書きはじめたみたいだね。それに私も出てたし」

作者「いいじゃん。うう、何か一つに集中できない」

神 「はあ、では今回は神木九城を紹介するZ E」

神木 九城

性別：女

職業：中学生

所属：神木家本家

神木家の次期頭首候補。

嘘と真実を織り交ぜて惑わす戦い方を好むため、知識の少ない者には極端に弱い。

学校では友達がいっぱい居る。

虫が嫌い。でも亀のペットを飼っているらしい。

自称、破綻者。いわゆる痛い子。

作者「という事にしよう」

神 「最近空気になってきてるよね。彼女」

作者「・・・そう言えば、何で彼女は八神ほど強くないの？」

神 「前世の可能性の差だね。八神君がいれば、世界は良くも悪くも二丁三〇年の進歩を見せるよ。九城ちゃんはそれほどの可能性がなかったんだよ。まあ、常軌を逸してたけど」

作者「では、最後に」

「誤字脱字の報告、感想お待ちしております」

賭け（前書き）

不純「えっと、漫画、アニメの賭けのあとかたもありません」

神「作者の文才のなさが招いた結果です。みんな！ザツケンなど叫んでもいいよ！」

不純「それはともかく、今回もしえみの扱いが酷くなっております。

あと、アーサーの扱いもそこそこ酷いです」

不純と神「」では、本文です！」「」

賭け

「空が白んできたな…。さあ二人とも、そろそろお家へ帰る時間だ」
空に浮かぶ道化師、メフィスト。その両腕には二つの悪魔がいた。

「兄上！今回は兄上の筋書きに沿えば好きに遊んでいいと、約束してくださったではないですか！！」

「地震を使うなど言っただはだぞ。それに、お前は解ってるんじゃないか？この末の弟との圧倒的な力量差をブングル！？」

「アマイモンはメフィストの顔をぶん殴り燐を殺しに行った。」

「ボクはまだ負けていない！！！」

もはや己の存在意義を固定するためだろう。先ほど白面金剛九尾の妖狐に手痛い敗北をしたばかりなのだからそれは当たり前なのかもしれない。

「アツハツハツハ…！ウ〜ン！聞き分けのない弟だ」
鼻血を出しながら立ち上がるメフィスト。

「アインス ツヴァイ ドライ！！お菓子の鳩時計！！！！」
クイヘンスクッククスウァー

帽子から、その名の通りの巨大な鳩時計を出したメフィスト。

「兄上エー！！」

「アダラカダブラ」

鳩時計の鳩はアマイモンを食べメフィストの言葉と同時にボンツと言っ効果音を立て消えた。

「さて、と。行きましようか？奥村くん。おや？」

「グルグルグル…グルオオッ」

メフィストの言葉など聞かずに、アマイモンが消えたことも知らずに、炎を出す燐という名の悪魔。

「やれやれ、世話の焼ける弟共だ」

「砕さん！？貴女！一体何を考えているんですか！？たしかに八神さんとレイヴェニアさんも重傷です！しかし、今はしえみさんの方が重症ですよ！なのにどうしてその二人を優先するんですか！」

「そんな屑はどうでも言いにかまってるんだろ。さつき塾生の餓鬼どもに聞いたぞ。勝手に寄生虫に寄生されこの二人を追い込んだとな場所は変わりここは正十字学園の塔の一つ。そこで砕と雪男が言い争っていた。

雪男は砕にしえみの手術を頼んだ。しえみの今の状態は肺に折れたあばら骨が突き刺さっておりとても危険な状態であった。

しかし、砕はそんなしえみを蹴り飛ばし、二人の息子と義理の娘の手術を優先した。

「おい、雪男。確かにお前の言う事はもっともだ。だがここは我慢しろ」

「な！？シユラさんまで何を言ってるんですか！？」

シユラの言葉に怒鳴り返す雪男。

「考えてみる！今ここで無理やり砕にしえみの手術をさせてみる！あいつは絶対に失敗する！ズタズタに体を刻み、ぐちゃぐちゃに体をいじり、それでも生きている状態をつくりだす。そうなんてもいいのか！」

「正解。解つたらさっさと手術をさせてもらうぞ」

シユラの言葉が終わると同時に、砕は手術室に入ろうとした。

「おい。砕。手術はしなくてもいいぞ。三賢者の命で貴様ら^{タレント}を捕まえる」

「おい。アーサー。ブツ殺されたいか」

手術室のある塔の扉の前にはアーサー率いる^{エクソシスト}被魔師達が立っており、

行く手を塞いでいた。

その光景に碎は凄まじい殺気を出していた。

「『その矢はなーに？』 『恋人を射抜き』 『必ず当たる矢は』 『病をもたらず矢はなーに？』」

「遮那樣から、碎様から離れる！この偽善者どもが！」

しかし、そんななか天から無数の弾丸が降ってきて、アーサー達に命中した。辛うじて急所は外したものの皆がせき込んでいた。

そんななか、石の剣をもった給仕姿の女性。いや、多くの人が被^{エクソン}魔^{スト}師に攻撃をした。

「く！？この、汚れた魔術師どもが！！！」

「んなことどうだっついていいんだよ。碎様、遮那樣を早く手術してください。この者たちは我等と『decem』がどうにかします！」

アーサーが怒鳴ったが、何の効果も無く給仕服の女性は碎に先を行かせた。

「ぎやははは。何なんだ、こいつらの聖骸布は！？脆い脆い脆すぎんだろ！」

塾生たちと同じ年ぐらいの、言葉遣いが荒々しく、髪の毛を銀に染めた白人の男の子が言った。

「『呪い崩し』、少しは品性という物をですね？」

塾生たちと同じ年ぐらいの、貴族みtainな白人の女の子が言った。

「ああ！？『救護の真正』よお。まさかこいつらまで救護するとか言うんじゃねえよなあ！？」

「まさか。こいつらは一カ月ほど処刑塔^{ロンドン}行きです」

そんな二人に、混じって背の小さいシャルがこう言い放った。

「死などには逃がさすな。これは命令だ」

彼女は凄まじい殺気を放ちながら命令をした。

「シャルよお！大賛成だ！」

「ええ、大賛成です」
そして彼らは被魔師エクソシストに攻撃をしに行った。

「・・・、あなた達は、贄殿家は、私を恨んでないの？この二人にこんな負荷を背負わせた私を、恨んでないの？」

碎は給仕服の女性に聞いた。

「いえ。全く恨んでおりません。むしろ、あなた様は遮那樣とレイヴェニア様を救ってくださいました。

あれが最善の手でした。それに、あなた様は先代の頭首が愛された唯一の御方。

恨むどころか感謝さえしたいほどです。あのときはご無礼を。お許しください」

給仕服の女性は碎に頭を下げた。それに碎は、涙を流し

「ごめんなさい。私の方こそ」

「いえ、それより早くこの二人の手術をお願いします。話はそのあとで・・・」

碎は給仕服の女性にせかさされ、二人を背負い走って塔に入っていた。

それを止めようとする被魔師エクソシスト。しかし

「これ以上は進ません！『炎の剣』よ。我に力を」

『良かるう。頭首を守る。それが契約だ』

給仕服の女性は剣を掲げ、剣は答えた。

「く、『炎の剣』だと！？貴様！なぜそのような剣を！」

「アーサー！お前はここで死ぬ！かつて、アーサー王を殺した剣でな！」

給仕服の女性とアーサーの凄まじい鏢迫り合いが始まった。

もうこの時には、『decem』の手によって被魔師エクソシストの大半が、廃人となっていた。

「す、凄い」

そんな戦いを見ていた勝呂が呟いた。

「凄いなんてもんじゃないですよ。坊」

たしかに、凄いの言葉で片付けるには言葉が足りなさすぎる光景であった。

「きゃははは。ん？貴方達、八神とレイヴェニアの生贄？」

そんな中、一人の中性的な少年？が塾生たちに近づいて来て話しかけた。

「・・・、私は従妹よ。九城は八神の妹」

「きゃははは。そつかそつか。じゃあ、君達も違うつばいね。えーと、そこに転がってるゴミはなに？」

出雲の言葉に笑いながら適当に納得したようで、次にしえみを指差した。

「っ！？忘れていました・・・」

雪男が思い出したように、しえみをおんぶし直そうとしたが、その時気づいた。

あそこで戦っている奴ら、しえみを全く問題しいしていない。いや、^{エクスピスト}被魔師達は、攻撃が当たらないように戦っているが、魔術師たちには、そのような配慮が見えない。

八神とレイヴェニアを救う事のみを考え、その他の犠牲などどうでもいようにさえ見える。

いや、実際そうなのだろう。

彼らにとってはしえみなどというのは、そこら辺に転がっている石ころ以下の存在でしかないのだ。

そんな、ことを考えながらひとまずしえみを連れ非難する雪男。

「な、なにをしているんですか！？エンジェル！」

「グ、三賢者！？」^{グリコロ}

そんな戦場の中、^{グリコロ}三賢者の一人。カスパールが来て驚きで声をあげ

ていた。

「私達は、丁重にと言ったはずですよ！もし、いやだと言った場合は我らに知らせることも言ったはずですが！」

「し、しかし、彼らはいきなり武力に……」

「……、下手な嘘は言わないでください。あの碎は息子と娘の危機以外では全くと言っていいほどに、武力に頼らない。贄殿家も頭首の危機と命令以外で動くことはまずない。『decem』はその力そのものを恨んでいるような者たちです。いきなり武力行使など出るはずないでしょう！」

三賢者^{クリコリ}は伊達に正十字騎士團の最高顧問をやっているわけではないようだ。

カスパールはアーサーを叱りつけ、次に贄殿家と『decem』の方へ行き。

「このたびのご無礼お許しください。この者たちの処罰はしっかりと今日中に済ませます。」

八神さまとレイヴェニア様の治療も我らが全力を持って支援いたします。

本当にすみませんでした」
と頭を下げた。

アーサーなどは下手にプライドを持っているため、このように頭を下げようとはしなかったが三賢者^{クリコリ}が頭を下げたため、自分たちも頭を下げた。

「……、そいつらの処罰は私達が決めてもよろしいですか？

あと、カスパール。頭をあげてください。今回の件は貴女は悪くない」

と、給仕服の女性が言ったため、カスパールとアーサーたちも頭を上げようとしたが、

「ああ！？誰が気さらに頭をあげていいいった！？」

と、いきなり給仕服の女性が豹変し、アーサーの頭を踏みじつた。『decem』の面々は、それぞれアーサーの部下たちを簡単に拷問した。

「・・・、いいでしょう。彼らの処罰についてはあなた達にお任せします。しかし、彼らとて、腐っていようが大切な戦力です。廃人にはほしないでください。お願いします」

「・・・、解った。精々がアイアン・メイデンで済ましといてやる」
アイアン・メイデン。知っている人も多いたろうが、拷問器具の一つで近年では独裁国家などで使われていた代物だ。

それともかく、カスパールもそのことには了承し、アーサー達を置いて帰っていこうとした。

「おや。お久しぶりですね。カスパール」

「メフィスト卿。お久しぶりです。・・・、その少年は悪魔の力のまれているのですか？」

ボンツ！とメフィストが現れ、後ろには燐がいまだに暴れていた。サーシャはどこことなくつらそうにしていたのに、勝呂達が気付き声をかけた。

「おい、大丈夫か？」

「第一の解答ですが、大丈夫とは言えません。燐は魔神サタンの息子です。私はおそらくその力にあてられて、私の力がある程度、暴走しているのかもしれない」

と、少し自嘲気味に笑いながら言うサーシャ。それを聞くしかない塾生たち。

「ええ。まあ、もうすぐでロシア成教に行きますからどうにかなるでしょう。あそこは悪魔の子の管理、管轄に至っては世界最高峰ですしね。それに剣を閉じればいいわけです」

といいながら、倶梨伽羅を鞘に納めるメフィスト。

「ああ、そうでした。メフィスト、今回の白面金剛九尾の妖狐の件

について聞きたいことが」

思い出したように用件を切り出すカスパール。

ちなみに、この時点でアーサーたちはイギリスに拷問を受けに行つた。

「ああ、それでしたら姉上、本人に聞いた方が早いですよ」

「治療が終わるまで、あとどれくらいですか？」

「そうですね。先ほど『救護の真正』が加わりましたし、一、二時間ほどではないですか？」

驚くべきスピードを言うメフィスト。それにカスパールは驚くことも無く、そうですねと言ひ、待つことにした。

二時間後

「手術は終わったわ。で、さっき話は聞いたけど。アーサー、ハラテ聖騎士向いてないんじゃない？」

「ええ、少し頭が足りない所もありますが実力がありますし。それはともかく、二人に話を聞きたいのですが？」

などと、世間話をする砕とカスパール。しえみはとうとう、普通の病院に雪男とシュラが連れて行つた。

「無理よ。あの二人は少なくともあと二日は絶対安静。あ、でも、

白面金剛九尾の妖狐は勝手に出てきてるわよ」

「は？」

砕の言葉に思わず声が出るメフィストとカスパール。

そして、砕の足元には小さな九尾の妖狐がいた。

『まあ、自力でできるとなると、この体が限界か』

「じ、自力でたのですか？姉上？」

自力で憑依もせずに出る。これはとんでもなく複雑で難しい事であった。

しかも力が大きくなるのと比例してそれが難しくなる。また、それ

を行うためにはかなりの知能が必要とされる。

悪魔にとって知能と力は基本的に比例して大きくなる。この矛盾したことを、この白面金剛九尾の妖狐はやすやすと行ったのだ。

『で、何のようだ？300年くらい前の三賢者タリヒトよりはマシそうだな』
「え、あ、はい。いえ、貴女は人間を襲いそうにも無いので安心しました」

白面金剛九尾の妖狐は臆すことなく三賢者タリヒトに、用件を聞き、カスパールは白面金剛九尾の妖狐の友好的な態度に安心したように答えた。
『クハハハ。人間襲つても一銭の得にもなりやしない。あんな事してんのは、己の力に自信がない奴らだけだ。まあ、父上は己におきた混線マゼが関係しているんだろっかな』

「そう、ですか。解りました。私はこれで引き取ります」

そういって、バチカンに帰るカスパール。メフィストはまた今度、と言ってお辞儀をしていた。

賭け（後書き）

神 「いや、酷い。酷過ぎる。いろいろ酷い」

不純 「解ってるよ。でもどこをどう直せばいいのかよく解んねーんだ」

神 「それはともかく、今回は白面金剛九尾の妖狐を紹介するZ E」

白面金剛九尾の妖狐

性別：女（厳密には無い）

職業：使い魔もどき

所属：贄殿家

八候王^{パール}ではないが、その力はアマイモンを圧倒することから八候王^{パール}を凌ぐものと思われる。

笑いは『クハハハ』。

神木家で大暴れした理由は、八神とレイヴェニアを殺そうとしている奴がいたため二人を守るために大暴れした。途中から自我を失いただたんに暴れるだけになってしまったが……。

かなりの時間を物質界^{アッシャー}で過ごしたため限りなく心に近いものを持っている。

不純 「という事にしました」

神 「実は白面金剛九尾の妖狐は一時期、神様になったんだよね。今じゃあ日本三大悪妖になってるけど」

不純 「今回は『decem』についても紹介するぜ」

神 「うわー。本文の酷さをごまかすつもりだ」

『decem』

別名：十番目の月

定員：9名

イギリス清教が管理する魔術学校の最優秀の者たちのクラス。

だったが、今では『必要悪の教会』ネセザリウス内でも、かなりの優秀な部隊と
なってしまうている。（要は人殺しのプロ）

実は10人目がいるが、ただいま逃亡中。

不純「という事にしといた。十人目については不浄王へんで出すよ」

神「・・・、あ！そっか、もうすぐそこに突入だね」

不純「あと、『呪い崩し』と『救護の真正』と中性的な少年と給仕
服の女性の名前を募集します」

神「考えてなかったのかよ!？」

不純「すみません。そう言うの苦手なもので・・・。あ、もちろん
一人でもいいですよ」

神「フザケルナ。お前、ふざけていないか？」

不純「ふざけていません。ちゃんと考えましたがなかなか思い浮か
ばなかっただけです」

神「はあ、では最後に」

「誤字脱字の報告、感想お待ちしております。キャラクターの名
前も募集します」

組織構成図（前書き）

不純「不浄王編に突入するんで、しばらくグダグダに進みます」

神「という言いわけ。つーか、あと何話で不浄王編に突入するのさ」

不純「えーと、順調に進めば、あと三話？」

神「どんだけあとだよ！？しかも疑問形!？」

不純「それは兎も角、最近ほかの青エク作者の皆様が投稿してくれなくて悲しいのです」

神「あー。ほら、あんたみたいに宿題そっちのけでネットせずに社会生活営んでんじゃない？」

不純「うう!？ま、まあ、それは兎も角今回はお話では無く、組織とかの簡単な自己解釈および独自設定の説明です」

不純と神「」では、本文です「」

組織構成図

日本祓魔師四大家

神木家

日本祓魔師四大家の一つ

日本の神社の8割を直接管理している。ほかの2割も間接的に管理している。

その構成人数、規模ともに日本祓魔師四大家の中では圧倒的である。

世界的には手騎士テイマーの名門として見られている。

頭首は大婆様。次期頭首候補は出雲、九城。

頭首は白虎を使役し続けている。

みょうおうだらにしゅう
明王陀羅尼宗

日本祓魔師四大家の一つ

魔を祓う事に特化した仏教系宗派。

ただし、今はかなり没落してしまっている。

没落前から、ほかの日本祓魔師四大家の中では集団戦闘においては最弱の存在であった。

その代わり個々の能力は高い。

頭首は勝呂達摩。次期頭首候補は、他の四大家からは勝呂竜士とみられている。

頭首は伽樓羅を使役し続けている。（周りからは朱雀とみられている）

余談だが、神木家、贄殿家には多額の借金をしており頭が上がりな
い。

ほか二つ。スミマセンまだ考えていません。

十字教三大宗派

ローマ正教

正十字騎士團の被魔師はだいたいがここに属している。質はほか二つと比べたらさほど良くは無い。魔術師も多く属しているが対人要員は非常に少ない。教皇はマタイ「リース。使徒は7億人いる。実質上のトップはフィアンマ。

イギリス清教

対魔術師、対被魔師に特化している。他には拷問にも特化しており、その手段は不明だがアーサーを廃人にすることはできるらしい。

純粋な被魔師は非常識に少ない。だいたいが魔術師。有名な所では第零聖堂区『必要悪の教会』ネセザリウスなどがある。

悪魔払いもそこそこはするが、悪魔にとってはイギリスなんか危険地帯であるため寄り付きもしない。魔女狩りなどの特権はここにある。もしする場合はここに申請をする必要がある。

アイクビシヨツフ最高司教はローラ「スチュアート。

ロシア成教

悪魔の子の多くがここに所属している。

悪魔の力の観測、制御に特化しており、燐の力にはかなりの興味を示されている。

悪魔払いでは無く、悪魔狩りをしている。

また、ゴースト霊には問答無用で潰そうとする傾向がみられる。

超常現象を観測するためだけに、超常現象が起きた建物そのものの完璧な複製を立てたりもする。

総大主教のクランスⅡRⅡツァールスキー。

その他

贄殿家

魔術師の一門。もしくは魔術結社ともみられている。

炎に関する魔術が恐ろしく強く、また生贄を使った魔術についても驚異的に強い。

『不必要悪』『殺戮無双』などと言った二つ名がある。

目的の為なら手段を選ばない事で有名で、

「その過程で築かれた屍の数を聞くとプロの魔術師ですら絶句する」という逸話がある。

ただしそのような逸話より、その圧倒的な実力より、その驚異的な頭首への忠誠心の方が恐れられている。

実際その忠誠心で戦争を起こしたことも多々ある。

神木家には、いまだに強い恨みを持っている。

明け色の陽射しとの関係は友好的である。とゆうか、トップ同士が結婚（もはや確定事項）している。

金銭的にはイギリスで日本料理店（高級店からファーストフード店までなんでもあり）などを経営しているのでかなり裕福である。

頭首は贄殿遮那八神。

明け色の陽射し

黄金系の魔術結社。

目的の為なら手段を選ばない事で有名で、

「その過程で築かれた屍の数を聞くとプロの魔術師ですら絶句する」という逸話がある。

神木家には、いまだに強い恨みを持っている。

魔術だけではなく、科学にも詳しくボスのレイヴェニアは自作パソコンを作れる。

贄殿家との関係は友好的である。とゆうか、トップ同士が結婚（もはや確定事項）している。

ボスはレイヴェニア「バードウェイ」。

『decem』

『必要悪の教会』ネセサリウス内の部隊。

なのだが、全員が全員、裏切ることを前提に入っているため別口の窓口を持っている。

元は魔術学校での優秀な生徒を集めた定員9名のクラスだった。

集めた理由は、天才は天才同士いた方が効率が言いになっている、である。

10人目がいるがその10人目がほかの『decem』のメンバーの鎖となっている。

全員が『プロの魔術師が千人がかりでもまだ甘い』と言われるほど強い。

まとめ役は贄殿遮那八神。

正十字学園

基本的には中立の立場にいる。

書類上は正十字騎士團に属しているが、トップがトップだけに警戒されている。

トップはメフィスト・フェレス。

組織構成図（後書き）

神 「なあ、お前って何がやりたいの？」

不純 「現実逃避！」

神 「・・・、今回はシャルを紹介すれZ E」

不純 「あ！スルーしやがった！でもまあ、シャルの紹介です」

シャル

性別：女

職業：魔術師

使用魔術：十字教に汚染されたギリシャ神話。特にアルテミスの矢、つまりは銀の矢を使用する。

所属：イギリス清教『必要悪の教会』ネセサリウス内『decem』の副リーダー的な存在。

八神との仲は悪いように見えて実はいい。

不自然なほど自然に狙撃銃を背中に背負って歩く。

髪の毛、眼の色ともに金色である。

服装は学生服。理由は動きやすいから。

ヘッドフォンをつけているが、聴いてる音楽はアニソンばかりである。

名字は本人は名乗らない。そして、『decem』の誰も興味がないため知らない。

八神、レイヴエニア同様、人間らしい感情が乏しい。

不純「という事にした。いやー、シャルって名も、実は銃のなんかがいいなって思って探していたらS & amp; W チーフスペシャル

つてのがあつてスペシャルのシャルから取ったの」

神 「・・・、みんな！本当にザッケンなつて感想に書いてもいいよ！こいつ駄目だ！」

不純「あー、登場人物の名前はまだ応募しております。感想の一言の欄に書いてください」

神 「では最後に」

不純と神「「誤字脱字の報告、感想、登場人物の名前、お待ちしております！」」

なんでもない夏休みの一日（前書き）

不純「今回は九城中心です」

神「あとがきの欄に超重大事項を発表するよう」

不純と神「」では、本文です！」」

なんでもない夏休みの一日

これはある日、九城が転校先でできた友達を家に連れて来た日の物語。

「…、九城ちゃん家って大きいんだね」

九城の友達の一人が九城の家を見て思わず声をあげた。

「お母さんの趣味」

それに九城は目をそらしながら答えた。

「ま、まあ、家に入ろうよ」

「うん。そうだね」

そう言いながら九城の家に入っていく友達たち。

ちなみに九城が連れてきた友達は一人だったりする。

「ん？まあ、九城ちゃんが友達連れてくるなんてそんな珍しくも無いわねー」

玄関には言ったらいきなり、巫女装束を着こみ、髪の毛の先つちよを染め、見た目が高校生ぐらいの謎の人物がいた。

九城の友達は、九城に似ているし九城の姉かなと思っていたが…

「お母さん。せめて、友達が来るときだけでもまともな服着て」

お母さんだった。それは兎も角、泣きながら普通の服着てという九城に九城のお母さんは

「んー？じゃあ、九城ちゃんをギュツとさせてくれたらいいわよー」

…、その巫女装束ふくのままでもいいよ。もう」

九城の友達が解った事がある。それは久城の母親はただの変態だという事だった。

「ごめんね。いきなり変な人見せちゃって。じゃあ、まず私の部屋

いって宿題しようか」

「うん。そうだ…、あの人たち誰？」

九城が自分の部屋に案内しようとしている時に、一組の男女とあった。

「あ、お兄ちゃん、レイヴェニアちゃん。調子はどう？」

「ああ、まあ、そこそこだ。今イギリスに帰る準備の真っ最中だがな」

そう言いながら、八神はレイヴェニアを連れてどこかにいって行った。

「かつこよかったね、九城ちゃんのお兄さん。隣にいた人って彼女？」

「いいや、お兄ちゃんの許婚。かつこいいか…、まあ、見た目で言ったらそれが妥当かな？」

九城の許婚という台詞に九城の友達は驚きながら、九城の部屋に到着する二人。

「ほ、本当に家広いんだね…」

「いや、お母さんの趣味で、迷路みたいに複雑な作りにしただけだよ。」

この地震国家でなにしてんだか…」

そう言いながらも夏休みの宿題をする二人。

だが途中で二人とも解らない所に当たりしばらく考えていた。

「お兄ちゃんに聞く？お兄ちゃん頭いいし…」

「え？そうだったの？…あ、いや、頭が悪いつて思ってたわけじゃなくてね？」

「いいよ。まあ、イギリスでかなり暮らしていたから、英語は滅茶苦茶できるよ」

そう言つて八神を探しに行く九城。それを追うようにして後につい

ていく久城の友達。

「ん？宿題を教えてほしい？」

九城達は迷路のような家でようやく八神を見つけ用件を言い、八神はそれに少し考えた。

「…、いや良いんだけどさ。なに教えればいいの？」

「英語。お兄ちゃんイギリスで育ったんだから英語得意でしょ？」

そうして、八神が二人に英語を教えることにしたが…（ちなみにちやんとレイヴエニアが横にいる）

「（よ、読めねー）」

読めなかったのだ。いや、八神の字が汚いとかではなく逆にきれいなのだろうか、

英語を筆記体で書かれたため読めなかったのだ。

おそらく、中身はとんでもなく充実していて、わかりやすいのだろうが読めなきゃへったくれも何もない。

しかも、八神は書くやいなやレイヴエニアとともにどこかに行った。

そして、それをドアの向こうから見ると人物が一人。

「（うーん。こういうときって、どうして親は聞く前から戦力外通知受けるんだろ？）」

そのようなことを思いながらドアの隙間から見ている者が一人いた。

「な、何とか終わったね。九城ちゃん」

「うん。お兄ちゃんめ、今度から活字体で書いてもらおうかな？」
などといいながらも今日する分の宿題を終わらせた二人。

それから二人は、地球環境を考え、適切な温度に設定された冷房の効いた部屋でゲームなどをし、貴重な夏休みの一日が終わっていった。

なんでもない夏休みの一日（後書き）

不純「では超重大事項の発表ー！！！」

神「パフパフー！どんがらがっシャーン！！！」

不純「効果音が何か違うような気がするけど超重大事項を発表する！」

神「クソ駄目な作者の人生の中でも50番目ぐらい大切なことだ！ではどうぞ！」

不純「次話で何と！『青の被魔師』紫眼の見つめるモノ』の主人公、五十嵐要が登場します！」

神「次話だけのゲスト出演だけど、邪餽 珀磨さまの許可はちゃんととりました！」

不純と神「では、次話をお楽しみに！」

不純「要の事をうまく表せるかどうかの自信はありませんが……」

「誤字脱字の報告、感想、キャラクターの名前、お待ちしております」

嵐の王の娘と狐の王の主（前書き）

神 「イエー！青の被魔師！紫眼が見つめるモノの要がとうとうこの話に登場するぜ！」

不純 「皆さん！作者のクソ駄文な作品なんで、たいして待っていないでしょうがお待ちしました！」

不純と神 「では本文です！」

嵐の王の娘と狐の王の主

これは、八神が初めて被魔師として仕事をしたときの物語である。

「…、たしか、ここに協力者がいるって聞いたんだが。あー、俺とレイヴェニアを離れさせやがって。あのピエロ殺す」

などと物騒なことを言っているのは、八神。彼は本来の名をしようも無い理由で嫌っているため、ここでは神木八神と名乗っている。彼は今、被魔師のパートナーと待ち合わせ場所の山の麓にいた。そして、一分とたたず、待ち合わせ時間ぴったしに一人の人物が来た。

「えーと、こういう場合は待った？って言うべきなのかな？」

「いや、時間ちようどだ。むしろ俺が時間を間違えたと言った方が正しい」

八神と待ち合わせをしていたのは五十嵐要。ある特殊な称号をもっており、その称号は、今のところたった二国家でしか認められない変わり種であった。

砕曰く、特例中の特例との事だ。

そんな要に八神はある質問をした。

「…、一つ聞いていいか？お前は本当に悪魔の落胤か？」

八神はメフィストからある情報を聞いていた。それは要が悪魔の落胤だという事実。

しかし、八神はそんなことはどうでもいい事だと思っていた。

実力至上主義の『必要悪の教会』^{ネセサリウス}の戦闘要員らしいと言えらるのだろうが…。

だが、八神が要に思わず聞いてしまったのは、要が悪魔の落胤らし

くなさすぎるのだ。

「…、よく言われるよ。うんそうだよ、僕は嵐の王セトの娘だ」

苦笑いしながら答える要。八神は要の最後の言葉で納得したように、ああ、そうか。と言った。

そしてこう続けた。

「嵐の王セトか。いや、噂程度には効いた事があるぞ。なんでも有史以前から物質界アッシャーにいる悪魔で、限りなく心に近いプログラムを持つていて、人間との共存を望む数少ない悪魔で、何より、例外的に自分の子を愛した悪魔だとな」

八神の言葉にもう苦笑いを浮かべるしかない要。話には聞いていたがまさかここまでだとは思わなかったのだろう。

八神はそんなことはどうでもいいと言わんばかりに、今回の任務について話した。

「今回の任務は山奥の連絡が途絶えた村の現状確認だ」

八神の言葉にやはりプロなのだろう要はスイッチを切り替えたがごとく真剣な面持ちになった。

「敵はやはり悪魔なの？」

「いや、解らないんだ」

ん？と八神の解らないという言葉に首をかしげる要。

それもそのはずだ。普通、エクソシスト祓魔師は解らない程度では動かない。

否、動けないのだ。その数の少なさゆえの弊害だろう。しかも、ここにいる二人は、多少の問題こそあれその実力的には一流と言っても差し支えない者たちであった。

そんな、悪魔が原因かどうかも解らないモノに何で招集されたのが話からなかったのだ。

「そうなるよな。だが面倒なのは、そこに踏み込んだ警察の最後の連絡なんだ」

「最後の連絡ですか…」

最後の連絡。それはおそらくもうその警察が何らかの理由でこの世にはいない事を露わしていた。

八神はがさごそとテープレコーダーを取り出し、カチャツとスイッチを押した。

ちなみに要は八神のテープレコーダーを見て古っ！？と思ったりなんかもした。

そんな古臭いテープレコーダーから聞こえてきたのは少しくぐもっているも人の声が聞こえてきた。

『増援をもとむ！あいつらは人間じゃない！あいつらはだ！！！』

ガチャツと言う音がしてテープレコーダーからザーという音しか聞こえなくなった。

「なるほど。これじゃあ、僕たちが収集されるのも仕方ありませんね。」

しかし、よりによって　とは…。これでは僕たち二人だけというのも納得ができません。

上の人たちはこれを真に受けていないんでしょう」「

「ああ、そう言う事だ。まあ、どちらかという^{……}と真に受けたくないんだろっうがな」

などと愚痴りながらも山に登る二人。ちなみに八神は使い魔に乗っていた。

今回の任務の内容は山奥の今はもう、人間の村としては廃村になっているのである人里の現状確認だ。

二人とも警察の話を真に受けていない。そもそも、そんな存在がいたらもう世界は終わっていないとおかしいのだ。

要はその存在の名前を言葉に出すこととさえいやだというような顔をし、

八神はそのおぞましさのあまり、名前でさえ言おうとしなかった。

そして目的の山奥についた二人は絶句した。
村全体が屍人^{ゾンビ}となっていたのだ。

二人は内心舌打ちをする。村人だった悪魔に対してではなく、今回敵対する悪魔では無い者の可能性に対してだ。

「屍人^{ゾンビ}は腐の王の眷属だ。生みだした奴は違うとはいえ、所詮は下級から中級の悪魔。」

それになってからそんなに日がたっていないはず、下級とみていいだろう。さっさと始末するぞ」

「そうだね。こんな所に一刻も早く出たいですし！」

しかし、どうしてあいつがこんな事したんでしょう？伝承が正しければ彼らは温厚なはず！」

そんなことを愚痴りながらも使い魔で的確に、屍人^{ゾンビ}を被っていく二人。

八神は天孤を三体同時召喚し、狐火を出させ応戦していた。

要はどちらかという八神の援護と言った方が正しいのだろう。

だがしかし、その援護は相性的な問題によるものだった。

要の使役できる使い魔は、嵐の王の眷属に分類されるのだろうが、属性的には氣に分類されている。

魔の五大元素表では腐の王の眷属との相性は悪い。

実は要も要で九尾を使役で来ているのだが、八神の特殊な体質のせいで契約を解除されてはたまったもんじゃないため、要は鎌鼬で気流を操り狐火を強化していた。

自分が出て行くより、自分が九尾を出すより、こうした方が早いと解っているが故の行動だろう。

決して、前線に出ても足手まといにはならない。だがこうして援護する方が戦力としてはいいのだ。

「…、あいつがこうして凶暴になったのは、もしかしたら町の配置とかによるものかもな…」

「ああ、偶像崇拜でしたっけ？
ははは、じゃあ、町全体の配置としてかの有名なトウルゴヴィシユ
テを模しているとも？」
冗談じゃない。といいながらも屍人ゾンビの大半を被い、残った者たちも
もう戦闘は不可能な状態になっていた。

「そつだ。俺も詳しくは知らんがあんなのにあつたらおれらでも死
ぬぞ。

まあ、俺には備えはあるにはあるんだがな…」

「僕だつて会いたくはありませんよ。しかも、凶暴化したなら特に
ね」

二人は一刻も早く廃村から出ようとする。

もはや、あれが現存する可能性がある以上、魔術師、被魔師エクソシストでは対
処できない。

それこそ、神様殺しロンギヌスの槍でもない限り敵対も出来ないのだ。

だが、物事は上手くいかなかった。

廃村から出ようとすると二人の前に、青白い細身の男が現れた。屍人ゾンビ
では無い。間違いなくその元凶だ。

男はジロリと二人を見据え、襲つてきた。直線的な、単調な攻撃で
あつた。

「おいおいおい、おかしいぞ！？俺の今日の運勢は一位だったはず
だぞ！？」

「んな、根拠も無いちゃっちいいもんを魔術師が信じるからだ！
バカが！！！！」

二人は愚痴をこぼしながら、攻撃を避けた。そして、ダッシュで逃
げた。

ただし、廃村からはでなかった。出れなかったのだ。

二人ともそれなりの修羅場をかくぐつてきたため、あの元凶が何
の畏も無く現れるとは思えなかったのだ。

はつきり言つてただの思いすぎしなのだが……。

「ハアハア、ゲホッゲホッ。ああー、無理だわ。これ以上は俺の体質上無理だわ」

「ちよ、貴方どんだけ貧弱なんですか!？」

かなりの距離を走り、八神は息を乱しながら血を吐いていた。

要は息を乱す所か、汗一つかいていなかった。これが要が悪魔の落胤たるどころか……

「あーっと、まずはあの『カインの末裔』の凶暴化を止めないとなさつき町全体に狐たちを解き放つたから、もうすぐで戻ってくるだろう。」

戻って来しだい町の各ポイントを破壊していくぞ。それが終わったらいっつは、元に戻ってどっか行くはずだ。

ははは、まさか『カインの末裔』がこの世にいたなんてな。魔術学会に発表してもだれも信じんだろうがな」

「魔術用語はちんぷんかんぷんですけど、作戦はあなたにお任せします。」

ちなみにさつきは出しませんでした。僕には青鷲という使い魔がいます。

屍人ゾンビが着たら今度はこちらで迎撃します。数もそういないでしょうし」

二人は一連のやり取りをした後、しばらく動かずにいた。

八神は体力回復もあったが、最重要事項はメールだろう。真剣な面持ちでメールを打っていた。

その八神の姿を見た要は、おや?と思った。八神がメールを打っている事には無い。

無駄に緊張してもただ神経をすり減らすためだけだから、こういう場合ではリラックスも必要になったりもする。

証拠に要もアイフォンのアプリで遊んでいた所だ。

ただ要が不思議に思ったのは八神が使っている携帯端末にだ。

今のご時世、普通の被^{エカ}魔師は 아이폰、もしくはスマートフォンを使っている。

理由としてはそちらの方がいろいろ勝手がいいのだ。

しかし、八神は携帯電話を使っていた。しかもかなり古く、それこそ電話とメールをするためだけのようなかなり古い機種であった。とはいっても、かなり改造が施されているようで防水機能はついていた。

「八神さん？なんですかそのケータイは？」

「…、俺は機械類に弱いんだよ。いつもは魔術で連絡を取っているが相手が『カインの末裔』だ。

下手に魔術を使って覚えられたらもうおしまいだ。だからなれない機械類でレイヴェニアにメールを送っているんだ」

不機嫌そうに少し遅いスピードでメールを打つ八神。

八神の言葉に少し啞然とする要。

何でもそつなくこなすという噂があったのだがどうもかなり尾ひれがついていたようだ。

それから数分後に八神が放ったであろう狐たちが戻ってきた。

「これは…、管狐？」

「そうだ。しかし、よく解ったな。こいつはかなりマイナーなはずなんだが？」

「僕の…、物質界^{ゴツチ}の実家が陰陽師なんですよ」

今はもう違うんでしょうけど。と独り言のように続ける要。

しかし、そんなことは聞かずに廃村の地図に書き込みをする八神。どうやら、？印の所を破壊するようだ。

それを理解した要はすぐに自分の地図にも同じ書き込みをした。

「ふう、じゃあ、破壊活動を開始するぞ」

「あの…？アレの胸に棒を突き刺してもだめなんですか？それとも

太陽光を浴びせかけるとか？

ほかには大蒜とかも…？」

八神の破壊活動の前に駄目もどと言った感じで八神に聞く要。それに要さえ見ずに八神が答えた。

「それはアレの作りだしだした屍人ゾンビに有効な手段だ。

しかも殺せるわけじゃない。

屍人ゾンビの胸に杭を打つても、数十年単位で動きを封じれるだけだ。

大蒜はただの大嘘だ。

屍人ゾンビに、太陽光を浴びせかけた場合はそこそ有効だな。

そもそも、被魔師エクソシストでもない一般人が悪魔の事について解るはずもないだろう」

それもそうです。とやっぱりかといったふうのため息を吐く要。

そここうしている内に、八神が一番近くにある破壊ポイント（民家）を使い魔の一匹であるう九尾で木っ端みじんにした。

要もそれなりに近い破壊ポイント（公民館）を鎌鼬で真つ二つに切り裂いた。

攻撃が届く範囲の破壊ポイントをあらかじめ破壊した後、二人は移動した。

八神はたいして何も思っていないのか、顔色一つ変えずにいたが、要はあまりいい気持ちはしていないようで、少しいやそうな顔をしていた。

「八神さんはこんなことして何も思わないんですか？」

移動の最中、要が八神に聞いた。これと言って訳があったわけではない。

ただ、なんとなく聞いてみたのだ。

「…、お前は何か思うのか？」

八神は逆に要に聞き返した。そんな八神の目はどこか遠くを見つめており、

悲しみ、だなんて言葉では表せないほど暗く沈んでいた。

そんな八神の顔を見て、要はこう答えた。

「…解りません。僕は比較的人間に近い心を悪魔の心にも持っていません。」

でも、だからと言って、今ある、この気持ちなんなのかが解らないんです。

本当のものなのか、それともただのプログラムなのか…、昔はこれでかなり悩んでですよ？」

少し、無理をした笑い方をしながら要は答えた。

「そうか…、俺はガキの頃から人を殺してきた。」

だから、こういう破壊活動には鈍感になっているのかも…。

だとしたら、お前はよっぽど俺より人間だよ」

要の答えに八神は丁寧に答え、次の破壊ポイントを壊していった。

それからも二人は町の各ポイントを壊し、そして、最後のポイントを壊した。

途中、八神の言う『カインの末裔』に会う事も無く、順調に進んだ。そして、二人が村を出ようとしたその時、

「今回は、いろいろ迷惑をかけたな。…、名も知らぬ子どもたちいきなり後ろから声をかけられた。」

後ろを振り向いた二人が見た者は、先ほどあつた青白い細身の男だった。

「…、正気に戻ったんですか？」

「ああ、今回は助かった。お前は…、その雰囲気、セトの娘か？」

『カインの末裔』は、要の問いに答え、そして、要の親を言い当てた。

要はその事に少し驚いた。八神はいまだに警戒を解いてはいなかった。

「そう構えるな。…、ほう、お前は人間ではない魂をかなりの間内

封していたようだな。

まあ、そのせいでかなり体にガタがきているようだが……」
戦う意思はない、と改めは彼はいった。

「……戦う意思はないようだな。『カインの末裔』……いや、吸血^{バンバ}鬼^{イデア}」

八神は戦う意思が無いことを確認してもなを、多少緩めたとはいえ、警戒をやめず、とうとう彼の種族名を言った。

その事に吸血鬼^{バンバ}はやれやれと、肩を浮かした。

「その名は、あまり好かない。私の固有名詞は特にないが、せめて『バン君』とか『パイ君』とか読んでほしいものだ」

吸血鬼^{バンバ}の冗談に啞然とする八神と要。

一方、吸血鬼^{バンバ}は、うん？ここは笑うとこだろ？とでも言いたげな表情でいた。

「本当に戦う意思は無いようですよ、八神さん。ホント、これっぽっちも無いようです」

「そのようだな。警戒して悪かったな……、『カインの末裔』」

二人は警戒を解き、吸血鬼^{バンバ}に向き直ったが、もうそこにはなにもいなかった。

「……受けなかったことにいじけてどっかに言ったんでしょうか？」

「ありそいで怖いな。まあ、村を出るぞ。さっき、メールを見たら俺の嫁が待っているらしい」

八神の俺の嫁の台詞にも驚く要だが、八神の顔を見て別の気持ちが入り上った。

「なんだ。人間らしい顔も出来てるじゃないですか。八神さん」

そう、八神の笑顔を見て、ポツリとつぶやいた。

八神はそんなに嫁に会いたいのか、もうかなり先に進んでおり声など聞こえるはずもないのだが、

ちようどその時、八神が振り向きこう言った。

「おい、さつさと山を降りるぞー。今回の任務は村の状況確認、もうその事はすましてある。」

さつさと山降りて、報告して金もらって、どっかに飯でも食いに行
くぞ」

「…、はいはい。八神さんは上司なんですからおこってくださいよ
そういつて、二人は山を下りて行った。」

嵐の王の娘と狐の王の主（後書き）

神 「うう、邪餽 珀磨様。こんな駄目な作者に要を出すことにOKを出してくださいありがとうございます」

不純 「そして、読者の皆さま。この作品を読んでくださってありがとうございます
とうございます」

神 「辛気臭いけど、これで最終話ってわけではないよ」

不純 「はい。次話もしっかりあります。まだ書いていませんが」

神 「今回は人物紹介は休むね。次話ではしっかり載せるけど。では最後に」

不純と神 「誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

キャラクターの名前もまだ応募しております」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5922x/>

転生者の祓魔師

2012年1月14日09時46分発行